

The Order of Friars Minor

あなたがたはみな兄弟

小さき兄弟会
会憲第三章に基づく
生涯養成のための資料



Rome 2004

小さき兄弟会

あなたがたは皆兄弟である

(マタイ 23:8、未裁可会則 22:23)

会憲第三章に基づく生涯養成の手引き

ローマ

小さき兄弟会養成学問担当総本部事務局

2004年

目 次

はじめに	9
「あなたがたは皆兄弟である」	11
第一部 序章	17
I 兄弟的交わりに関するフランシスカンの用語	17
1. 《あなたがたは皆兄弟である》（未裁可会則 22：33）	17
2. 主は私に兄弟たちをお委ねになりました（遺言 14）	19
3. 生き方（未裁可会則 8:9）	21
4. 従順に生きる（全兄弟会への手紙 2）	24
5. 主に仕える（未裁可会則 9:11 参照）	26
6. 霊的に生活する（裁可会則 16:5）	26
7. 皆おしなべて小さき兄弟と呼ばれるべきである（未裁可会則 6:3）	28
8. すべての兄弟はカトリック信者であるべきです（未裁可会則 19:1）	30
考察のための提言	32
個人的考察のために	32
共同体としての考察のために	33
II 共同生活から共同体における兄弟的生活へ	35
1. 第二バチカン公会議前の共同生活	36
2. 第二バチカン公会議後の兄弟的生活	37
考察のための提言	41
個人的考察のために	41
共同体としての考察のために	41
III 兄弟共同体の起源	43
1. 会憲第 38 条と 40 条の意味と重要性	43

2. 兄弟共同体の神学的起源.....	46
3. 兄弟共同体の人間的起源.....	51
4. この考え方の帰結と困難さ	54
考察のための提言	56
個人的考察のために	56
共同体としての考察のために.....	58
 第二部 賜物であり任務でもあるフランシスカン兄弟共同体...61	
I 兄弟共同体の建設	61
1. 「兄弟共同体を築くように招かれて」	61
2. 会憲に照らして	62
3. 広範囲に及ぶ任務	63
4. すべての兄弟の任務.....	65
5. 破壊ではなく、建設を	66
6. 兄弟共同体を建設する手段	69
考察のための提言	73
個人的考察のために	73
共同体としての考察のために.....	75
II 兄弟共同体における人間的現実	77
1. 三位一体に基づく成熟を目指して	77
2. 人間としての成熟のしるし	79
3. いくつかの問題点	81
4. 成長の糧.....	83
考察のための提言	88
個人的考察のために	88
共同体としての考察のために.....	88
III 平等と多様性	91
1. 多様性の恵みと賜物.....	91
2. 平等であることの恵みと義務.....	93

3. 平等である範囲とそれについて見られる進歩(会憲3章)	95
4. 世俗的誘惑と不平等への新たな誘惑	97
5. 多様性の中に平等を形成する	99
考察のための提言	101
個人的考察のために	101
共同体としての考察のために	101
IV 兄弟間の親しさ	105
1. 兄弟的一致を深めること	106
2. 兄弟的交わりの生活に求められること	109
考察のための提言	114
個人的考察のために	114
共同体としての考察のために	116
V 兄弟的な矯正	119
1. 兄弟会への召命、恩寵(恵み)と罪の間	119
2. 成長する兄弟たちと兄弟共同体	120
3. 召命への忠実さと兄弟的矯正	121
4. 兄弟的矯正の「技」と方法	124
考察のための提言	129
個人的考察のために	129
共同体としての考察のために	130
VI 兄弟共同体の「大切な人たち」	131
1. 「・・・弱い兄弟、高齢の兄弟、病気の兄弟、その他の兄弟たち・・・」	131
2. 兄弟共同体の「大切な人たち」	134
3. 兄弟共同体の真実：「小さき人々」	136
4. 兄弟的な態度	138
考察のための提言	143
個人的考察のために	143
共同体としての考察のために	144

VII 小さき兄弟たち.....	147
1. 私たちのアイデンティティーはその名称に表れている.....	147
2. 私たちの間での小さき者であること.....	150
3. 他者に対して小さき者であること.....	153
4. 小さき兄弟たちの共同体が選択するもの.....	156
考察のための提言.....	159
個人的考察のために.....	159
共同体としての考察のために.....	160
VIII 福音化する兄弟共同体.....	163
1. 私たちの生活の一側面.....	164
2. 自らを福音化する.....	165
3. 光を与えるような存在.....	166
4. 自分のためだけではない兄弟共同体.....	167
5. 創造的な兄弟共同体.....	168
6. 共同責任を負い、協力する兄弟共同体.....	169
7. 教会および兄弟会における兄弟共同体.....	171
考察のための提言.....	173
個人的考察のために.....	173
共同体としての考察のために.....	174
第三部 フランシスカン兄弟共同体の活性化.....	177
I 兄弟的生活と兄弟共同体の活性化.....	177
1. 活性化は必要か？.....	177
2. 活性化、それは不便なこと！.....	179
3. 活性化、それは義務！.....	181
4. 共同生活を活性化することを選択する.....	182
考察のための提言.....	184
個人的考察のために.....	184

共同体としての考察のために.....	184
II 兄弟的生活と共同責任	187
1. 責任はどこから始まるのか	187
2. 人は他者に対して、どの程度まで責任があるのか	188
3. 共同責任、それは一つの生活様式	189
4. どのような行動が人に責任感を持たせるか	191
考察のための提言	194
個人的考察のために	194
共同体としての考察のために.....	194
III 兄弟共同体の活性化のために奉仕する管区長と修道院長	197
1. 足を洗う奉仕.....	197
2. フランシスカンの權威の行使の仕方	198
3. 困難と挑戦	200
4. 証しの重要性.....	202
考察のための提言	204
個人的考察のために	204
共同体としての考察のために.....	204
IV 兄弟的生活と修道院会議.....	207
1. 兄弟的生活を表現する場である修道院会議	207
2. 修道院会議を開く	209
3. 修道院会議におけるさまざまな役割.....	214
考察のための提言	217
個人的考察のために	217
共同体としての考察のために.....	217
V 兄弟的生活と生涯養成.....	219
1. 生涯養成、それは回心の一つの過程.....	220
2. 生涯養成、それは兄弟共同体に不可欠のもの.....	224
考察のための提言	227
個人的考察のために	227

共同体としての考察のために.....	228
VI 兄弟的生活、それはコミュニケーションと対話の場....	229
1. 対話.....	229
2. 言葉をつくる！.....	230
3. コミュニケーションを学ぶ.....	230
4. 兄弟共同体は語ることを許される.....	231
5. 実践：頭と心をつ一つにする.....	233
6. 関係性の持つ強み.....	234
考察のための提言.....	235
個人的考察のために.....	235
共同体としての考察のために.....	236
VII 共同体の識別.....	239
1. フランシスカンの様式.....	239
2. 個人として、また共同体としての挑戦.....	240
3. 初期の兄弟共同体における識別.....	242
4. 聖霊のしるしとそうでないしるし.....	244
考察のための提言.....	247
個人的考察のために.....	247
共同体としての考察のために.....	247
付録.....	249
I 規則に定められた修道院会議.....	249
II 本会の規則に定められた修道院長と修道院会議の役割と責任の範囲.....	251
1. 序.....	251
2. 修道院長の役割と職責.....	253
3. 修道院会議の役割と職責.....	261
4. 結論.....	263

はじめに

兄弟共同体は世界および教会における私たちの在り方です。フランシスカンの生活は兄弟共同体以外の形では存在しません。私たちの召命は兄弟となることであり、私たちの基本法は愛の掟です（遺言4）。また、私たちの兄弟的生活の基盤は心を開き合い、比較的に見つめ合い、受け入れ合い、対話することで成り立っています。そうすることが、共通の福音的プロジェクトを啓発し、強化し、実行に移す道具となります。そうすることで、創造性を刺激し、自分自身と他者に対する信頼を回復する助けとなるような新しい動機が生まれるのです。

兄弟共同体は与えられた賜物であると同時に築いて行くべき任務です。つまり、神の召し出しであると同時に人間の現実であるということです。神の召し出しとしては、兄弟共同体は、祈り、御言葉の傾聴、御聖体、ゆるし、そして和解によって育まれます。人間の現実としては、兄弟共同体は、独自の掟、要求、手段を持っています。それは、本物の関係であり、親しさであり、友情であり、快活さであり、礼節であり、奉仕です。

兄弟たちが兄弟共同体という賜物を受け入れ、絶えず築いて行くのを助けるために、養成学問担当総本部事務局は、1993年に開始した仕事を継続し、国際委員会の協力を得て、「**あなたがたは皆兄弟である**」という手引きを作成いたしました。この手引きは、初期および生涯養成の期間に兄弟性というテーマについて個人として、また兄弟共同体として考察するために役立つ資料を提供しています。

この手引き作成の音頭を取ってくれた養成学問担当総本部事務

局に対し感謝すると共に、「あなたがたは皆兄弟である」を完成に至らしめてくださった兄弟ホセ・マリ・アレギ、兄弟ピエール・ブルネット、兄弟ヨハネス・フライヤー、兄弟サウロ・ザモラノ、兄弟チェザレ・ヴァイアンニ、兄弟セバスチアン・クレマー、兄弟ホセ・ロドリゲス・カルバッリョ、兄弟セバスチアン・ロペスに感謝を捧げます。兄弟という賜物を受け入れ、共同体を「キリストにおいて結ばれた家族のように」築き上げる（会憲 45:1）うえで、倦むことなく前進し、人間として、キリスト者として、修道者として、完全に成熟してゆく（会憲 39）ことができるよう、本会のすべての兄弟に、この手引きを利用なさることをお勧めいたします。

総長 兄弟ジャコモ・ビニ

ローマ、2002年1月16日

フランシスコ会の最初の殉教者の記念日に

「あなたがたは皆兄弟である」

(マタイ 23 : 8、未裁可会則 22、23)

養成学問担当総本部事務局は、1987年に発行された「小さき兄弟会会憲」を読んで理解する助けとなる資料の作成に、これまで何年も取り組んでまいりました。

そのことを念頭において、事務局は1993年に「**フランシスカン・アイデンティティー：会憲を読み解くために**」を、そして1996年には「**祈りと献身の精神**」を発行いたしました。それと同じ目標を持って、このたび本書《**あなたがたは皆兄弟である**》(マタイ 23 : 8、未裁可会則 22、23)をお届けします。

本書が兄弟たちおよび兄弟共同体の役に立つ資料となることを願っております。本書は、会憲第三章を心に留め、私たちフランシスカン・カリスマの「優先課題」の一つである兄弟性を深く研究する一助となるような生涯養成のための手引きとなるはずです。このようにして、兄弟たちは《絶えざる霊的刷新》(総則 2 : 2)を果たすことができます。

実際、兄弟共同体はフランシスカンの生活プロジェクトの基本理念の一つです。この生活に招かれた人たちの召命とは、すなわち、兄弟共同体への召命、兄弟となることへの召命です。

フランシスカンの兄弟共同体の起源は、フランシスコがその遺言の中で「主が私に兄弟たちをお委ねになりました時・・・」(遺言 14、2 チェラ 15、三人の伴侶 25-29)と述べていることに由来します。

これらの言葉は、小さき兄弟会の兄弟共同体の独創性と主な特

色の構成要素をよく示しています。

- 「主が私に兄弟たちをお委ねになりました」ということは、主が兄弟たちをお与えになり、賜物としてくださるということです。ここで強調されるのは、兄弟が無償の賜物であること、兄弟共同体や兄弟たちのグループが無償の賜物であるという点です。兄弟には存在理由がありますが、費用対効果を持つものでもなければ、生産的でもなく、機能的でも、交渉の余地のあるものでもありません。兄弟とは、同じ家族に属し、母がその息子を愛する以上に兄弟を養い愛するべきものです（裁可会則 6:7-8）。兄弟たちは他の兄弟たちを産むためにいるのです。
- 「主が私に兄弟たちをお委ねになりました」ということは、すべての中心が兄弟たちの人間関係にあるということです。ここで強調されるのは、兄弟たちがその関係において、また兄弟を持っているという意味において本当の兄弟であるという点です。それは、相互性が兄弟共同体、すなわち兄弟関係の構成要素であるということです。
- 「主が私に兄弟たちをお委ねになりました」ということは、小さき兄弟会の兄弟共同体を形成する兄弟たちのグループにおいては、兄弟たちが平等であるということです。

兄弟共同体とは「フォルマ・ヴィテ」（生活様式）の核となるテーマの一つであるだけでなく、その内面的な一貫性において、他のテーマも内包しており、プロジェクト全体を凝縮したものです。兄弟共同体とは、主がフランシスコに「兄弟たちをお委ねになった」時に（遺言 14 参照）、教会の中で生きるようにと彼に示された「聖福音の様式」なのです。兄弟であることと福音を守ること

とは同等であり、同時的なものです。兄弟共同体とは、フランシスカン生活を生きる具体的な様式のことです。それゆえに、兄弟共同体、すなわち兄弟関係は、小さき兄弟たちの会則と生活においてすべてにまさり、すべての目的なのです。

関係としての兄弟性が中心であること、つまり、「家族である」がゆえに共に集まった**兄弟共同体**としての兄弟たちのグループの中心性は、最初の数年が経過して、兄弟たちの生活が発展するにつれ、その卓越性と重要性を失って行きました。そればかりか、兄弟たちのグループを**兄弟共同体**、すなわち小さき兄弟たちの共同体とみなす考えまでもが失われてしまったのです。それは、さまざまな理由から、兄弟たちの生活の他の側面がより傑出するようになったためです。**共同生活**すなわち共通の会則を守ることという兄弟間の法的な関係が相互性の関係よりも重視され、奉仕よりも力としての権威の概念が重視されるようになったのです。

現在の1987年の会憲は、兄弟性をカリスマとして最優先したフランシスコの選択を再び取り上げています。この場合の兄弟性とは、共同体の兄弟間の**関係**と考えても、兄弟共同体を形成する兄弟たちの**グループ**と考えても、共同の兄弟的生活と考えても、兄弟としての生活と考えても差し支えありません。

兄弟性の復権は、会憲がフランシスコのように、会や管区や修道院を構成する兄弟たちの集まりを名付けるために、**兄弟会**という用語に与えた優先性に特に良く示されています(会憲1:1:87)。それはまた、特に、**兄弟(Friar)**という用語が頻繁に使われていることにもよく示されています(会憲1:1-2、38、39等)。そして、最後に、兄弟間の人間関係に与えられた優先性によく示されています。そのために会憲では、**兄弟的交わり**(会憲1:2、42:2)や

兄弟的一致（会憲 42：1、43）、霊的で心のこもった関係（会憲 50）、兄弟たちとの固い一致（会憲 45・・・）について語っています。また、兄弟的生活を共同で営むこと（会憲 38）や、兄弟的な交わりの生活（会憲 42：2）など、一致して会則と会憲を守ること（会憲 42：2 参照）が語られています。

本書は、兄弟たちが兄弟的な交わりの生活について深く考え、見直すための支えおよび手引きとしてご提供するものですが、そのテーマは、**兄弟性**という言葉の持つ重要な理念を考慮に入れています。すなわち、兄弟間の人間関係としての兄弟性、修道院、管区または会全体を形成する兄弟たちのグループとしての兄弟性、そして共同生活の様式としての兄弟共同体です。

このテーマが如何に歴大なものであり、複雑なものであるかは、詳細で、数ある、断片的かつ部分的に存在する文献が証明していますが、それに「**あなたがたは皆兄弟である**」は取り組もうとしています。そのことを心に留め、内部（ad intra）と外部（ad extra）の両面を持つものの、私たちが注意を集中したのは、フランシスカンの兄弟性の持つ内部（ad intra）的な側面です。それゆえに、「**あなたがたは皆兄弟である**」は、兄弟性に関する完璧な論文であると自負するものではなく、むしろ、兄弟共同体の生活に最も重要と思われるいくつかのテーマを扱うものです。「**あなたがたは皆兄弟である**」で提供する資料は、三部に分かれています。第一部は「**序章**」であり、第二部は「**フランシスカンの兄弟性**」であり、第三部は「**兄弟的生活の活性化**」です。これら三つの部分の後には、二つの「**付録**」がついています。

「**序章**」は三つのテーマを扱っています。兄弟的交わりに関するフランシスカンの用語、兄弟共同体の起源、そして、共同体生

活から共同体における兄弟的生活へ、です。「**賜物であり任務であるフランシスカンの兄弟共同体**」と題した第二部は、八つのテーマを扱っています。兄弟共同体の建設、兄弟共同体の人間の現実、平等と多様性、兄弟間の親しさ、兄弟的な矯正、兄弟共同体の「大切な人たち」、小さき兄弟たち、そして福音化する兄弟共同体です。本書の要である第三部「**兄弟的生活の活性化**」では、次のテーマを扱っています：兄弟的生活と兄弟共同体の活性化、兄弟的生活と共同責任、活性化のために奉仕する管区長と修道院長、兄弟的生活と修道院会議、兄弟的生活と生涯養成、コミュニケーションと対話の場である兄弟的生活、そして兄弟的生活と識別です。「**あなたがたは皆兄弟である**」の最後に来る二つの「付録」では、修道院会議と修道院長に関する法的規定について述べられています。

扱われるテーマは、兄弟共同体のさまざまな集まり、たとえば、修道院会議、生活の見直し、研究会、黙想会などの集まりで活用されるべき素案として、国際委員会の手により作成されました。それゆえに、「**あなたがたは皆兄弟である**」は、極めて実際的な目標を持っています。この書は、私たちの共同体で兄弟性が提示する具体的な問題に取り組むようにと私たちを促し、兄弟性を強めるための方向性を与えてくれます。

この具体性を心に留め、また、現実生活で起こる結果に気付くことは兄弟共同体の一人ひとりおよびすべての人の問題であることを心に留め、各章の最後に、考察のための手引きと質問を設けました。それらが、本書の内容を自分のものとし、個人の生活プロジェクトと兄弟共同体の生活プロジェクトを立案する助けとなることを願っております。グループで取り組むための**手順**として、以下のことをお勧めします：

- 各兄弟は、兄弟共同体の集まりの前に、提示されたテーマをよく読んでおくこと。
- 共通のテーマを皆に示すことを任された兄弟は、指示された資料だけでなく、テーマに関する他の参考資料にも目を通すこと。いずれにせよ、大切なことは、テーマが兄弟共同体の具体的な状況を考慮に入れたものであることです。
- 共同体としての取り組みは、最終的に何らかの具体案を導き出すものであること。
- 兄弟共同体の兄弟の一人が書記を務め、対話によって生まれたアイデアや結論を書きとめること。
- 兄弟共同体で研究した一つあるいは二つ以上のテーマを、毎月の黙想会で祈りをこめて深く考えるとよいでしょう。

「あなたがたは皆兄弟である」は夢でしょうか、それとも任務でしょうか？ 私たち一人ひとりが、各兄弟共同体が、生活の中で答えを出し、今日ユートピア（理想）と思われることを明日の喜ばしい現実とする任務を持っているのです。

養成学問担当総本部事務局長

兄弟 ホセ・ロドリゲス・カルバッリョ、OFM

第一部 序章

Ⅰ 兄弟的交わりに関するフランシスコの用語

兄弟間の母子関係をも越えた愛の関係は、フランシスコの書き物の中で豊かな、多様性に満ちた用語を持っています。この用語は、兄弟性がフランシスコの選んだ福音的な生活様式の最も重要な特徴の一つであることを示しています。

彼の書き物を読み返し、その言葉づかいに注意を払うと、フランシスコの考えの中で兄弟性というものが生まれた由来、その生活において占める位置、そしてその極めて本質的な特徴をいっそう良く理解することができます。フランシスコがこの言葉とそれに対比する他の言葉で何を考え、実践し、伝えていたのかを理解するためには、「兄弟 (brother)」という言葉キーワードとして、文章を読むことが大切です。

1. 《あなたがたは皆兄弟である》（未裁可会則 22 : 33）

兄弟的な交わりについて語るためにフランシスコが用いた用語の中で、第一の言葉は「兄弟 (brother)」という名詞です。フランシスコが 306 回も用いたこの用語は、彼の書き物の中で 410 回使われている「主」という言葉の次に最も多用されている名詞です。これは、フランシスコが自分のことを称する時に 15 回使っている名前であり、彼の書き物の中で 10 回出てくる兄弟性 (fraternity) と同じく、《至高の主、イエス・キリストとその聖なる御母の生活と清貧に従うこと》（聖クララへの遺言 1）をフランシスコと共に選んだ人たちを指すために用いた言葉です。

何よりもまずフランシスコにとって、私たちはみな福音に基づ

く兄弟であり、そこからあるべき姿が生まれます。すなわち、祈る兄弟であり（裁可会則 3:1-9）、この世をめぐる兄弟であり（裁可会則 3:10-14）、金銭を受け取らない兄弟であり（裁可会則 4）、働く兄弟（裁可会則 5）などです。

小さき者たちの兄弟共同体においては、主キリストとその福音の下に築かれる兄弟関係、一致、平等以上に重要なものではありません（未裁可会則 1:1、裁可会則 1:1）。

「兄弟」という用語が本質的に肉親を表す用語であるがゆえに、兄弟であるということは、自分の兄弟との本物の人間関係によってつくられる存在です。つまり、人は自分一人では兄弟であることはできず、フランシスコの兄弟共同体において最も重要なことは兄弟間の関係です（未裁可会則 1:1）。

しかし、この関係は「対人的」なものではなくてはなりません。フランシスコはこの側面を自分の書き物の中で、一連の言葉を用いて、重視し、際立たせています。たとえば、「相互的に」は 7 回、「交互に」は 4 回、「彼らの間で」は 4 回、「互いに仕え合うべきである」は 8 回、「一人が他の人に対して」は 4 回、使われています。また、これに他の表現も付け加えることができます。たとえば、「兄弟たちはどこにいても、また、どんな所で出会っても」（未裁可会則 7:15、裁可会則 6:7）、「尊敬し合わねばならない」（未裁可会則 7:15）、「自分自身のように」（全キリスト者への手紙Ⅱ:27、43、未裁可会則 4:5、6:2、裁可会則 6:9）、「その人の面前で」（訓戒の言葉 25）、「彼らに対し」（裁可会則 10:5）、「管区長は兄弟たちと共に」（未裁可会則 18:1）、「兄弟たちから引き離されること」（訓戒の言葉 3:9、全兄弟会への手紙 3, 14, 17, 20）。これらの表現はいずれも、小さき兄弟間の母性愛をも越えた愛の対人的な側面

が、フランシスコの書き物においてどれほど重視されているかを示しています。

それゆえ、フランシスコは、人間関係が前提とする不可避の相互性と相互的な主体性というものを強調したのです。彼はその生活においても、書き物の中でも、相互性、すなわち、兄弟と共に、兄弟のために、兄弟の間に在ることを優先しました。《兄弟は、ためらうことなく互いに自分の必要を知らせ合って、自分に必要なものを見だし、また、それを差し出して助けるべきである》（未裁可会則 9:10）とあります。ですから、すべての兄弟は、互いに「同じ家族の者」（裁可会則 6:7-9）であり、顔を突き合わせ、肩を並べて生きる授受の関係なのです。すべての兄弟が他の兄弟に対して責任を持ち、チェラノが描く《自分自身をも与えようとしていたフランシスコ》（2 チェラ 181）のように、互いに自分を捧げ合う初期の兄弟たちの「三人の伴侶」のように、《彼らには、キリストへの愛のためだけでなく、兄弟たちの魂と体の救いのために、自分の命を捨てることはたやすいことのように思えた》（三人の伴侶 41）ほどでした。

2. 主は私に兄弟たちをお委ねになりました （遺言 14）

フランシスコが用いているもう一つの非常に重要な表現は《主は私に兄弟たちをお委ねになりました》（遺言 14）です。自分の生涯で最も重要で価値ある瞬間、死が差し迫っていた時、フランシスコは自分の兄弟会の創設を示唆しました。彼は、簡潔な文章で、その兄弟的な生活の始まりが神の御意志によるものであったことを述べています。《主が私に兄弟たちをお委ねになりました

時、私が何をなすべきかを教えてくれる人は、だれもいませんでした。しかし、いと高きお方が自ら、聖福音の様式に従って生活すべきことを、啓示してくださいました》(遺言 14)。

フランシスコに召命が与えられたことと最初の兄弟たちを委ねられたことが、福音的な生活の計画に組み入れられたのです。彼の生活の選択、すなわち、兄弟たちと共に福音を生きることは、神の啓示に対する従順につながるものです。ですから、フランシスカンの兄弟性は、フランシスコの生活において召命計画の一部をなしていたと、そして、その兄弟性を通して彼は、神の御意志に従い、福音を自分の生活様式として受け入れたとすることができるでしょう。

フランシスコはこの召命を、当時の伝統的な修道生活の様式に基づく意味での「キリストに従う者(sequela Christi)」と考えていたわけではありません。むしろ、すでに述べたように、彼は兄弟的生活を、福音の精神でキリストに従うための中核と考えていたのです。

《主は私に兄弟たちをお委ねになりました》(遺言 14)。フランシスコにとり、兄弟は、それゆえに兄弟共同体は、聖にして愛情に満ち、心地よく謙遜で平和に満ちた兄弟イエス・キリスト（全キリスト者への手紙 II:56）の救いの出来事における賜物であり恵みであったのです。ですから、兄弟とは、御自分を与えてくださり、そばにいてくださる主からの賜物なのです（1 チェラ 24-25）。ですから、兄弟とは、全き善、至高の善にまします神における善なる兄弟なのです。別の言い方をするなら、福音が私たちに兄弟を与えてくださり、私たちを兄弟としてくださるということです（三人の伴侶 28-29）。あらゆる善を語り、そして、行われる

お方以外に主はおられないのですから（訓戒の言葉 7:4、8:3、12:2）、兄弟に霊的に仕え、従うようにと主の霊が私たちの心に吹き込んでくださる愛以外の愛はないのです（未裁可会則 5:12-13）。

このことから、兄弟とは恵みであり、兄弟共同体も恵みであるということがわかります。つまり、兄弟たちが示され、生まれる「同じ家族の者である」ということは、存在理由があるけれども、費用対効果を持つものでもなければ、生産的でもなく、機能的でも、交渉の余地のあるものでもないということです。兄弟たちは、「同じ家族の者である」ために、母性的な愛以上の愛で互いを愛するために、互いに愛し合うために（シエナでの遺言 3 参照）存在するのです。互いに愛し合うことを正当化する必要もなければ、理論的に説明する必要もありません。それ自体が証明しているからです。それは、愛し合う多くの人々によって、また、主が私たちを愛してくださった愛を具現することによって、そしてすべての愛の交わりの源であり、模範であり、愛が最も優れたものである（1 コリント 13:13 参照）ことを示してくださった父と子と聖霊の交わりを具現することによって、一生涯をかけるに足る任務なのです。

3. 生き方（未裁可会則 8:9）

フランシスコにとり、兄弟共同体とは、イエス・キリストの教えと模範に倣うことを目指して福音に従って生きる「生き方」なのです（未裁可会則 1:1）。

彼の書き物を読んでもみると、兄弟共同体を「生き方」と捉える考え方が「小さき貧者」にとって重要であったことは疑う余地が

ありません。フランシスコは、特に未裁可会則の中で、「生き方」について何度も語っています。「神の示しを受け」、この生活に入ること、そしてフランシスコのグループに入ることを望む人は（未裁可会則 2:1 参照）、兄弟たちの「生活様式」を受け入れなければなりませんでした（未裁可会則 2:2 参照）。それゆえに、すべての兄弟はこのフォルマ・ヴィテに従って奉仕することを選択しなければならないのです（未裁可会則 8:9 参照）。自分に委ねられた兄弟たちの善を常に求める責務を負う管区長たちは（未裁可会則 4:6）、兄弟共同体を統治するにあたり、兄弟たちが大切にしている「生き方」に反するようなことがあっては決してなりません（未裁可会則 4:3 参照）。

とはいえ、兄弟共同体におけるこの「生き方」は、どのような仕事やどのような修道生活とも、また、この世との関わりやそのために必要なこととも一致するわけではないことを忘れてはなりません。「生き方」、すなわち、兄弟として生きる様式とは、それ以上のものなのです。フランシスコにとり、それ以上の何かがあって、それが生活を形成し、生み出していました。それ以外のものはすべて、仕事も、修行も、この世と教会との関わり方も、兄弟間の話し合いを活気づける態度などのすべてが、上記の兄弟的な生き方によって決まるのです。

フランシスコは一つひとつのことを定義する要素をイエス・キリストの中に見いだしていました。イエス・キリストは兄弟となるために私たちのもとに来られ、兄弟として御自分の命を私たちに差し出してくださいます。それゆえ、フランシスコは《いと高き主イエス・キリストの生活と清貧に従う》以外のことは何も欲していなかったのです（聖クララへの遺言 1 参照）。フランシスコ

はその「訓戒の言葉」の中で、自分がキリストにおいて命に出会ったことを明らかにしています。《主は仰せになりました。私は道であり、真理であり、命であると》（訓戒 1）。彼は、《命を与えるのは霊である》（訓戒 1:6）というキリストの言葉の意味を理解していました。いかなる状況においても命を見いだすためにキリストに従うことを教えてくださるのは霊なのです。《主の羊たちは艱難と迫害、恥辱と飢え、弱さと誘惑、その他の事柄においても主に従いました。そして、これらのために主から永遠の命を受けたのです》（訓戒 6:2）。

フランシスコは、神の啓示に従っている時、キリストの中に命を見いだしたように生活を選択しました。だからこそ、自分自身と兄弟たちのために、イエス・キリストの福音の生活を選んだのです。《小さき兄弟たちの会則と生活はこれである。すなわち、私たちの主イエス・キリストの聖福音を守ることである》（裁可会則 1:1、未裁可会則 1:1）。そして彼は、福音に基づくイエス・キリストのこの生活を思い起こし続けたのです。福音こそは、唯一の源として、兄弟的生活を形成してくれるはずのものでした。《それで、私たちは主の言葉と生活、また、主の教えと聖なる福音を守ろう。主は、私たちのためにへりくだって御自分の父に祈られた》（未裁可会則 22:41）。

ですから、この兄弟共同体に入ることを望む人はだれでも、《この生活と会則を常に守ることを約束して、従順の生活へ受け入れられる》（裁可会則 2:11）。フランシスコにとり、兄弟共同体で生きることは、福音書に見られるイエス・キリストの御生活そのものによって形作られることと同じでした。そして、このことは兄弟一人ひとりに当てはまると同時に、兄弟共同体にも当てはま

ることで、その生き方はあらゆる在り方、働き方、祈り方、この世と教会への身の置き方を受け入れるのです。

4. 従順に生きる（全兄弟会への手紙2）

フランシスコが自分の兄弟会の特色として描いたさまざまな価値をよく見ると、彼が清貧（6回）よりも従順（21回）の方を重視していたことがわかります。たとえば、「全兄弟会に宛てた手紙」の中では、彼は《すべての単純で従順な兄弟たち》に語りかけています。従順に生きることは、兄弟たちの生き方を表す特徴の一つです（未裁可会則 1:1、裁可会則 1:1）。フランシスコの書き物の文脈から、「従順に生きる」という表現で何を言わんとしていたかがわかります。

完全な従順について述べた「訓戒の言葉3」では、従順は《兄弟たちから引き離されることを望むより、むしろ迫害を忍ぶこと》であり、《兄弟のために自分の命を与えること》と考えられています（訓戒 3:9）。ここで言う従順とは、兄弟たちへの忠実さを表しており、特に困難な生活状況を含むものです。何が起ころうとも、フランシスコにとって兄弟は常に兄弟であり続けました。このように考えて来ると、従順は人生の苦難を超越した関係の基本としての兄弟関係を尊重することです。なぜなら、これまで見てきたように、従順は神からの贈り物だからです。それゆえに、従順は愛徳の姉妹であり（諸徳への挨拶 3 参照）、兄弟たちが意見の異なる時にも愛徳を実践できるように助けてくれるものです。兄弟への従順を忠実に守ることは、フランシスコにとって、命を与え、肉体を克服するのを助けてくださる聖霊に従うことと同じ

意味を持っていました（諸徳への挨拶 15 参照）。逆に、従順の外でさまようことは、主の掟にそむくことなのです（未裁可会則 5:16 参照）。

その一方で、フランシスコは盲目的な従順を求めることはありませんでした。時にはそのように見えることもあったかもしれませんが。事実、彼は従順について語る時、兄弟共同体や生き方との関連において語っただけではなく、特定の兄弟の魂のことを念頭に置いてもいたのです。従順は救霊に関わることを優先しなければなりません（未裁可会則 5:3 参照）。それゆえ、いかなる管区長も、兄弟の良心に反するようなことを命じてはならないのです。フランシスコは死ぬ間際に生き方への、すなわち「会則」と「遺言」への完全な従順を願いましたが、彼がそこまで繰り返し真剣に従順を呼び掛けたことの真義は、彼が兄弟共同体を神からの賜物として、また、兄弟たちがキリストの福音に従って生きることにより真の命を見いだす場として考えていたことに思いを致す時に初めて理解されるものです。このように考えて来ると、従順とは、自らを私たちの兄弟であられるキリストのご生活そのものに加わらせることであり、その意味で、キリストのうちに兄弟的な生活の完成を再び見いだす兄弟を大切にすることなのです。

聖フランシスコは、従順というものを、目下の者を目上の人に従わせるような単一方向の意味で捉えることをせず、むしろ、相互的なものと捉えていました。それゆえ、そこには他の兄弟たちに仕える管区長のような「長上」という概念も含まれるのです。同様に、相互的な従順は、兄弟たちが互いに仕えあう方法であり、兄弟への従順は各人が他の兄弟の面倒をみるための方法でもあります。また、従順は、兄弟への配慮や愛情を示すフランシスカン

的な方法、他者に寄り添う方法であるとも言えます。兄弟的な奉仕と考えられていたこの兄弟的な意味の従順は、次第に目上の者とその決定への従順へと転化されることにより、変っていったのです。

5. 主に仕える（未裁可会則 9:11 参照）

フランシスコはどの兄弟も母が子を愛し養うように兄弟を愛し養わなければならないと言っていますが（未裁可会則 9:11 参照）、神への愛の表明としての兄弟への奉仕は、兄弟共同体に関する非常に示唆に富む捉え方を示しています。愛し養うという表現は、子を産み、その生まれたばかりの命を養う母に特有の役割を思い起こさせます。その意味で、兄弟たちの誓約とは、相互愛によって守られた環境の中で成長し、発展するための生活と場と可能性を与えることです。また、愛し養う母のイメージは、他者のうちに生まれ、働く霊、すなわち兄弟共同体それ自体の中で生活する兄弟を助けることを思い起こさせます。病気の兄弟（訓戒 24:1 参照）や遠く離れている兄弟（訓戒 25:1）を愛し養うことは、この母性的な精神が具体的に表れたものです。与え、支えることを基盤とした兄弟的な雰囲気の中では、兄弟たちは救霊に関する事柄においても熱心に従うことができます（未裁可会則 4:3 参照）。

6. 霊的に生活する（裁可会則 16:5）

フランシスカンの兄弟共同体は「霊的な」関係の上に築かれています。他者を霊的な兄弟と見ることは（裁可会則 6:8 参照）、フ

ランシスコにとり、血縁関係を越えた一致を生み出します。なぜなら、それは主の霊に基づいているからです。

この主の霊とその聖なる働きを持つ（裁可会則 10:9）ということは、兄弟共同体が常に求めなければならない最も重要なことです。兄弟共同体および各兄弟の生活はすべて、霊に従って歩む道なのです（未裁可会則 5:5 参照）。管区長は兄弟たちを訪れて、「霊的に戒め励まさなければなりません」（未裁可会則 4:3）。つまり、主御自身の霊が示しておられるように「会則」に従って生きることです。兄弟たちは働くにせよ、勉学するにせよ、何をするにせよ、すべてにおいて《聖なる祈りと献身の霊》を持っていないければなりません（裁可会則 5:2、聖アントニオへの手紙）。また、兄弟たちは特に非キリスト教徒のもとに赴く時は、すべてにおいて霊的に生活しなければなりません（未裁可会則 16:5 参照）。この特殊な場合においては、《霊的に生活する》とは、非常に明快な意味を持っています。つまり、《口論や争いをせず、神のためにすべての人に従い、自分はキリスト者だと宣言することである。もう一つの方法は、主の御心にかなうと判断するなら、神の御言葉を宣べ伝えることである・・・》（未裁可会則 16:5 参照）。

この文章によれば、霊的な生活には三つの要素が含まれます。すなわち、口論や争いを避けること、神への愛のためにすべての人に従うこと、そして、主の御心にかなうなら、神の御言葉を宣べ伝えることです。このことは、宣教の特別な状況に限られるものではなく、どのような場や状況にあっても、兄弟共同体の生活に必要なことなのです。裁可会則には、次のように書かれています：《兄弟たちはこの世をめぐる時、争ったり、口論したり、他人を裁いたりせず、小さき者にふさわしく、柔和で、平和をもた

らし、慎み深く、温和、謙遜であり、すべての人に対して、礼儀正しい言葉を用いて話すように勧める」（裁可会則 3:10）。この断片は、聖書が表現しているキリスト者の正しい行動と同じように、「霊に従って生きること」を表現するいくつかの行動様式を列挙しています。

このように捉えられた兄弟共同体は、主の霊の導きのもとに生きる一つの方法であり、内部の生活と世間との関わりの両方を特徴づけるものです。

7. 皆おしなべて小さき兄弟と呼ばれるべきである（未裁可会則 6:3）

フランシスコはいくつかの手紙の中で、自分のことを、《小さい》（全キリスト者への手紙 II:87）、《小さいしもべであり、無価値で弱い者である私》（全兄弟会への手紙 3）と表現しています。また、会則では、《皆おしなべて小さき兄弟と呼ばれるべきである》（未裁可会則 6:3）と述べています。それゆえ、フランシスコによれば、兄弟共同体とは小さき兄弟たちのことであり、会則とは《小さき兄弟たちの会則と生活》のことなのです（裁可会則 1:1）。小ささは兄弟共同体における兄弟たちの行動を表現し、特徴づけるものです。福音書には、《あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようにになりなさい》とあり（ルカ 22:26、未裁可会則 5:12）、兄弟共同体の外にあって求められている仕える様式としては、《小さき者としてとどまり、その家のすべての人に服従すべきである》（未裁可会則 7:2）とあります。小さき者として行動することができるということは、その兄弟

が本当に主の霊を持っていることの表れなのです（訓戒 12 参照）。

「小さき者たち」の定義は、聖フランシスコの清貧と謙遜に対する考え方を分かりやすくしてくれています。彼にとって、貧しく謙遜であるということは、イエスに従い、この世を旅人として寄留者として生きる生活を形成するものでした。清貧と謙遜という形で実践される小ささは、このような旅人となり寄留者となる条件であり、イエスに従って兄弟共同体に加わる目に見えるしるしなのです（裁可会則 6:2 参照）。「未裁可会則」の第 9 章では、兄弟たちに仕える小さきものとしての、この旅人であり寄留者であるという考え方が一層具体的に述べられています。《すべての兄弟は、私たちの主イエス・キリストの謙遜と清貧につき従うよう努め、使徒が言うように、食べる物と着る物があれば、私たちはそれで満足し、ほかのどんな物もこの世で持つべきではないことを覚えていなければならない》（未裁可会則 9:1）。神の御子の御托身の表現であるキリストの謙遜と清貧は、フランシスコにとって一つの新しい生き方でした。清貧は内面の謙遜を絶えず外的に表現するものです。清貧と謙遜が共に小ささをつくりあげるのです。生き方としての小ささは、フランシスコにとり、イエス・キリストとそのいと聖なる御母、そして使徒たちが生きたのと同じ生き方でした（未裁可会則 9:5 参照）。フランシスコは自分の兄弟共同体の生き方をイエスのそれに近いものであることを望んでいたため、キリストに忠実に従うために、清貧と謙遜に生きるようにと勧めたのです。フランシスカンの兄弟共同体の小ささの根底には、このキリストを中心とする核があることを忘れてはなりません。この具体的な生き方が望んでいることは、キリストの御生活を修道生活、社会生活、政治生活、日常生活のそれぞれにお

いて実践することなのです。それは単なる信心深い慣習ではなく、社会の一番底辺に置かれた人たちを優先するという現実の社会的選択なのです。

8. すべての兄弟はカトリック信者であるべきです（未裁可会則 19:1）

フランシスコは自分の兄弟会をカトリック教会の中にしっかりと据えました：《すべての兄弟はカトリック信者であるべきで、カトリック的に生活し語らねばならない》（未裁可会則 19:1）。それゆえ、彼は新たに入ってくる兄弟たちがカトリックの信仰を吟味されてから受け入れられることを望んでいました。《管区長は彼らを、カトリックの信仰と教会の秘跡について、入念に調べなければならない》（裁可会則 2:2）。そればかりでなく、彼は自分自身の名と兄弟たちの名において主なる教皇とローマ教会とに、従順を約束しました（裁可会則 1:2 以降参照）。フランシスコは「全兄弟会にあてた手紙」の中で、カトリック的であるとは自分にとってどういうことかをさまざまに示し、大切だと思っていたことを強調し、それを固く守ることを願っていると宣言しました（全兄弟会への手紙 40-44）。「裁可会則」もまた、カトリック的であるとは彼にとってどういうことであつたかを示してくれています。《それは、私たちが、常に聖なる教会の足下に臣下としてとどまり、カトリックの信仰を堅持し、堅く約束したとおり、私たちの主イエス・キリストの清貧と謙遜と聖福音を守るためである》（裁可会則 12:4）。

ここに、カトリック的であることの心髄を見ることができます。

すなわち、清貧と謙遜と聖福音を守ることです。当時の異端的な運動とは対照的に、フランシスコは、聖福音に従って生きるためには、貧しく謙遜であられたキリストの御生活にできる限り近づくためには、カトリック的であることが必要であると考えました。命の言葉、キリストの御体と御血、すなわち、生けるキリストを私たちに授けてくれるのは教会なのです（遺言 10:13 参照）。フランシスコは教会への従順を約束し、カトリックの信仰を敬虔に実践しましたが、それは、そうすることが、キリストの言葉と秘跡によって生き、キリストと結ばれる道であったからです。同時に、フランシスコは、裁くことをせず、争いを起こすこともなく、独自の福音的な生き方を通して、当時の封建的な教会と一線を画したのです。ローマカトリック教会との緊密な結び付きを再確認する一方で、彼はその同じ教会が行っていても、福音に反することはすべて分かっていました（たとえば、十字軍の一員としてスルタンを訪れた時のことからそれは推測されます）。教皇に深く献身しながらも、フランシスコは、当時の封建的な教会の決定や方針を無批判に受け入れることをせず、教会の決定を福音と対比させる方法を知っていました（教皇と枢機卿たちの面前での説教を参照）。彼の従順の目的は、秘跡と福音書に書かれた言葉に従ってキリストのように生きることでした。彼は、このことを教会と世界とに伝えたいと願っていました。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 裁可会則 6 : 7 - 8 を読む。

それに照らして :

●各兄弟が他の兄弟に対して抱いている信頼感について考える。

2. 訓戒の言葉 24 と 25 を読む。

それに照らして :

●これらの訓戒の言葉があなた自身の生活において何を求めているかを考える。

3. 次のことを自問してみる :

●以下のような表現は自分の生活の中で何を意味しているか:「あなたがたは皆兄弟である」、「主は私に兄弟たちをお委ねになりました」、「兄弟たちから引き離されることよりは、むしろ迫害を望む」、「兄弟たちは小さき者と呼ばれるべきです」、「兄弟たちはカトリック信者であるべきです」。これらの表現から生まれてくる具体的な要求とは何でしょうか。

●私は自分の兄弟共同体のすべてのメンバーを兄弟と感じているか。だれを兄弟と感じ、だれを兄弟と感じていないか。兄弟共同体の観点から見て、説明のつかない何かが自分の態度や行動にあるだろうか。兄弟的に生活するには、何ができるか、また何をすべきか。

●これらの側面を自分の個人的な生活プロジェクトに組み入

れるにはどうすればよいか。自分の個人的な生活においてどのように取り組むことができるだろうか。

共同体としての考察のために

1. 未裁可会則 9 : 1 を読む。

それに照らして：

- この部分から引き出される自分の生活への実際の影響について考える。

2. 未裁可会則 11 を読む。

それに照らして：

- 兄弟間の関係について考える。

3. 裁可会則 6 : 7 - 8 を読む。

それに照らして：

- 自分の兄弟共同体に見られる信頼度について考える。

4. 遺言 14 を読む。

それに照らして：

- 自分の兄弟共同体における報いを求めない生き方について考える。

5. 「共同体における兄弟的生活」（奉獻・使徒的生活会省 1996 年第 7 版）21-28 を読む。

それに照らして：

- いくつかの人間的な価値の実践について考える。たとえば兄弟共同体における、和睦、赦し、喜び、教育、友情、誠実さ、自己抑制、感受性、ユーモアのセンスなど。
- 兄弟共同体における感謝の念について考える。

6. 次のことを自問してみる：

- 上記の側面は私たちの兄弟的生活プロジェクトの中でどのような位置をしめているか。
- これらの側面を兄弟共同体の中で機能させるにはどうすればよいか。

Ⅱ 共同生活から共同体における兄弟的生活へ

修道生活はここ数十年間、重大な変革を遂げています。何世紀もの間数々の出来事からの攻撃に耐えてきた生活様式は、数年の間に大きく変化しました。

修道生活の歴史的な流れを考えてみれば、ある重大で本当の「決裂」（決定的変化）があったことがわかるでしょう。たとえば、個人の世捨て人としての生活を重視する隠遁生活から修道院生活への転換がありました。ここでは、砂漠から大修道院へと移行する過程で、共同体的な要素がある程度の妥当性を確立しました。その後も、托鉢しながら旅をする生活様式を守るために、大修道院から出てゆく修道者がおり、それが、古典的な修道院制度から托鉢修道会への移行でしたが、その中にアシジの聖フランシスコとその仲間たちの修道会も含まれます。

ですから、第二バチカン公会議が教会の体制を刷新し、絶えず変化する新しい社会に順応させようとの試みにおいて、修道者たちに根源に立ち返って、本来のアイデンティティーを再発見し、新たな時代に適応するようにと願ったのも無理からぬことです（修道生活の刷新・適応に関する教令2参照）。

実際、第二バチカン公会議前の修道生活は、大方似ているか、ほとんど同じで、明確なモデルを定めた一つの担当省によって規定され、その規定に沿って既存の修道会や新たな修道会は形成されたのです。

第二バチカン公会議によって、人間についての新しい概念が生まれ、そこから共同体はますます兄弟的生活として捉えられるようになりました。つまり、いわゆる「規則の順守」的な確固たる

側面よりも、人間関係の質を重視した上で成り立つ生活です。

それゆえ、私たちの会で生きてきた現象をよりよく理解するためには、共同生活の様式の変遷を心に留めることが必要です。このようにして、**会憲**が提示している兄弟的な生活の新たな意味を、より容易に理解することができます。

1. 第二バチカン公会議前の共同生活

第二バチカン公会議前の共同生活は、伝統によって目標とされ、規定され、伝えられてきた多様な宗教的表現の生活を可能にする場と考えられていました。兄弟たちは、靈操の組み合わせである神学的な組織をまさに共に生きるために、集まって来たのです。共同生活の組織は、それを達成する機能を果たしていました。それゆえ、その生活は靈的生活のために規定されていました。そして「靈的生活」とは、信心業の実践として、宗教的徳の実践として捉えられていたのです。

沈黙を守るとか、他の兄弟の部屋に入らないとか、養成の異なる段階を切り離しておく（修練者は有期誓願者に話しかけることはできなかった！）といった規範は、共同生活の概念と実践における決定的要因が人間関係にではなくて、**靈的なリズムと雰囲気を守ることにあったことを示しています。**

靈的生活の目的は靈操の実践を容易にすることであつたのです。

共同生活には二つの大きな敵がありました。兄弟間の親しさと世俗的なことです。親しさとは、より個人的な関係のことを指し、この関係に夢中になることは靈的な情熱とは直接関わりのないものでした。世俗的なこととは、靈的生活と矛盾するもののことで

あり、それゆえ、共同体の人間関係から排除されるべきものでした。

このような視点で考えるなら、**共同生活**とは、基本的に、構成員の間に個人的な関係がなくても、**共同で行為を行うこと**を意味していました。事実、行為の大半は、(共同生活が)個人を尊重することを旨としていたので、唯一の共通要素として、物理的な共生を伴っていました。構成員たちが参加するという形の共同行為は非常に稀でした。このような参加が可能であった唯一の機会はレクリエーションでしたが、個人的な交流 (interpersonal exchange) が実際にはできないように配慮されていました。

人間関係は規制されていました。誰と、どのように、何について会話するかなどは決められていました。神との一致を「個人的に (individually)」生きることが決定的にすべてに優先していました。それゆえ、人数は問題でなく、同じ共同体に10人いようと50人いようと大した違いはなかったのです。

2. 第二バチカン公会議後の兄弟的生活

第二バチカン公会議と共に、修道生活の新しい体制が重点を置くところが変わりました。つまり、個人としてあるいは集団として神体験に至り、共同で生活し、使徒的なミッションのために働くことに対する修道者の認識と主体的な能力が重視されるようになったのです。

つまり、各人の個人として、また共同体としての体験を重視する姿勢に置き換わったということです。実際、第二バチカン公会議は、共同生活において「個人の主体的な関係が作りだす世界」

を優先しました。これは、共同生活というものが「共同で行為を行う場」として考えられていた過去に起こったことに代わるものでした。

共同体は支える組織、つまり、個人的な神体験（**personal experience of God**）を助ける場へと変わったのです。以前は、共同生活は、自己放棄、禁欲、課せられた犠牲を通しての個人の浄化という苦行の要素と見られていました。17世紀のイエズス会士聖ヨハネ・ベルクマンズの「共同生活は私の最大の苦行である」という言葉は、そういう意味だったのです。ところが、第二バチカン公会議以降、共同生活は人間－キリスト者の自己実現の場、神に忠実に生きるのを支え、兄弟のために働く場と考えられるようになりました。

共同生活は、それ自体が人間の個性を豊かにする価値を備えた現実へと変わったのです。孤独や孤立、共同生活の欠如は、脅威のように見えました。

そこから、人間的な相互関係を円滑にするために、共同体の修道者の人数を減らす必要が生じました。当然のことながら、こうしたことから、共同生活を送る大勢の修道者の心の中に、大きな建物や誰が誰だかわからないことに対する拒否反応が生まれたのです。

共同体がより小さな場所で、より少人数で構成されるようになった結果、必然的に修道者間に新しい種類の関係が生まれました。各人が自らの神体験を共有する必要も生まれました。典礼も変わりました。各人が自分の神体験を、典礼を通じて仲間に伝える必要があるため、典礼はもはや単なる儀式の場ではなくなったのです。典礼によって個人的（**personal**）で直接的なコミュニケーション

ョンが自由に行われるように、典礼の祝われる場所それ自体が変えられました。

個人の生活と共同生活は共同体の集まりにおいて定期的に評価を受けました。評価にあたっては、カトリック・アクションが用いた生活見直しのメカニズムが適用されました。

共同体の集まりといってもいろいろあって、ただ一緒に暮らすことを奨励するだけのこともありました。そうした集まりはセラピー的な要素を持ち、緊張の緩和に役立ちました。

「神学的」から「心理学的」への移行もありました。神学的動機だけではもはや不十分で、霊的指導は心理学的なものに代わりました。

しかし、だからといって、神学的なものから心理学的なものへの移行は、必ずしも神学的立場が弱くなったことを意味しません。それまで知られていなかった側面が発見されたということなのです。とはいえ、この発見はあまりに強烈だったので、神学的要素は雪崩のように押し寄せた心理学によって事実上埋もれてしまいました。しかし、最終的には適正なバランスが取られることとなりました。それは神学的な要素を活かす新しい方法を見いだすことであつたのです。このようにして、共同体の生活は、修道生活の形成要素を意識的に、自由にかつ参加的に取り入れるにあつて、兄弟的に支えてくれる恵まれた場となりました。

この発見の不可逆的な側面として、個人的で主体的な相互関係の重要性を減じることは不可能であるという事実がのしかかっています。それゆえに、権威の概念は、大きく変わらざるを得ず、修道誓願には新しい解釈が与えられたのです。

つまり、私たちは、修道生活の理解と実践が「霊的な諸原則」

の集合体、世界で広く受け入れられていた規制された宗教的実践の集合体を中心とするものから、個人的かつ意識的に、共同のやり方で自由に受け入れ、話し合い、取り入れられた「生活プロジェクト」と理解されるものへと移行する過程にいるというわけです。後者においては、主体性と共同参加とが適切であるとされ、そこでは、全員が体験という媒介を経なければなりません。

共同体的な側面においては、共同生活、参加、コミュニケーション、兄弟たちと共に暮らすという情緒的な自己実現、そして、その中で霊的成長と使徒的勇気を体験する必要への移行が起こります。共同体における人間関係の重要性は、共同体生活の構造的側面に決定的な影響を与えます。共同で営む兄弟的生活の中から、使徒的な熱意と個人的な敬虔さ（*piety*）の支えが生まれるはずなのです。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 次の文章を読む：

第二バチカン公会議、修道生活の刷新・適応に関する教令 2、
3、5、6、9、12－15

2. 次のことを自問してみる：

●「共同生活は私の最大の苦行である」とは私にとってどういう意味か。

●今営んでいる兄弟的生活は、人間として、キリスト者として、また修道者として成熟するのに役立っているか、いなか。それはなぜか。

●本来のアイデンティティーを取り戻すために原点に戻るとは、どういう意味か。新しい時代の要求に適応するとはどういう意味か。

●共同体生活から共同体における兄弟的生活に移行するために「個人的な生活プロジェクト」はどのような手段を挙げているか。また、どのような手段が欠けているか。

共同体としての考察のために

1. 次の文章を読む：

「共同体における兄弟的生活」奉獻生活会省 5、67、68、69、
70

「奉獻生活」37、40、44、58、63、70

「全世界をキリストの福音であまねく満たすために」I.

2. これらの文章に照らして次のことを自問してみる：

- 私たちの生活を刷新するようにとの教会の呼びかけを、兄弟共同体としてどのように受け止めるべきでしょうか。この刷新の基準となるものは何でしょうか。
- 歴史の流れの中で、また、私たちが生活している環境の中で、私たちにとって最大の課題となる時のしるしとは何でしょうか。それらは私たちおよび私たちの兄弟共同体にどのような影響を与えているでしょうか。
- 多様でしかも避けることのできない「時のしるし」の数々の挑戦や要求に対して、どのような態度を取ることができるでしょうか。
- 第二バチカン公会議後に起こった変化に対して、一定年齢の兄弟たちはどのように向き合っているでしょうか。
- 若い兄弟たちは、年配の兄弟たちが生きてきた歴史をどのように理解しているでしょうか。
- あらゆるレベルにもたらされたかつてないほどの急激な変化に、すべての兄弟が落ち着いて対処する助けとなるような対話を、どのように設定することができるでしょうか。
- 世代の異なる兄弟たちの間の対話を改善するために、**兄弟的生活のプロジェクト**は、どのような手段を準備しているでしょうか。

III 兄弟共同体の起源 (会憲 38、40)

1. 会憲第38条と40条の意味と重要性

会憲のこの二つの条文は、フランシスカンの兄弟共同体の起源、基本、そして目的に言及しています。しかも、兄弟共同体がフランシスカン・カリスマにおいて持つ重要性和役割についても説明しています。

第 38 条 《兄弟たちは、天の御父の子供として、また、聖霊におけるイエス・キリストの兄弟として、主が 聖フランシスコに啓示された、福音に基づく生き方に従って、兄弟的生活を共同で営む。母がその子を愛し、養う以上に、兄弟たちは互いに愛し合い、養い合う》。

第 40 条 《兄弟は、一人ひとりが、神から兄弟会に授かった賜物である。従って兄弟たちは、各々の性格、文化、習慣、才能、能力、資質は異なっても、お互いのあるがままに、そして対等な者として受け入れる。それによって兄弟会全体が、神との出会いの優れた場となる》。

この二つの条文がどのようにフランシスカン生活における兄弟性の意味と重要性について展開しているかを一つずつ見ていきましょう。

第38条では、兄弟共同体を三位一体的な側面で捉えています。兄弟共同体の起源は三位一体にあります。つまり、私たちは天の御父の子供であり、また、聖霊においてイエス・キリストの兄弟なのです。さらに、第38条は、兄弟共同体の目的は、主がフラン

シスコにお示しになったように、福音に基づく生き方を営むことにあることをはっきり述べています。このように、兄弟共同体と兄弟的生活が目指す福音に基づく生き方のいずれも、フランシスコに啓示されたように、その礎を三位一体の神秘に置いています。

第38条に示されるこれらの特徴は第40条で完成されます。第40条でも、兄弟性は会の創立時から、神の賜物であることを述べています。兄弟は、それぞれが神から他の兄弟たちに与えられた賜物なのです。各兄弟の存在、性格、個性は神からの賜物です。それゆえに、各兄弟は、他の兄弟たちを「あるがままに」受け入れなくてはなりません。兄弟共同体は、各兄弟の個性性に基づき、また、その個性性を共同体のすべてのメンバーが主からの賜物として受け入れることによって成り立っています。兄弟たちは各兄弟の個性性を受け入れる度合いに応じてその賜物を分かち合うのです。

従って、兄弟共同体が築かれる土台は、兄弟たち自身の多様な能力であり、カリスマであり、個性であり、才能であると言えます。この多様性を受け入れて初めて、兄弟共同体は、その多様性の源であられる神と出会う恵みの場へと変わります。

兄弟的生活の起源と基盤の他に、この二つの条文はフランシスカンの召命とカリスマにとって兄弟共同体がいかに重要であり意味があるかを説いています。第38条は、兄弟共同体を私たちの生き方の構成要素として描いています。兄弟的生活は、フランシスカンの召命を実践する適切な方法なのです。兄弟性という特徴は、フランシスコが人生を歩む上で不可欠のものでした。第40条もまた、兄弟共同体の中に、フランシスカン・カリスマの優れた独創性を見いだしています。

フランシスカン生活の核を成している兄弟共同体は、まさに兄弟間の愛の関係によって築かれています。兄弟たちは、真の霊的な母として他の兄弟たちを養わなければなりません（会憲 38 参照）。愛し、養うというこの霊的な表現は、第 40 条で具体的に述べられています。愛は、個々の兄弟をその性格、文化、生い立ち、欠点、限界もひっくるめて受け入れることに示されます。対等な関係が、愛し、養うことの目に見えるしるしとして、兄弟間に築き上げられます。

ですから、会憲の第 38 条と 40 条は、フランシスカン的な考え方における兄弟性の起源、目的、重要性を理解するための二つの出発点を示しているのです。第 38 条が高みから、つまり、三位一体の神から始まっているのに対し、第 40 条は、低いところから、すなわち、神の賜物である個人としての兄弟から始まっています。そして、38 条が神の啓示を念頭に置いているのに対し、40 条は、個々の兄弟が共同の生活に対して持つ重要性というものを説明しています。

それゆえ、兄弟共同体の神学的起源と人間的起源とについて語る事が可能となります。会憲は、兄弟たちが天の御父の子供であり、聖霊におけるイエス・キリストの兄弟であることを示しつつ、再び、兄弟的生活の霊的・神学的起源について語ります。そして、それに加えて、三位一体との家族的な関係、すなわち、主がフランシスコにお示しになった聖福音に基づく兄弟的生活への召し出しの基盤となっている関係について言及しています。しかし、私たちが今検討している会憲の二つの条文が示すように、兄弟的生活においては、神学的・霊的関係を維持しさえすればよいというわけではないことを決して忘れてはなりません。家族的な

兄弟関係とは、互いを兄弟として母として思いやる愛の人間関係であり、互いを対等な者として受け入れる人間関係と解釈されるべきです。

そのことを心に留め、この二つの出発点をフランシスカンの兄弟観で考察してみましょう。

2. 兄弟共同体の神学的起源

a. 兄弟共同体、それは神の啓示（遺言 14）

フランシスコは自分の召命の本質的要素を説明するにあたって、その「遺言」の中で、自分の生活プロジェクトはいと高きお方が自ら啓示してくださったものだと言っています。彼自身が認めているように、彼には会を創立するために仲間を探すという意図はありませんでした。彼に兄弟たちを与えてくださったのは主なのです。こうして、フランシスコ自身が私たちに、彼の福音的な召命の本質的要素である兄弟共同体が神の御意志から生まれたものであることを分かせてくれています。神が兄弟共同体をフランシスカンの第一の核とお定めになったのです。それゆえに、小さき兄弟会の核である兄弟共同体は、人間の計画に従うのではなく、神のご計画に従うのです。

b. 兄弟共同体、それは聖福音からの招き（遺言 14）

最初の兄弟たちを賜物として与えられたフランシスコは、具体的にどうやってその兄弟たちと生活したらよいのか分かりませんでした。「遺言」の中で説明しているように、福音に基づく生活を兄弟的な交わりの中で営むように啓示してくださったのは、いと

高きお方御自身でした。伝記作家たちは、彼らなりに、フランシスコとその最初の仲間たちがどのようにして福音の教えを生活プロジェクトと考えるに至ったのかを示しています。兄弟たちは福音書に書かれたことを基本にして最初の会則を書き、ローマへ行って、それを教皇に差し出し、教会の名において裁可してくれるように頼みました。従って、フランシスカンの兄弟共同体は、福音に基づく生き方を中心に発展し、キリストに倣うことによって具体的なものになっていったのです。ですから、兄弟的生活のフランシスカン的な様式は、福音的な生活様式なのです。フランシスコと最初の兄弟たちは、福音の教えを実生活に当てはめることによって、キリストに倣った生き方をしようと努めました。この意味で、兄弟的生活の目的は、現実の日常生活の中で福音の精神に沿った生き方することなのです。ですから、兄弟共同体それ自体が福音宣教 (evangelization) の場であり、福音を世界に告知らせる使命を促進 (promote) させるのです。

しかし、福音は私たちにイエス・キリストを、その御托身と御受難を通して人類の兄弟として示しています。《このような方を兄弟および息子として持つのは、ああ、なんと聖にして愛情に満ち、なんと心地よく謙遜で平和に満ち、甘美で愛すべく、すべてに越えて望ましいことでしょう》(全キリスト者への手紙II, 56)。受肉され、御自分の命を私たちに差し出されたことによって、キリストは御自分を私たちの兄弟の一人とされたのです。人間に対するイエス・キリストのこの兄弟的な親しさが、フランシスコにとって、兄弟性を選択する動機であり、理由となっています。フランシスコはイエスのように、すべての人とすべての被造物に対して兄弟でありたいと願っていました。しかしまた、フランシス

コはすべての人とすべての被造物に兄弟として接する時、キリスト御自身との兄弟関係を生きていたのです。それゆえに、兄弟共同体は、キリストがすべての人の兄弟となられたという事実の中に存在理由を見いだしていると同時に、小さき兄弟たちが「兄弟である」キリストに倣っていることを示す具体的な証しでもあります。

c. 兄弟共同体の三位一体的捉え方（全キリスト者への手紙 II, 49-53）

フランシスコは、「全キリスト者への手紙 II」の一節で、自分の兄弟共同体プロジェクトについて詳しく述べています。その手紙の中で、信仰を持って生きる人の三位一体の神との関係について説明するにあたり、フランシスコは家族的で兄弟的な関係を示すような種々の用語を使っています。信仰者は天の御父の子供であり、御父の業を行うのだと述べています。彼らは主イエス・キリストの浄配、兄弟、母なのです。彼らはその忠実な霊魂が聖霊によってイエス・キリストに結ばれる時、浄配となります。天にまします御父のみ旨を行う時、わたしたちはイエス・キリストの兄弟となります。愛と清く誠実な良心とによって私たちの心と体に主を宿し、他の人々への模範として輝くべき聖なる業によって主を生む時、わたしたちはイエス・キリストの母となります。このように、信仰と悔い改めの生活は二重の関係を生み出すのです。第一の場合は、信仰者の三位一体との家族的で兄弟的な関係、すなわち、子供、浄配、兄弟、母としての関係を生み出し、第二の場合は、信仰者の間でそれなりの家族的で兄弟的な関係を生み出し

ます。すべての信仰者は、天の御父のみ旨を果たし、その業を行う時、同じ御父の子となり、イエス・キリストの兄弟となります。このように、神の救いのご計画の中に生きるならば、信徒と神との、そして信仰者間の親密な家族関係が生まれます。

信仰者間の、そして三位一体の神とのこの家族生活のモデルは、フランシスコによって、ある方法で、小さき兄弟たちの兄弟的生活のモデルへと変えられます。それゆえ、「未裁可会則」において、フランシスコはこの兄弟的な家族生活のモデルを母性愛の側面から兄弟たちに示したのです：《兄弟は、ためらうことなく互いに自分の必要を知らせ合って、自分に必要なものを見だし、また、それを差し出して助けるべきである。そして、母が子を愛し養うように、どの兄弟も、神が自分に恵みをお与えになっているものによって、兄弟を愛し養わなければならない》（未裁可会則 9:10-11）。フランシスコはここで、「全キリスト者への手紙」で述べた家族関係に立ち戻り、それを兄弟共同体の生活に具体的に当てはめています。彼にとって兄弟であることは、母性的な愛、すなわち、子を生み、命を増やし、それを養う母の愛に表れているのです。すべての小さき兄弟は、他の兄弟の母として、霊の命、すなわち信仰の命を生み育て、福音の教えに従って養うように求められています。小さき兄弟は、キリストに倣うことによって、また、兄弟愛を具体的に行動で示すことによって、母となるようにとのこの召し出しを実現するのです。つまり、イエス・キリストがなさったように、自分の命を兄弟に捧げ、自分自身を必要に応じて相手に与えることによって。

d. 交わりの兄弟的生活を営む意義

これまで述べてきたように、聖フランシスコにとり、三位一体の神との家族的な関係のモデルのような兄弟になるということは、一人ひとりの兄弟が同じ召命を選択したすべての兄弟と親しい関係を結ぶということなのです。すべての兄弟は、神から同じ天の御父の息子として、《御自分の羊のために命を捨てられたこのような方の兄弟および息子》（全キリスト者への手紙 II, 54-56）の兄弟として、キリストに倣うという同じ福音に基づく生き方に参加するようにと招かれました。だからこそ、フランシスコを囲んで共に暮らす兄弟共同体、すなわち、交わりの生活、イエス・キリストの足跡に従うことによって命を捧げることを目的とする共同生活がつくられたのです。このように、三位一体にその基礎を置く兄弟的生活は、日常生活の現実、仕事、福音的使命を他の兄弟たちと分かち合うことによって、証しされ、強められるのです。

共同の兄弟的生活は、フランシスコと最初の仲間たちにとり、主の霊のうちに自分の召命を実現させるための共同生活の方法なのでした。それゆえに、共同の兄弟的生活は、福音的価値を兄弟間で、また、教会や世界との関係性の中で分かち合い、生かし、実践する場なのです。こうして彼らは神の善性と不思議な業を証しします。《私たちのためにこんなに多くのことを堪え忍び、こんなに数々の善いものをくださった神、また、これからもくださる神、神こそ私たちの力と強さだからです。神おひとりが善であり、神おひとりがいと高く、神おひとりが全能で、感嘆すべく、栄光に満ちておられ、神おひとりが聖で、たたえられ、祝されるべき方です》（全キリスト者への手紙 II:61-62）。ですから、共同の兄弟的生活は、創造主であり、贖い主であり、救い主である神との親密な関係を証しするものとも言えます（未裁可会則 23:10 参照）。しかし同時に、神学的に見れば、共同の兄弟的な家族生活とは、神の一つに結ぶ愛を表明し、証しするものとなります。それは、この世で三位一体の愛の内的な生活を証しするために、い

と高きところから賜物として与えられるものなのです。聖霊のうちにある御父と御子の愛は、兄弟愛となり、家族をつくり、兄弟的で母性的な愛のうちに生きる小さき兄弟たちの福音的召命を目に見えるものとします。

3. 兄弟共同体の人間的起源

a. 一人ひとりの兄弟の大切さ

会憲の第40条では、既に述べたように、すべての兄弟が他の兄弟にとって賜物であるという基本理念を展開しつつ、兄弟性の神学的・霊的意味をまとめています。しかしそれと同時に、一人ひとりの兄弟は、その固有性（*individuality*）と個人的才能を含めて、兄弟的な召命を築いていく一つの人間的な出発点となったり、その兄弟共同体の特異な源となったりします。それゆえに、兄弟共同体は、それぞれの個性や文化、才能、能力をもった本物の人間によって構成されているのです。その意味で、一人ひとりのメンバーは、兄弟共同体を豊かにする要素と言えます。兄弟共同体は、その構成員が共同体全体にもたらす個人の多様な豊かさのうえに生きており、フランシスカン召命の価値を実現させます。

しかし、相違点は、豊かさになり得るとはいえ、兄弟的な共同生活の障害物ともなりかねないので、兄弟たちは互いに相手を尊敬と愛をもって受け入れるように求められています。家族的で母性的な精神で、忍耐強さと相互受容をもって、ほんものの兄弟共同体を築こうとする意志があれば、その兄弟共同体は至高の神との出会いの場として特別な恵みが与えられ、神は、個々の兄弟に独自の個性として与えられたすべての人の役に立つ賜物を通して御自身を現わされます。他方、すべての兄弟が対等であるようにとの呼びかけは、兄弟共同体がすべての兄弟の貢献によって築か

れ、生かされるということを教えてください。個々の兄弟が持つこの豊かさは、兄弟共同体を築き上げていく出発点として過小評価されてはなりません。兄弟共同体は、個々の兄弟が他者のために身を捧げる場をそこに見いだす時に初めて生きたものとなるのです。ですから、兄弟共同体は、他者が表す人間的な部分を受け入れることから生まれると言えます。

b. 兄弟共同体、それは恩寵と義務の微妙なバランス

私たちの考察を導いてくれている会憲のこの二つの条文は、恩寵と義務が互いに影響し合う関係を映し出しています。兄弟共同体は神の恩寵による賜物として生まれたという考え方が明確に表現されています。それは、聖フランシスコの様式に従って生きるという召命を感じている人間の中に、聖霊によって受肉された神の御子イエス・キリストを通して与えられる恵みなのです（会憲第 38 条参照）。この神の恩寵は、兄弟共同体にやってくる兄弟一人ひとりの中に再び賜物として現れます（会憲第 40 条参照）。ですから、兄弟共同体と兄弟たちは、「生活様式」の中で、また、一人ひとりの兄弟の生活の中で、神がお与えくださったこの恵みに対して、その生き方を通して応えなければなりません。その時この恵みは、兄弟を献身する者（**commitment**）へと変えます。すなわち、神が聖フランシスコに啓示された生活様式に従う責務（**commitment**）を引き受けるように、また、自分の兄弟を愛し養うことによって兄弟的生活を築く責務を引き受けるように変えていくのです（会憲第 40 条参照）。

会憲は、あたかも天秤に乗せているかのように、神学的・霊的

な基本進路に沿いつつ、共同体における兄弟関係の価値と、独自の資質を持つ一人ひとりの兄弟の価値とに同じ重きを置いています（会憲 38 参照）。私たちは、全力を尽くして共通の目的のために貢献する個人が兄弟共同体に自分を合わせることに、兄弟共同体が個々の兄弟の人格と絶対的必要を尊重し、愛することとのバランスを取るように求められていると感じます。個々の兄弟は、兄弟共同体の使命に貢献しつつ、兄弟共同体の価値観に基づいて生きることによって、共通の召命の環境の中に自らを植え付ける義務があります。それと同時に、メンバー一人ひとりによってつくられた兄弟共同体は、各兄弟を通して神がお与えになる賜物を尊重しなくてはなりません。それゆえに、兄弟たちの互いの違いを尊重する感性を兄弟共同体の中に育ててゆく必要があります。ここでもまた私たちは、互いに兄弟であるという恩寵による賜物と、その賜物を生かして兄弟共同体を築いて行くという義務との困難な共存関係に直面させられます。兄弟は神からの賜物ですから、そのありのままを兄弟共同体は受け入れなくてはなりません。しかし、それと同時に、兄弟共同体は人間関係の構築と発展に取り組むことになり、そのために働くことはすべての人に等しく影響するのです。

その意味で、キリストに倣うことにおいて、生活と賜物を分かち合うことにより、また、家族的な関係の中で福音的価値観を実践することにより、兄弟共同体は神との出会いの場となります。《主の霊は彼らのうちに憩い、彼らの中に住まいを定めてお住みになります》（全キリスト者への手紙 I :6）。

4. この考え方の帰結と困難さ

この考え方の第一の帰結は、私たちの会の召命が兄弟関係の構築からなっているということです。私たちの召命の第一目的は、それゆえ、霊的あるいは司牧的なことやプロジェクトのために働くことではないのです。第一の目的とは、兄弟共同体それ自体なのです。しかし、兄弟共同体は、それ自体の利益のために築かれるべきではありません。兄弟共同体の建設は、神との出会いの場をつくるために、行うべきものです。神は兄弟共同体を建設されるにあたって、私たちの間に、また世界の中に御自分をお示しになる場を築こうとしておられます。神学的な表現をするならば、神の賜物としての兄弟共同体を建設するということは、現代に受肉される可能性を神に差し出すということです。従って、兄弟共同体を建設するためには、この世の中に、自分自身の環境の中に、特に貧しい人々と疎外された人々の間に受肉する必要があります。その意味で、兄弟共同体は、人類の必要や願い、喜び、苦しみ of 近くにいるためには、時のしるしと現代の状況と世界の状況を考慮しながら、神の啓示に対して心を開かなくてはなりません。

第二の帰結は、同じ兄弟共同体のメンバーの持つ多様性の尊重です。多様性が尊重されないならば、一致は実現されません。その意味で、同じ精神と同じ霊性のうちに、差異をなくすことなく養成すること、そして、各人の固有性 (individuality) を尊重することが、私たちの兄弟的生活の必要条件となります。

小さき兄弟たちは、友人だから一緒に暮らすものではありません。私たちの関係は自然な共感に基づいているのではないのです。私たちの間には、しばしば正反対とも言えるほどの、異なる性格や

気質があります。人間的な成熟の度合いも必ずしも同じではありません。養成や教育も異なれば、生活のリズムや個人の必要も異なります。そのために、兄弟共同体の建設は難しいものになっていますが、だからといって、それが不和の原因となってはなりません。共同の兄弟的生活を築くことは決してたやすいことではなく、時間をかけること、そして、この福音的な生き方に招いてくださった神に大きく心を開くことが必要です。神には不可能なことは何もなく、また、神の恩寵は決して尽きることがありません。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 次の文章を読む：

- 未裁可会則 1:1-5、2 チェラノ 17： イエス・キリストの教えと足跡に従うから、兄弟なのです。
- 未裁可会則 1:1-5、三人の伴侶の伝記 29： 福音の教えに耳を傾け、それを守るから兄弟なのです。
- 全キリスト者への手紙 I:1:8-13、II:48-56： イエス・キリストの兄弟だから兄弟なのです。
- 未裁可会則 22、37、小さき花 c. 14： キリストが彼らの真ん中におられるから兄弟なのです。
- ペルージアの伝記 204： 同じ創造主からつくられたから兄弟なのです。
- 2 チェラノ 198-199、ペルージアの伝記 110： キリストが私たち人間の姿を取られたから兄弟なのです。
- 全キリスト者への手紙 I:1:14-19、II:56-60、未裁可会則 22:41-55： 三位一体を通して、三位一体のうちに兄弟となります。
- 未裁可会則 22:33-34： 同じ天の御父を持っているから兄弟なのです。
- ペルージアの伝記 101： キリストが御父に願われた家族だから兄弟なのです。
- 2 チェラノ 180： 同じ母親である会の息子だから兄弟なのです。

- 全キリスト者への手紙 II:1:1-13、II:48-56、2 チェラノ 193: 主の霊が彼らを御父の息子とし、イエス・キリストの兄弟とされたから、そして、主の霊は会の総長だから兄弟なのです。
- 未裁可会則 1:1、裁可会則 1:1、2 チェラノ 191: 同じ生活様式に従っているから兄弟なのです。
- 未裁可会則[序]2-3、裁可会則 1:2、三人の伴侶の伝記 46、ペルージアの伝記 58、102: 教会の信仰により、教会への従順を通して集められたから兄弟なのです。
- 2 チェラノ 158、ペルージアの伝記 112: イエス・キリストが兄弟たちの牧者であり、長上であられるから兄弟なのです。
- 未裁可会則 2:9、裁可会則 2:11: 従順へと受け入れられたから兄弟なのです。

2. これらの文章に照らして:

- 兄弟生活を選択した理由について考える。
- 兄弟的生活を具体的に生きる中で生活を見直す。

3. 次のことを自問してみる:

- 母が子を愛し養う以上の熱意をもってお互いを愛し、世話をするようにとの兄弟たちに対する聖フランシスコの呼びかけは、自分の生活の中で何を意味しているか。
- 「各兄弟は神からの賜物です」とは自分にとってどういう意味か。そのことを意識することによって、具体的にどのようなことが自分の生活の必要条件となってくるか。
- それらの必要条件を自分の個人的生活のプロジェクトに組み入れるにはどうすればよいか。

- 個人のレベルでそれらの必要条件が兄弟的生活の基盤となるためには、自分はどうすればよいか。

共同体としての考察のために

1. 遺言 14、未裁可会則 9:10-11、三人の伴侶の伝記 25-34 を読む。
 - 私たちの現状について兄弟間で話し合いなさい。そして、兄弟的生活の必要条件と困難な点とに関して理想と比較しなさい。
 - フランシスカンの兄弟共同体の起源と目的について考えなさい。さまざまな意見を交換しなさい。
 - 日常生活の見直しと、兄弟共同体が共同体として行った約束 (commitment) とそのメンバーが行った約束の見直しを行い、兄弟共同体としての私たちのアイデンティティと神の賜物としてのその起源をよりよく表現する方法を学びなさい。
 - 私たちの兄弟共同体が福音にかなった意義を持つために、この召命を各人の環境で具現する方法として、どのようなものがありますか。
3. 未裁可会則 5:13 以降と訓戒の言葉 3、18、24、25 を読む。
それらの文章に照らして：
 - 兄弟的生活を特徴づける「人間的な特質 (human virtues)」について考える。
 - 兄弟共同体の他の兄弟たち及び接するすべての人々との兄

弟的な関係を見直す。

4. 会憲第 38 条、39 条、40 条を読む。

それらの文章に照らして：

- 共同の兄弟的生活の困難な点について分析する。
- 兄弟共同体の各メンバーの賜物について考える。それらの賜物は兄弟共同体の中でどのように尊重され、成長しているか、また、同時に、各人の才能はすべての兄弟の成長にどのように貢献しているか。

5. 「奉獻生活」14-22 を読む。

その文章に照らして：

- 兄弟的生活の現状を三位一体の生活との交わりに照らして考える。
- 誓願の概念について、三位一体的、キリスト論的、宣教者の考え方に照らして考える。

6. 次のことを自問してみる：

- 私たちの兄弟共同体はどのような印象を与えているか。
- 私たちの兄弟共同体 — その声、存在理由、メッセージは、人々に届いているか。言いかえれば、あなたの兄弟共同体においては預言的なカリスマが生き続けているか。例を挙げなさい。
- 上記の文章が挙げている側面は「兄弟的な生活プロジェクト」においてどのような位置を占めているか。
- それらの側面を、生涯養成において、また、兄弟共同体の生活において実践するにはどうすればよいか。

あなたがたは皆兄弟である

第二部 賜物であり任務でもあるフランシスカン兄弟共同体

I 兄弟共同体の建設

1. 「兄弟共同体を築くように招かれて」

私たち小さき兄弟はフォルマ・ミノールム（小さき者の手本）であるアシジのフランシスコから建設的に生き、行動する習慣を学び、受け継いで来ました。フランシスコは《行って私の家を修復しなさい。あなたが見ているように、それは全く崩壊にひんしている》（2 チェラノ 10 参照）と言われたことが自分の召命であると考えていました。

フランシスコの召命は、少なくとも最初のうちは、こうして作られ、固められて、いくつかの聖堂を修復しました（周知のように、彼は3つか4つの聖堂を修復しています）。人が召し出しを聞き、すべての召命が強められるのは、教会においてなのです。後に、フランシスコと兄弟たちは、「私の教会を建て直しなさい」との呼びかけは、福音の教えに基づいて生き、イエスに従うことであると理解するに至りました。このようにして、彼らはイエスの新しさと美しさを教会に取り戻すという目的をもって、中世の教会を建て直しました。イエスの新しさと美しさこそは、教会の姿であり、生きた証しであるからです。

私たち小さき兄弟は、教会の建設と小さき兄弟会の建設を続けるようにとのこの呼びかけをフランシスコから受け継いでいます。神の民の建設（会憲 95:2 参照）の緊急性を感じている私たちは、本来あるべき存在、すなわち兄弟となり、小さき者となることに

よって、それを実践しています。

ですから、兄弟共同体を建設しなさいとの呼びかけは急務なのです。仮に聖霊によって兄弟的な交わりが**既に**実現していても、すべての兄弟と一つになるという責務 (commitment) は**まだ果たされていない**と感じています。交わりは、私たちの間に脈打ち、生きている現実であり、それが私たちの召命の**偉大さ**を築き上げるのです。しかし、その反面、交わりの脆さも感じています。なぜなら、私たちは日々、分裂や不和、大なり小なりの争いや競争という苦い料理を食べており、それが、私たちの召命生活の**悲惨**のもととなっているからです。

偉大さと悲惨、現実と約束、**喜び**と苦痛、これらは私たちの交わりの持つ二つの顔であり、それがゆえに、私たちは力を合わせて、私たちの壊れやすい生活の現実と約束として提示されているこの三位一体的な交わりの建設を続けるように求められているのです。兄弟的生活は、静的なものでもなければ、既に与えられたものでもなく、遂行中のもの、あるいは未完のもの、建設中のもの、あるいは破壊中のものです。なぜなら、それは強いと同時に脆くもある生きた人間によってつくられた生きた現実であるからです。

2. 会憲に照らして

会憲には、この点について鍵となる明快な文章があります：

《・・・共同体を「キリストにおいて結ばれた家族のように」築き上げるよう努める》（会憲 45:1）。

会憲には、この表現のほかに、兄弟性を成長という意味の、プロセスとして、動機として理解することを促すような説明や用語が含まれています。たとえば、「建設する」、「築く」、「助長する」、「促進する」、「支える」といった動詞が随所に見られます。

その意味で見逃せないのは、誓願宣立の文言にある《皆さまがたの兄弟的な助けに支えられて》（会憲 5:2 参照）という表現でしょう。小さき兄弟の誓願は、一旦到達したらそこで休めるという目的地ではなく、死ぬまで続く一つのプロセスの始まりであり、そこでは「兄弟（Friar）になることを学ぶ」ために兄弟たちの友情と支えが頼りとなります。私たちは既に兄弟であるからこの生活様式を誓願するのではなく、兄弟たちの中で、兄弟たちの助けを借りて兄弟となることを学び、また、そうなるために、誓願を宣立するのです。ですから、兄弟関係に入るためには、絶えざる自己生成、召命への応答の絶えざる構築が必要となります。

このように、私たちの召命をプロセスと考えるならば、召命とは各兄弟、各兄弟共同体が成長する道であると同時に、兄弟共同体を築き上げる任務の遂行であるとも言えます。

3. 広範囲に及ぶ任務

フランシスカンの兄弟共同体は、小さな存在であるとはいえ、その任務は広範囲に及びます。なぜなら、私たちの召命は制御可能範囲を越えた目標を目指しているからです。私たちは他の人々と同様に人間ですが、兄弟となるように招かれています。つまり、他の人たちのように脆く弱い存在ですが、「全能の神」に信頼して生きるように招かれています。この地上に根ざしながら、歴

史の中にあって歴史を越えた神の国という理想郷に招かれています。具体的な一つの兄弟共同体に根ざしながら、全世界のすべての兄弟によって築かれた大きな兄弟共同体に目を向けること。単純な日々の歩みを続けながら、神が実現を望んでおられる救いの歴史に目を向けること。他の貧しい人たちのように限られた存在でありながら、兄弟関係を可能にする多くの兄弟たちの存在によって補完されること。時にはちっぽけな、しかし同時に、兄弟たちとの交わりを願う人々のために福音の光であり、力でもある奉仕をすること。権力を持たず、権力を奪われながら、最も恵まれない人々のためにこの世で兄弟愛のパン種となる志を持つこと。攻撃や対抗する力に出会っても、優しく穏やかな兄弟として世界に派遣され、主イエスがもたらしてくださった救いの平和を告げ知らせる志を持つこと。

そして、この表明もまた、広範囲に及ぶものなのです。なぜなら、兄弟であるということは、イデオロギー的で知的な訓練の問題ではなく、心の問題、《キリスト・イエスにもみられることを心がける》（フィリピ 2:5 参照）ことのできる心の問題、兄弟のために自分の命をも投げ出すほどに愛することのできる心の問題であるからです。こうしたことの学びには終わりが無いことを私たちはみな、経験から知っています。目標に達したと思った時、私たちは、聖パウロの言葉を借りれば、「古い人」の体験、「肉の精神」をもった人、フランシスコが何度も言っていたエゴイスト、暴力的な人、「偉いひと」、選別する人、兄弟を批判する人の体験を重ねていることに驚きます。だからこそ、再び始めることが必要なのです。

4. すべての兄弟の任務

上述した会憲第 45 条 2 項は、兄弟共同体の建設におけるすべての兄弟の立場と役割を強調しています。そこには次のように書かれています：《管区長と修道院長は、自分に委ねられた兄弟たちと固く一致して、共同体を築き上げるよう努める》。

私たちのアイデンティティーを考えると、管区長と修道院長は、確かに果たすべき大きな役割を持っています。彼らはそもそも兄弟共同体の建設を委ねられた兄弟たちです。しかし、彼らだけがこの任務を任されているわけでも、最も重要な役割を果たしているわけでもありません。共同体建設の義務と喜びは、すべての兄弟のものであり、各人がその人なりのやり方で与るものです。

共同責任（私たちの召命が「相互的で愛情のこもった従順」として、兄弟関係の中で表明されたユニークなプロジェクトへの忠実さを求める願いとして定義されているのは、意味のないことではありません）の重要性が私たちの生活プロジェクトの中で強調されているのは、兄弟共同体の建設において共同責任が必要不可欠であるだけでなく、出発点でもあるからです。長上とその配下にある者たちを対極に置く考え方は、歴史的にも長い間見られたものですが、それが、このようにして回避されています。兄弟的交わりの建設においては、不要な人はおらず、すべての兄弟が必要とされています。管区長は交わりを励まし、手本を示す者として、兄弟たちは、その交わりを証しする場として必要なのです。それゆえに、兄弟なくして管区長はなく、管区長なくして兄弟はなく、すべての兄弟がそれぞれ、全体として、兄弟的で互いを高め合う交わりに与るのです。

5. 破壊ではなく、建設を

目指すべき目標は、築くこと、建設することです。ですから、兄弟たちは肯定的で、建設的な言葉を使うように努めるべきです。たとえば、意欲を起こさせる、支える、結集する、刺激する、提案する、円滑にする、後押しするなど。

築き上げる第一の方法は、既存のものを破壊したり、解体したりすることにはなく、また、関係を損なったり、兄弟共同体の裂け目を広げたりすることにもありません。兄弟的生活を破壊する要因は微妙で、ぎくしゃくしていて、それは、言葉だったり、身振りだったり、行動だったり、怠慢だったりします。それゆえ、会憲の第43条には、こう書かれています：《兄弟たちは、兄弟的一致を損なう恐れのあるいかなる行為をも避ける》。

兄弟的生活を築くようにとのこの呼びかけは、兄弟たちや兄弟共同体が個人主義や表面的なことや、物質主義、行動抑制などへの誘惑をいたるところで感じている現代においては、なおさら重要なことなのです。

現代では本会の多くのところで複雑で思いがけないことが起こるので、一定の基本的な態度を維持することが必要です。つまり、兄弟共同体の良き「建設者」としての態度です。そのいくつかをこれから考えてみましょう。

a. 良い絆をつくること

私たちは皆、感謝に満ちた雰囲気の中で互いに世話をし合うこ

とにより成長します。一つの共同体に属するということは、権利であり、義務なのです。つまり、家庭であり家である共同体においてこそ、私たちは代わる代わる与え受けるという相互関係の中で互いの必要に応え合うことができるということです。

積極的な絆をつくるということは、他者の世話をし、その人を元気づけ、豊かさを分かち合う力を発揮するということです。そのためには、内面の豊かさと寛大さが必要です。他者を気遣うということは、必要を満たすことと満たされないこととの間にバランスをもたらすことです。

これらの積極的な絆は、今度はあなた、今度は私というふうに、相互関係の中で交互に与え合うものでなくてはなりません。そのことは、フランシスコが何度も書き物の中で繰り返している通りです。

b. 希望を生み出すこと

成熟した人間の現実在即した能力ある者とは、兄弟共同体の内外を問わず、欲求や不安、喜びや苦しみに直面した時、あるいは理想的なことを前にした時に、不思議な力に頼ることなく、日々の生活の中で、理性と心と様々なアイデアを用いて、また、気持ちを動かし、臨機応変に、使えるあらゆるもの（組織）を働かせて、勤勉に惜しむことなく働きながら人生に立ち向かう人です。

このことを見事に言い表した有名なことわざがあります。「蒔かぬ種は生えない」、「幸運は勇敢な者と努力する者を好む」など。何かを知りたいと思うことは、「それを本当に知るためのプロセスに身を置く」ことにほかなりません。人間として、兄弟として、

(誓願を立てた) 修道者として生きること、この世で神の国のしるしとなり預言者となること、そして貧しい人々に希望をもたらすということは、誰をも踏みにじったり、支配したりすることなく、**自らが動くこと**です。それは空想の世界から脱し、軽率な議論や不平不満、そしてノスタルジーから脱することです。さらに、恐れを乗り越えて、疑念があっても、自分や他者の持てる力を最大限に利用し、私たちを招き、回復させてくださる神の感覚を思い起こしながら、前に進むことなのです。

c. 苦痛のある人生を受け入れること

愛と情熱のあるところには常に苦痛が伴います。苦痛とは、喪失であり、驚きであり、無防備であり、今は享受できない善なのです。なぜなら、生活は日々具体化され、それをすべて同時に手に入れることはできないからです。

兄弟共同体の生活には常に小さな苦痛と大きな苦痛が伴います。他の兄弟たちが自分の期待に応えてくれないこともありますし、プロジェクトが成功しないこともあります。また、兄弟が病気になったり、亡くなったりすることもあります。もしかしたら、兄弟が退会することだってあるでしょう。そんな時、私たちはこの苦しみにはどんな意味があるのか、どうすればこの苦しみを乗り越えることができるのかと考えます。そんな時こそ、私たちの愛する能力が問われているのです。

共同体としては、苦痛に対してどのように対応するのでしょうか。兄弟共同体の成熟度は、苦痛や困難、十字架を大人としての正しい方法で引き受ける能力によって測られます。兄弟共同体を

建設するということは、生活に刺さったとげのような問題に直面することでもあります。そうした問題は、十分に理解されれば、時には血を流すことがあっても、私たちを成熟させ、向上させてくれます。

無意味さは苦しみの一つの大きな原因です。苦痛によってもたらされる苦しみは、ほとんどすべてのものを私たちから奪いかねませんが、意味を求める気持ちだけは、無防備な存在に意味を与えてくれる自由の最後のとりでだけは別です。生きることになぜ（why）と問いかける人は、苦痛を堪え忍ぶ術（how）を見いだします。このことは、苦痛や挫折に耐え、乗り越えた多くの人たちの証言によって裏付けられています。なぜなら、彼らは自分を突き動かす原因を持っていたからです。

苦痛が不安や、苦悩、恨みに変わることもあります。その苦痛に意味を与えることによって、また、葛藤を理解する時に必ず通過する段階を受け入れることによって初めて、苦しみをもたらす混乱を回避することができます。

これらは、私たちの兄弟的生活を築き、建設し続けるために必要な提言です。他にも提言はありますが、これらは私たちが互いに成長して行くうえで、役に立つはずです。

6. 兄弟共同体を建設する手段

兄弟的交わりの建設を続けるために必要な手段はたくさんあります。会憲は特に第三章でさまざまな手段について述べています。その中のいくつかを挙げてみましょう。

a. 生活と奉仕の相互性

相互性がなければ兄弟性ありません。私たちはただ相手のそばにいたためではなく、絶対不可欠の相互性の中に身を置くために集められたからです。相互性についてフランシスコが用いた用語は、新約聖書に基づくもので、大変重要です (alter alteris, invicem inter se、相互に・・・)。

b. 共同責任

経歴が違っていても皆対等なのですから、兄弟共同体が「すべての兄弟の我が家」として認められる時に初めて、私たちは兄弟共同体を築いていることになります。主に従うようにと私たちを招き、呼びかけてくださる主に応えるように私たちは求められているのです。この共同責任は、信仰生活、日常生活、宣教生活のさまざまな分野において具体化されなくてはなりません。

c. 出合いの場である兄弟共同体の会議

同様に、兄弟共同体は兄弟の集まり (fraternal chapter 修道院会議) において築かれます。この集まりは信仰を祝う場であり、兄弟たちの出合いの場であり、養成と兄弟的矯正の場です。そこでは、「二人か三人が主の名において集まり」、主のみ旨を識別しようと努めます。

d. 共同体プロジェクト

会憲は共同体プロジェクトについてははっきり述べていませんし、プロジェクトの内容が具体性に欠け、多くの場合具体的な規範も定められていないので、それらを明確にする必要があります。そうすることは、兄弟共同体がどのようにして兄弟関係を築き、兄弟共同体を建設するかを明確にし、決定する具体的な手段となります。

e. 兄弟的一致を損なってはならない

上述した第 43 条では、兄弟関係を築く具体的で現実的な方法が述べられています。兄弟関係を壊さず、その土台を崩さず、将来性のないプロセスに追い込まないことが建設の第一の方法でしょう。つまり、一致を損なうようないかなる個人的・集団的活動をも避ける必要があるということです。

f. 兄弟共同体に奉仕すること

会憲の第三章の題名を「交わりの築き方」と置き換えることも可能です。また、その条文も、交わりを築くために必要な奉仕の列举と読むことも可能です。会憲は、兄弟たちが互いに行うべき多くの奉仕について述べています。霊的な性質のものもあれば、「人間的」で、実存的なものもあります。その範囲は、希望と平和と喜びを絶えず推し進めることから、高齢者、病人、弱者の世話をすること、そして《神との出会いの場》（第 40 条）としての兄弟的な環境をつくることに至るまで多岐にわたります。

このように、相互に兄弟的に刺激し合って交わりを日々築いて行くことによってこそ、兄弟たちは神の民の間に新しい兄弟共同体を築き上げる人となれるのです（会憲 95:2 参照）。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 次の文章を読む：

- ヨハネ 17:11。この文章はフランシスコの書き物の随所に見ることができます（全キリスト者への手紙 I:17-18、全キリスト者への手紙 II:56-60、未裁可会則 22:41-55）。この言葉で、フランシスコは兄弟間の母性愛をも越えた関係の源と模範を示しているのです。すなわち、御父と御子の愛です。
- ヨハネ 15:12。この文章はフランシスコの書き物の中では一度しか出て来ません（未裁可会則 11:5）。フランシスコは兄弟たちの母性愛をも越えた関係の持つキリスト論的な特徴を述べています。
- ヨハネの手紙 I:4:8-16。この考え方はフランシスコの書き物の中で9回出て来ます。ただし、ヨハネの手紙 I を文字通り引用したものではありません。フランシスコはここでもまた、愛の源は神にあることを強調しています。
- ヨハネの手紙 I:3:18。この文章はフランシスコの書き物の中で一度だけ出て来ます（未裁可会則 11:6）。これによって、フランシスコは愛の必要かつ実質的な性質を述べており、それは、兄弟性やその他の分野に関する彼の書き物においては重要なテーマです。
- マタイ 5:44。この文章はフランシスコの書き物に4回出て来ます（全キリスト者への手紙 II:38、訓戒の言葉 9:1、

未裁可会則 22:1、裁可会則 10:10)。この文章で、フランシスコは兄弟間およびそれ以外の人々との間の母性愛をも越えた関係に見られる根源的な特徴を述べています。

- マタイ 7:12。この文章はフランシスコの書き物に 10 回出て来ます(訓戒の言葉 18:1、全キリスト者への手紙 II:43、ある管区長への手紙 17 等)。この文章で、フランシスコは兄弟間の母性愛をも越えた愛の尊敬に満ちた相互的な特徴を述べています。

- マタイ 20:25-28。この文章はフランシスコの書き物に 3 回出て来ます。ただし文字通りの引用ではありません。フランシスコが引用したのは節だけで、(主が来られたのは)《仕えられるためではなく、仕えるためである》(訓戒の言葉 4:1、未裁可会則 4:6、5:9-12)。この文章で、フランシスコは兄弟間の母性愛をも越えた関係が持つべき仕える者としての特徴を述べています。実際、「仕える」とか「僕」とか「召使い(管区長)」といった言葉は、彼の書き物でふんだんに使われており、それらは明らかにこの福音書からの引用です。

2. これらの文章に照らして：

- 兄弟的な愛の必要条件について、また、それが自分の生活および他者との関係にもたらす具体的な結果について考えなさい。

3. 次のことを自問してみる：

- 兄弟共同体を築くにあたって、自分のかけがえのない役割に気付いているか。
- 兄弟共同体を築くようにとの召し出しは、自分の生活の何

を変えるように求めているか。どのような積極的態度を強め、どのような否定的態度を避けるべきか。

- 私たちの兄弟共同体に必要な不可欠なものは何だと考えているか。その必要不可欠なものについて兄弟的な対話をする気があるか。また、何があろうと真理の前に自ら折れる (be uninstalled) 用意があるか。
- 祈りを兄弟共同体の建設のための最も優れた手段だと考えているか。自分の生活において個人の祈りはどのような重要性を持っているか (大切にする、時間をかける、恒常的に忠実に行う)。
- 兄弟共同体を築くために実践すべき具体的な手段とはどのようなものか。また、そうした手段は、自分の個人的生活プロジェクトにおいてどのような位置を占めているか。
- 自分の生活において兄弟的な愛の求めにどのように応じることができるか。

共同体としての考察のために

1. 次の文章を読む：

- 1 チェラノ 34-36、ペルージアの伝記 115。

2. これらの文章やその他の文章に照らして：

- 自分が生活するそれぞれの兄弟共同体に見られる関係の種類を識別し分析する。
- フランシスコの書き物や伝記から、兄弟的生活を立て直すためにフランシスコが持っていた方法や手段を考える。
- 共同体の兄弟たちに見られる態度や建設的な行動を列挙す

る。(肯定的なことを伝えることは建設につながる)。

- フランシスコによれば、兄弟的生活を破壊し、損なうような方法や手段は何かを考える。
- 私たちの聖体祭儀や共同の祈りの時を見直し、それらが兄弟的生活のしるしなのかそれとも日課の産物にすぎないのか検証する。

3. 次のことを自問してみる：

- 自分が暮らしている人々の集まりは、兄弟共同体 (fraternity) であるか。それは共同体 (community) としての共住生活 (conventual life) か。それは一緒に働く人々の集団 (group) か。それは共に過ごす友人たちの集団か。兄弟共同体が築かれているか。
- 現代の私たちにとって、兄弟的な交わりを築くとは具体的にどういう意味か。それを実現する具体的な方法を挙げなさい。
- 「主御自身が建ててくださるのでなければ、家を建てる人の労苦はむなしい」という詩篇の言葉は、現代の私たちにとってどんな意味を持っているか。私たちの共同体の祈りを兄弟共同体の建設に役立てるためにはどうすればよいのか。
- 自分が属している兄弟共同体の建設のために、自分は現在何をしているか。これらの手段は兄弟的生活プロジェクトにおいてどのような位置を占めているか。
- あなたは自分が属している兄弟共同体の建設を推進するために、どのような手段をとりますか。

Ⅱ 兄弟共同体における人間的現実

1. 三位一体に基づく成熟を目指して

会憲第38条では、小さき兄弟たちの召命は三位一体の交わりの中に位置づけられています。つまり、私たちは三位一体の中にある命と活力の交わりに与るように招かれているのです。

第39条では、交わりへの招きを補足し、明確にするために、私たちの召命は人類学的かつ人間的発展への召命として示されています。小さき兄弟になるようにとの招きは、あらゆる「人間としての」可能性と能力を活かし、発展させるようにとの招きでもあります。それを、神学的・霊的な招きと異なるものと考えべきではなく、むしろ、補足的なもの、あるいは明確にするものと捉えるべきです。人間的で全体的な発展の中に、私たちの召命の重要性が現れるからです。それは、交わりのあらゆる側面を活かすことであり、具体的には、無償の贈り物であり、恵みであり、発展であり、祭りであり、献身であり、自己から出て他者へと向かうことなのです。

第39条は、これらの能力や人間の特質を挙げています。たとえば、家族的な精神、相互の友情、礼儀正しさ、朗らかさ、など。そして、《その他のあらゆる徳を培う》ように求めています（39条参照）。ここで問題とされているのは、私たちの召命の人類学的・人間的側面なのです。

私たちはあらゆる側面から人間としての成熟を求められているのですから、この人類学的・人間的側面は私たちの召命の中で特に重要です。「フランシスカン養成綱領」は、私たちと生活を共に

したいと望む志願者について語るにあたり、召命において常に人間として、キリスト者として、フランシスカンとして成長して行くことを求めています（養成綱領 45 以降特に 56 参照）。ローマ教皇庁奉獻生活会省の文書も、この内面的な成長について語っています。《一つの共同体と一緒に生活するように召された者の心と思いの交わりを促すためには、すべての人間関係に要求される質を高める必要があるのを思い起こすことが有益です：礼儀、親切、誠実、自己管理、細やかさ、ユーモアのセンスと分かち合いの精神》（「共同体における兄弟的生活、あるいは聖なる一致」27 番。

Congregavit nos in unum Christi amor n.27)。

「現代の司祭養成」(Pastore dabo vobis)という文書にも、同様のことが書かれています。すなわち、司祭の養成の側面について述べるにあたり、まず《あらゆる司祭の養成の基本として人間の養成がある》と述べています（PDV43 参照）。

しかし、この人間としての成熟を求めることは、フランシスカンの伝統において特に新しいことではありません。ただ、長い歴史の中で、他の側面が強調されていたために、このことに十分な注意が払われなかったとは言えるでしょう。とはいえ、このことは常に問題としてあったのです。アシジのフランシスコは、「人間として成熟した」人でした。彼の特徴は、現代科学が人間的に成熟した人に特有のものと考えている特徴と一致しています。

フランシスコの書き物の中には、人間としての成熟の必要性和重要性を強調していると思われる箇所がたくさんあります。フランシスコは「人間として成熟すること」を可能にし、また、それを兄弟たちに要求していました。いくつかの実例を挙げてみまし

よう：

- 喜び（「偽善者のようなしかめつらをしてはならない」）
- 理解（「他人を裁いてはならない」）
- 相互の寛大な赦し合い
- 冷静さ（「論争してはならない・・・」）
- 母のような愛（「母がその子を愛し養うなら・・・」）
- いつでも他者に仕える用意があること
- 毘にはまらないための自由（職務を手放す・・・）
- 害を受けても我慢する（訓戒の言葉の随所に）
- 「完全の鑑」85 に重要なことが書かれています。フランシスコは「完全な兄弟」（つまり成熟した兄弟のこと）の特徴の中でも、礼儀正しさ、感受性、親切心、奉仕の心などの徳を強調しています。

したがって、私たちの兄弟共同体は人間としての成熟を可能にし、それを示す場となるように求められています。成熟を遂げることによって、《神との出会いの場》（会憲 40 条参照）となることを目指して。

2. 人間としての成熟のしるし

兄弟が成熟した、あるいは兄弟共同体が成熟した兄弟によって構成されていると言えるのはどのような時でしょうか。人間の成熟さを見極めるしるしとは何でしょうか。

兄弟の成熟度を示すしるしはたくさんあります。特に、兄弟共同体を成長させる行為や行動がある一方、兄弟的交わりを脅かす行為もあります。私たちはそれらのしるしを列挙することに必ず

しも賛成ではありませんが、ここに、一つの例として、いくつか紹介しましょう。それらを6つにまとめてみました。兄弟たちはそれを参考に別の例を集め、リストを作成することもできます。

a. 内面の調和

●あらゆる人間の可能性を収斂し、まとめる能力。

b. コミュニケーション能力

●他者との深い、積極的な関係において。

c. 超越性

●意味と命を与えてくださる至高の存在と個人的に接し、疎通ができる能力。

d. 有能であること

●知的、身体的、社会的な分野で。つまり、どこにいても、自分の特質を伸ばすことができ、自分の計画をテキパキと遂行することができる人。たとえば、教師、コック、知性を活かした仕事、庭師、など。

e. ユーモアのセンス

●これは自分自身を深く愛することができなければ持てない稀有な能力です。この能力ゆえにこそ、自分のことを笑うことができ、世の中を笑うと同時に深く愛することができるのです。

●これは、なんでもジョークにしていまい、自分の「こっけいさ」で他者を「笑わせる」「こっけいな人」のユーモアのセンスとを区別する必要があります。

●物事を真剣に受け止め、それでいて自分のすることを笑ったり、自分の計画や意図を相対的に捉えたりすることのでき

る人が、ユーモアのセンスのある人です。

f. 創造性

●何かを工夫する能力、あるいは、型破りな体験ができる能力。

人間としての成熟度を示す特徴は他にももちろんあるでしょう（肯定的な自己イメージを持っている、自尊心がある、批判や逆境を受け入れる能力がある、自分の「欲求」を満たすことを後回しにできる、しかも、それを迅速にできる、他者に心を開くことができる、など）。これらは古典的な特徴です。同じ兄弟共同体の中で他の特徴について付け加えたり、意見を交換したりすれば、良い兄弟関係構築の訓練になるでしょう。

3. いくつかの問題点

私たちは三位一体の交わりを具現するように求められているのに、時々全く独りだと感じる場合があります。復活されたキリストの新しい人間性のしるしとなり秘跡となるように招かれているのに、私たちの兄弟共同体の中にはたくさんの傷や致命的な争いがあります。溢れるほど豊かな交わりのしるしとなるように求められているのに、私たちの関係はとても貧弱で殺伐としています。

神の恵みにより三位一体の生活をモデルとした兄弟的な交わりに招かれた私たちは、理想と現実の間に大きなギャップがあることを知っています。多くの場合、人間的成熟さが欠けていることが、私たちの兄弟共同体を「ひどい場所」にしてしまう問題と緊張の原因になっています。そこでは、私たちの限界や傷、「逃避」や、他者と平和に暮らす能力のなさばかりが目につきます。それ

は交わりと一致を目指す私たちの召命を脅かします。

平和な共同生活を妨げるこれらの問題が、時に、人々の成長を妨げる本質的な問題となっています。

- 「この兄弟は今日のフランシスコ会には受け入れられないだろう」
- 「彼はとても変な人だ」
- 「この兄弟はコンプレックスをたくさん抱えているので、大きな妨げの石となったり、攻撃の矢となったりするだろう」
- 「この兄弟は幼少年時代に成長のチャンスを十分に与えられなかったので、気難しい人になったのだ」
- 「この兄弟は他の兄弟共同体で嫌な体験をしたために、殻に閉じこもり、非社交的になってしまった」
- 「彼は疲れ切っている」など。

以上は、兄弟関係について話している時によく耳にする表現です。

どれも現実にあることで、言葉に出しては言いませんが、現実には「必要とされ、求められていること」であり、「傷」であり、欠陥であり、不安や無力さであり、ありのままを受け入れられないという問題であつたり、想像の産物であつたりします。私たちはこのことを忘れてはなりません。なぜなら、「私たちは聖性へと誘われている英雄ではなく、主の慈しみの食卓に招かれた貧しい人に過ぎない」からです。人間のこの謙遜さと弱さを受け入れない限り、本当の成熟した意味のある兄弟関係を築くことはできません。

4. 成長の糧

私たちの未熟さを示す現実を述べるだけではあまり意味がありません。必要なのは、すべての兄弟が成熟のプロセスで進化を遂げることができるよう、何かをすることです。

a. 「大人」になること

- 《彼らは大人である前に、既に、神に似た者になろうとしている》（*Adversus Haereses* IV, 328,4）
- 聖イレネウスが当時（3世紀）のグノーシス派の人々に宛てたこの言葉は、共同生活において人間が取る手段について詳しく述べるのにとっても役立ちます。
- 大人になるためには、徐々にそれらしい信念と態度を身につけねばなりません。
- 必要なこと、それは、**自分自身の人間性、すなわち肉体の中にある自己を受け入れ、愛すること**。自分の存在を形成する男性的あるいは女性的側面を自分の中で発展させること。男性的側面と女性的側面は各人の中で補完的な役割を果たすものです。アニムス（精神、知性）とアニマ（神秘に開かれた魂）とは相互補完的なものであり、一体となるものです。
- いつも他者の承認や意見を求めずにいられないということなく、自律し、独立することを学び、一人で生き、決定する能力を持っていることが必要です。この自律を通して、自分の限界を受け入れる能力は他者の限界を受け入れる能力と結び付き、人生で不可避の欠陥や挫折を静かに堪え

忍ぶ術を身につけるのです。

- **責任感、義務感、自己への忠実さ、特に、他者を受け入れ、**
他者に心を開くこと、他者と共に生き、人間的な生活と福音的なプロジェクトを形成する可能性、これらは私たちが追求すべき真の人間性の特徴です。
- **自分が生き、自分の自我がつけられているこの世界に対して心を開く必要があります。**この世界から、私たちは逃げてはならず、この世界をほめそやすことも呪うこともしてはなりません。むしろ、この世界の文化的、科学的、社会的、政治的複雑さを識別しつつ、この世界を知り、愛し、活用すべきです。今日大人になるためには、この世界を、そのすべての複雑さを含めて理解しなくてはなりません。
- **関係性の制御：**人は「あなた」と呼ぶことによって「わたし」となります。人は他者との出会いに身を委ねる時、人間的成熟へと向かいます。成熟した人間とは、他者に心を開くことができ、その他者をありのままに受け入れることができる人のことです。この他者とは隣人、つまり人間のことを指すだけでなく、まずは絶対者である神を指します。

b. 他者を受け入れること

他者を受け入れるとはどういうことでしょうか。

- **人をそのユニークな個性のまま愛をもって受け入れること。**
- **人の行動や感情や意図を肯定的に認めようとする心構え。**
- **他者がそのユニークな内面で感じていることを感じ取る能力。**
- **他者の成長する能力を固く信じること。**

他者を受け入れないとはどういうことでしょうか。

- 他者の行動にいつも賛成していること。
- 他者の行動をいつも正当化し、認めること。
- 他者を遠くから観察すること。
- 他者の内的生活に異常なほどの好奇心を持つこと。
- 他者に対しひどく批判的な態度をとること。
- 自分の知的・感情的物差しで他者を判断すること。
- 否定的な感情を隠して、あらゆる軋轢を避けようとする
こと。

どうすれば他者を受け入れることができるでしょうか。

- 他者と同じように物事を受け止めようと努めること。
- 真摯で率直であること。ただし、何が何でもではなく、他
者に理解できることを正しく判断することによって。
- ポジティブな感情を深めること。
- 他者に接したいというサインを出すこと。
- 他者に関心を示すこと。
- 忍耐強く耳を傾けること。
- 希望の証しとなること。
- 他者のこと、特に他者の感情に関心を払うこと。

他者を受け入れることを難しくするのは为什么呢。

- 他者をその才能や、能力や啓発的な行動だけで評価する時。
- 極端な評価的傾向がある時。
- 他者を無視する時。
- 他者をあまりあてにしていない時。

共同生活の中で受け入れを励ます要素

- 自分のことを自由に表現する場を見いだすこと。

- 暖かみを感じられるような環境。
- 各人に、その人の能力に応じた、しかも創造性を発揮できるような、意味のあるふさわしい仕事や職務を与えること。
- 恒常的な報告を促すこと。
- 惜しみなく理想を追求できる雰囲気を育むこと。
- 最新の重要なプロジェクトに参加しやすい雰囲気。

c. 共同体の雰囲気

良い共同体の雰囲気ほど兄弟たちの成熟に役立つものはありません。それは「ポイント・ゼロ」の地点で、そこから他のことについて話すことができます。この地点なくしては、いかなる成長への道にも進むことができません。

良い共同体の雰囲気とは、たとえば次のようなものです：

- 心地よい、互いに受け入れ合う雰囲気。
- グループの外でグループの不満をもらしたり、批判をしたりしないこと。
- 兄弟たちに会うこと、兄弟たちがいることを喜ぶ。
- 喜んで協力しようとする姿勢。
- すばやく兄弟を理解し、赦すこと。
- 感情の伝達も含め、コミュニケーション能力が充分にあること。
- 兄弟たちとある程度深く関わるができること。
- 互いに赦し合う寛大さがあること。
- 「グループ内の畏敬の念」を涵養すること。

このような雰囲気や肯定的な共同体の雰囲気をつくることができれば、その共同体は限りなく進歩します。そこでは、「ポ

イント・ゼロ」と呼ぶそのような暖かい雰囲気の中では、すべてが可能であり、兄弟間で真剣に向き合うことさえできます。しかし、それがなければ、進歩することがほとんど不可能で、兄弟たちの成長は考えられません。

人生で自分を一番愛してくれた人が、一番助けになったのではありませんか。相互の人間的成長を助けるためには、内側から自分を滅ぼす自分の囚われと「未熟さ」から救い出してくれる、単純だが本物の愛に導く相互受容が絶対に必要です。とはいえ、このように兄弟を受け入れることは一つの理想ですが、そこに到達するためには、少なくとも次のような態度を実践することが役に立つでしょう。それは兄弟関係の基本とも言えます：

- 他者の感情を尊重する。
- 価値判断を常に避ける。
- 活動を分担し、協力する。
- 各人の真価を認める。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 次の文章を読む：
 - 会憲第 39 条
 - 「共同体における兄弟的生活」（奉獻生活会省）35-38
2. これらの文章に照らして：
 - 人間的な徳の実践について考える。
3. 次のことを自問してみる：
 - 既述した人間の成熟のしるしのうち、どれが自分の生活および他の兄弟たちの生活に欠けているか。どうすれば自分が成長でき、また他の兄弟の成長を助けることができるか。
 - 自分は人間的に成長するためにどのような手段を使っているか。自分の個人的な生活プロジェクトにおいてそれらの手段はどのような位置を占めているか。

共同体としての考察のために

1. 次の文章を読む：
 - 未裁可会則 11、裁可会則 3:10-14、裁可会則 10:7-12、完全の鑑 85。
2. これらの文章に照らして：
 - あなたの所属する兄弟共同体において、人間の成熟について意見や体験を分かち合いなさい。
 - 兄弟共同体のメンバーの意見に基づき、人間的に成熟した

人のしるしや特徴を挙げなさい。それらを重要な順に列挙し、コメントしなさい。

- 兄弟共同体の兄弟たちが人間的に成熟した態度で共に生活するのが難しいと感じるのはどんな時かを挙げなさい。その特徴や徴候を説明しなさい。
- 人間としてふさわしい成長を遂げるのに役立つと思われる具体的な方法を挙げなさい。

3. 次のことを自問してみる：

- 私たちの兄弟共同体は現代社会において「グリーンゾーン（緩衝地帯）」となるように求められていますが、そこは、誠実な人間にとっての希望のしるし、すなわち、神がおられ、人間的で福音的な価値観が培われるような場となっているでしょうか。
- 兄弟的に生きるために不可欠の社会的徳とはどのようなものだと思いますか。私たちの兄弟共同体には何が欠けているでしょうか。それはどうすれば手に入れられるでしょうか。
- 人間的に成熟する道を辿るためにはどうすればよいでしょうか。
- 兄弟たち、特に成長したり、進歩したり、兄弟的な交わりを深めるのに難儀している兄弟たちを支えるためには、どうすればよいでしょうか。
- 兄弟的な生活プロジェクトにおいて、人間の価値はどのような位置を占めているでしょうか。

あなたがたは皆兄弟である

III 平等と多様性

私たちの兄弟共同体は平等でありながら多様な人たちによって形成されています。私たちは平等です。なぜなら、各人はある共通の会則に基づき、他の兄弟たちと基本的に平等な兄弟とされており、すべての兄弟がそれを誓ったからです。しかし、各人は紛れもなく独自の個性、価値観、欠点、そして職務や奉仕職を持っているがゆえに、異なっています。

私たちの生活の特徴づける豊かさと問題点の多くは、この平等と多様性から生まれています。それゆえに、私たちの召命のこの側面を、一貫性を持って引き受けるためには、そのことに気付くことが大切です。会憲はこのことを明記しています。

第 40 条：《兄弟は、一人ひとりが、神から兄弟会に授かった賜物である。従って兄弟たちは、各々の性格、文化、習慣、才能、能力、資質は異なっても、お互いのあるがままに、そして対等な者として受け入れる。それによって兄弟会全体が、神との出会いの優れた場となる》。

第 41 条：《本会の会員はすべて、会内において担う職務や任務や奉仕職の区別があっても、名実ともに兄弟であり、小さき者である》。

1. 多様性の恵みと賜物

まず、私たちを区別する多様性を恵みとして、賜物として考え

ることが大切です。この多様性は多岐にわたり、体格や健康状態から、霊的状态にまで及んでいて、それは各人各様で、個性や習慣や小さな癖や大きな特徴に関する微妙で内面的な側面を表しています。

この多様性は別に新しいことではありません。本会の歴史と、特に本会の偉大な聖人たちを思い起こせばわかることですが、二人として同じフランシスカンはいないのです。フランシスコ会の歴史上の偉大な聖人たちを比べてみると、はっきりと目に見える違いがわかります。全員がフランシスカンで、全員が聖人ですが、同時にそれぞれがとても異なっているのです。確かに、彼らが違っている理由の多くは、彼らが生きていた時代背景と地域にあります。しかし、彼らの多様性は、フランシスカンの召命の性質上特有のものであることを忘れてはなりません。また、当時の聖人たちの顕著な違いを挙げることができます。たとえば、聖フランシスコと同じ時代に生き、典型的なフランシスカンと言われたパドアの聖アントニオは、多くの面で、アシジの聖フランシスコととても違っています。

現代と言う時代と現代の兄弟たちのことを考えた場合、私たちを区別する大きな多様性というものを無視することはできません。フランシスカンが携わっている活動を見ても、多岐にわたっています。移民、教育、売春、病人、豊かな人たち、貧しい人たちの問題など。そして、これらの多様性は、それぞれが行っている活動内容にのみ左右されるわけではありません。異なる選択を支える深い動機にも左右されているのです。たとえば、一部の兄弟たちは、他の兄弟たちが緊急とっていないようなことにまで身を挺して働くことを道義上の義務と考えるほどです。

感受性や選択に見られるこれらの相違を、修道院会議や管区会議などの集まりで目にすることが出来ます。これらの会議では、さまざまな提案や意見が出され、それらがいろいろな面で異なる人々によって同等の誠実さと情熱をもって守られるのです。私たちの兄弟共同体の霊的な豊かさと使徒的な実りは、こうした感受性や個性や意見の相違に多くを依存しています。それこそは、まさに恵みです。兄弟たちのさまざまな感性のおかげで、自分たちの互いに異なる視野を垣間見ることが出来ますが、それは決して独りでできることではなく、しかも多くの場合、異なる考え方は価値ある魅力的なものとして示されます。

しかし、この多様性が重荷と感じられる時もあります。たとえば、皆で決定しなければならない時、意見の相違は障害物や重荷に見えることがあります。意見の相違は、共同体の前進を阻むもののように思われることが多いのです。物事の決定に全員の賛同が必要ということもあり、その場合、多様性はより迅速で、おそらくはより預言的、創造的進歩を妨げる重荷として映ります。

2. 平等であることの恵みと義務

私たちの多様性を認めるだけでなく、同時に、私たちが対等な関係で結ばれているということを皆で認識することが、私たちを互いに兄弟としてくれるのだということを理解する必要があります。兄弟とは、初対面でも、フランシスコ会という同じ大きな家族の一員として紹介される人をも含みます。こうして、私たちの会は生き生きとしたものとなります。

兄弟関係が対等であるとの認識はどこに由来するのでしょうか。

この質問に答えるために、すべての人間集団を特徴づけ、また私たちの兄弟共同体の心理的特徴を構成してもいる帰属意識を喚起することができるでしょう。また、現代の社会的関係の特徴づけ、民主的で平等主義的なやり方を好む傾向に表れている平等の感覚を呼び起こすこともできるでしょう。しかし、私たちの対等な兄弟関係を正しく分析するためには、その根底に《兄弟は、一人ひとりが、神から兄弟会に授かった賜物である》（会憲 40）という意識があることを忘れてはなりません。兄弟一人ひとりが神からの賜物であるならば、だれも他の兄弟を害する権利などありませんし、神がさまざまな形で授けて下さった賜物を批判することなどできません。そのような態度は、これらの賜物の造り主であり、兄弟を賜物としてお与えくださったことを良くご存じの神を批判することに等しいのです。兄弟一人ひとりが神からの賜物であるとの現実が私たちの対等な兄弟関係の根底にあることを固く信じているなら、対等な兄弟関係とは、本会すなわち同じ家族に属しているという共通のしるしによって表されるものであることがわかるでしょう。誓願の本質的内容はすべての兄弟にとって同じであり、それは初期養成と生涯養成の道に表れています。養成の道は、すべての兄弟が真の小さき兄弟となるように求め、兄弟たちの善のために自分自身を充分に捧げる権利と義務と共通の努力を平等に課するだけでなく、それを助けるものです。

道で大切なのは、少なくとも部分的には当然のことながら、前進するということです。主から何かをいただく時によく起こることですが、それは恵みであり、義務なのです。主は賜物と恵みを、他者のために使うことで実を結ぶことができるように、私たちに授けてくださいます。共通の召命という賜物は、兄弟一人ひとり

に神の特別な賜物が与えられていることを分かせてくれますが、兄弟共同体の善のために使うべき恵みなのです。

また、私たちは聖フランシスコの態度に学ばなければなりません。彼は、召命を感じた最初のころは、自分の周りに兄弟を集めることなど、ましてや、修道会を創立することなど考えてもいませんでしたが、「遺言」に「主が私に兄弟たちをお委ねになりました時、・・・聖福音の様式に従って生活すべきことを、啓示してくださいました」とあるように、兄弟たちを与えられたのです。

それゆえに、平等であるということが一人ひとりの兄弟を神からの賜物として受け入れることにあるならば、この受け入れることこそが、日々追い求めるべき目標となります。このようにして、平等で多様な兄弟たちの兄弟的な交わりである神の国の偉大なしるしがもたらされます。

3. 平等である範囲とそれについて見られる進歩（会憲3章）

平等というテーマが表しているのは、私たちの兄弟関係のことです。兄弟たちが遂行するさまざまな職務と奉仕職は、兄弟関係を取り囲む具体的な環境から成り立っています。会憲は《本会の会員はすべて、会内において担う職務や任務や奉仕職の区別があっても、名実ともに兄弟であり、小さき者である》（第41条）と明言しています。このように明言されているので、考察を正しく行うことができます。

私たちの「奉仕職の区別」について述べている個所は、明らかに司祭職を指しており、司祭職は、司祭である兄弟を修道士の兄弟と区別するものです。そして、そのことが、兄弟共同体内の対

等で多様な関係に影響を及ぼしています。

歴史を辿ってみると、聖職者である兄弟と修道士の兄弟の区別が本会の発展に大きく影響を与えたことがわかります。アシジのフランシスコが望んでいた本会の特徴の一つは、聖職者にも修道士にも区別なく開かれた兄弟関係でしたが、それが、最初の数十年のうちに変わってしまいました。小さき兄弟会はやがて、聖職者を中心とした修道会に変わっていったのです。会は、教会での説教やゆるしの秘跡の授与、司牧といった明らかに聖職者向けの活動や職務を取り入れるようになり、修道会内部の生活を統治する権威の奉仕を聖職者である兄弟だけに任せるようになりました。

私たちはその歴史の継承者であり、何年もの間、さまざまな重要な変化を助長してきたのです。第二バチカン公会議後、原初の霊性に立ち返り、それと同時に時のしるしに忠実であることによって、刷新を果たすようにとの公会議の求めに従い、本会は創立当初の特徴であり、原初のアイデンティティーでもある「兄弟的平等」をあらためて発見しました。この「兄弟的平等」こそは、聖職者と修道士の区別を越え、本会を聖職者の会でもなければ、修道士の会でもない、それらを越えたものに導いてくれるのです。

これは、言うまでもなく、会憲第3条に関連する問題です：

(1) 《小さき兄弟会は、聖職者の兄弟と修道士の兄弟によって構成される。聖なる叙階に由来するものを除き、すべての兄弟は誓願によって、修道者としての権利と義務に関して完全に平等である》。

(2) 《小さき兄弟会は教会によって聖職者会の中に数えられる》。

最初の節は、現代の会が持っている意識を表しています。第2節は私たちのアイデンティティーを反映していませんので、本会はローマ教皇庁に2節目を削除する変更願いを何度も出しています。1994年の世界代表司教会議の後、そして、その後の使徒的勧告「奉献生活」(Vita Consecrata)が發布されてから、新しい考え方が公式に導入されました。つまり、聖職者会と修道士会のほかに、混合修道者会が存在すること。これこそは、私たちのアイデンティティーによりふさわしいものであり、この中にこそ、本会ではできるだけ早く自分の場を見つけないかと願っています。

私たちに直接的な影響を及ぼすさまざまな側面に立ち向かうためには、この問題を想起することが役に立ちました。第3条に関する論争は純然たる法的なもののように見えながら、実は重要な実際的问题を扱っているのです。単に法律的な問題ではありません。私たちの召命が司祭職とは離れた独自の内容とアイデンティティーを持っている以上、問題は私たちの生活に深く影響してきます。なぜなら、司祭職それ自体は小さき兄弟の真の姿に不可欠の要素ではないからです。だからと言って、この奉仕職が、司祭として召し出され、実際に本会の構成員の多数を占めている小さき兄弟たちの召命に完全に一致していることは否定すべくもありません。問題は明らかで、大切なことは、司祭職という側面を除外するのではなく、それを小さき兄弟たちの召命として正しく理解することなのです。

4. 世俗的誘惑と不平等への新たな誘惑

かつては、聖職者と修道士の区別が不平等の生まれる要素とな

っていましたし、事実、兄弟たちの間に二つの階層を生み出していました。それは、一つには、聖職者の兄弟と修道士の兄弟の修練期間を別に定めた古い教会法に由来しています（一方から他方への転向をするためには、修練期を繰り返す義務があったことを含めて）。それにもかかわらず、本会は聖職者と修道士を明確に区別する修道会ではありませんでした。しかも、本会の特徴であるいくつかの共通のしるしを維持して来ました（たとえば、同じ修道服を着用するとか、同じ誓願文を用いるなど。）それらは、アシジのフランシスコが初期のころに抱いていた直観的な記憶を守るものでした。もう一つ忘れてはならないのは、聖職者と修道士の間の不平等は、聖職者や修道士を含む多くの兄弟たちが聖性を達成する妨げとはならなかったということです。

第二バチカン公会議による大きな変化の後の世代に属し、しかも、聖職者と修道士の区別に由来する不平等を、少なくとも意図としては、克服していた私たちは、それでも、私たちの兄弟共同体の中に不平等への新たな誘惑がありはしないかと自分に問うてみる必要があります。そして、もし、あると考えるならば、それは何なのかと。克服したと思われる過去の状況に異を唱えたり、私たちにより直接的な影響を与える新たな不平等のリスクを無視したりすることは、偽善的な行為と言えましょう。

兄弟たちが行う活動の中に、差別を誘発するようなものはないでしょうか。たとえば、ある兄弟たちはより「貴い」と思われる仕事をしており、他の兄弟たちはより「くだらない」仕事をしているといったような。

各兄弟が行う具体的な活動の中に、また、金銭を扱う機会の多い兄弟と、他の兄弟に比べて逐一許可を得なければならない兄弟

の間に、経済的な格差を生むようなものはないでしょうか。

高学歴の兄弟たち（今日では司祭の場合も修道士の場合もあり得ますが）とそうでない兄弟たちの間を隔てるような「社会階級」に区分けしがちな区別はないでしょうか。興味深いことに、低学歴の兄弟たちは差別されていると感じがちですが、その代わり、自分たちこそ「無知で愚か者の」（*ignorans et idiota*）師父聖フランシスコの真の息子であり継承者であるとの差別的な態度を取りがちだと言う調査結果があります。

要するに、不平等への誘惑は常にあるということであり、私たちはそのことを絶えず吟味し、問題に真正面から向き合わなくてはなりません。

5. 多様性の中に平等を形成する

これまで、かくも平等であり、かくも多様である兄弟としての私たちのアイデンティティーを深めるべく考察してきましたが、その結論として、初期及び生涯養成を通じて私たちが取るべき養成のプロセスとは何かを自らに問うてみる必要があります。自分のアイデンティティーについての信念があれば、それを具体的に表す方法を見つけ出し、全体的な養成のプロセスを考え出すことができるはずです。初期養成のいくつかの段階はフランシスカンの養成というよりもむしろ、司祭の養成に重点を置いているというのは本当でしょうか。生涯養成で提案されていることや率先して行われていることの多くは、文化度の高い兄弟向けのものであって、他の兄弟のためのものではないというのは本当でしょうか。

この問題をまとめるにあたって何かを参考にする必要があると

すれば、それは、当然のことながら、至聖なる三位一体のイメージです。三位一体のイメージの中に、私たちは対等でありながら多様な三つのペルソナ（神格）、完全に一体となられた一つの神を思いめぐらします。確かに、三位一体において御父は御子ではなく、一つのペルソナ（神格）は他のペルソナ（神格）とは違うというのが真実であるならば、三つのペルソナ（神格）は完全な平等と交わりのうちにこの多様性を生きておられるのです。完全な平等と一致の中にあるその多様性を尊重し、しかも強調するモデルとなるものが、私たちの信仰の中心にあります。なぜならば、それこそは三位一体の精髓であるからです。このモデルは、神御自身が愛され、大切にされた違いを無効にしたり、すべてを均一化したたりする不平等化のあらゆる誘惑から解き放ってくれます。

私たちの兄弟共同体と全教会は、神の本質を具現する一致と多様性の神秘にほかならぬ三位一体の似姿とならなくてはなりません。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 次の文章を読む：

- 会憲 3 条、40 条、41 条。

2. これらの文章に照らして：

●自分より劣っていると思っている兄弟たちに対する自分の態度について考える。

3. 次のことを自問してみる：

- 自分の属する兄弟共同体において、多様な中でのより大きな平等を目指すために、自分は何をしているか。自分には何ができるか。
- 多様性に対して自分はどのような立場を取っているか。
- それぞれの才能を持った兄弟を神から自分に与えられた賜物と本当に考えているか。
- 「すべての兄弟は誓願によって、完全に平等である」。この問題をどのように実践しているか。このことは自分の**個人的な生活プロジェクト**においてどのように反映されているか。

共同体としての考察のために

1. 次の文章を読む：

- マタイ 18:1-8、ガラテヤ 6:2
- 未裁可会則 6:2

- 未裁可会則 5:9-15
- 1 チェラノ 31
- 2 チェラノ 191、193、ペルージアの伝記 103
- 大伝記 3:5
- ある管区長への手紙 7、1 チェラノ 102、完全の鑑 85

2. これらの文章に照らして：

- 兄弟共同体と一緒に暮らす兄弟間の不平等について、および会全体の中に見られる不平等の状態について意見を交わしなさい。
- マタイ 18 に描かれた兄弟的態度を識別しなさい。

3. 次のことを自問してみる：

- 自分の兄弟共同体に見られる明らかな多様性とは何か。
- 互いに違っていることの利点は何か。また、違っていることにより障害となること、問題点は何か。
- 自分の属する兄弟共同体で、多様性の中の真の平等を証していない行動とはどのようなものか。兄弟共同体の中で、足を洗ったり、パンを分け合ったりすることの意味をどのように実現しているか。
- それについて具体的に体験したエピソードを思い出すことができるか。
- 私たちの兄弟共同体では、聖職者と修道士の間に真の兄弟的な平等が実現されているか。
- 司祭職を志す兄弟と他の兄弟の双方を含む養成中のすべての兄弟に、フランシスカン養成の真のチャンスが与えられていると思われるか。
- 私たちの生活の中で現在見られる不平等とは何か。常に福

音的で兄弟的な平等の中で私たちを啓発してくれる手段とはどのようなものか。

- 私たちを平等に養成するための生涯養成について、どのような提案をすることができるか。
- それらの提案を兄弟的な生活プロジェクトで実現するにはどうすればよいか。

あなたがたは皆兄弟である

IV 兄弟間の親しさ

(裁可会則 6：7 参照)

(フランスシカン生活の具体的な諸要素)

兄弟的生活について語る場合、人にはそれぞれ別の考え方がある、同じ用語を用いていても、必ずしも同じ概念や考え方を反映しているわけではないとの印象を抱くことがよくあります。こうした意見の相違を避けることは不可能です。それどころか、意見の相違は豊かさと実りをもたらしてくれます。しかし同時に、すべての兄弟が分かち合えるような、しかも対話と共通の考察の土台となるようないくつかの点で、意見の一致をみることも大切です。

兄弟的生活についての共通理解を深めるためには、会憲第 42 条を根拠にすることができます。そこには、このテーマについて明確に次のように記されています：

(1) 兄弟的一致をいっそう深めるために、兄弟たちは相互の愛においては他に先んじ、惜しみない心で互いに仕え合い、善い企画を支援し、他人の仕事の成功を喜ぶ。

(2) 兄弟的な交わりの生活は兄弟たちに、一致して会則と会憲を守ること、同じような生活程度、共同体生活の諸活動、とりわけ共同の祈り、福音宣教、家事に参加することを要求する。また同様に、どのような名目で得たものであれ、すべての収入を共同体の使用のために提供することを要する。

第1項は、「兄弟的一致をいっそう深めるためには」どうすればよいかについて、いくつかの示唆を与えています。第2項は、兄弟的な交わりの生活に不可欠の一連の要素をすべての兄弟に要求しています。

第2項の提案がかなり変わって見えることに注目してください。まず、兄弟的一致を深めるものが何であるかを述べ、次にそれを構成する要素について述べています。ここではっきり示されているのは、兄弟的生活においては「静的」であるよりも「動的」である方が重要だということです。兄弟的生活とは、何か既に定着したものでもなければ、当然のものでもなく、絶えず築き上げ、積み増して行かねばならないものです。実際、既にある兄弟的一致を少なくとも部分的に深めようと努力して初めて、兄弟的一致を構成する諸要素が実践されるのです。

まず、兄弟的一致を深めるものを大切にし、次に、兄弟的一致を構成するものを大切にする、この手順を踏むことが私たちの取るべき道でもあります。

1. 兄弟的一致を深めること

兄弟共同体において交わりを深めるという目標を達成するために、これから、「前」、「最中」、「後」という順を踏んだプログラムを作成します。「前」については、「兄弟たちは相互の愛においては他に先んじ」と書かれています。「先んずる」ということは、まさに、前であり、すなわち、一人ひとりの兄弟と会うための自分の心の愛が先に行っていることを指します。ですから、兄

弟たちと実際に会って愛を実践する前に、自分の中に愛の心を培うことが大切です。私たちの心が神の愛で満たされ、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれている（ローマ5:5参照）時に初めて、私たちは出会うすべての人を真に愛することができるのだということを忘れてはなりません。それこそは、聖クララがその「遺言」の中で言っていることです：《あなたたちは、キリストの愛によって相互愛に励みながら、自分たちの業によって、うちにある愛を外に表されるように。それは、これによって姉妹たちが、この手本にならい、絶えず神への愛と相互愛を増してゆくためです》（クララの遺言59-60）。

このように、愛徳が神からの賜物であって、私たちの徳や努力にのみよるものではないことを自覚しながら、自分の業によって愛を示す前に、心の中に愛を持つことが大切なのです。ですから、「相互の愛においては他に先んじる」ようにとの勧めの中に、兄弟たちに会う前に自分自身の心を備える必要を見てとることができます。聖霊によってのみ注がれる神の愛を自分の中で成長させるためには、このことを（できれば個人的な祈りを通して）心に留める必要があります。

この「前」に言及してすぐに、兄弟たちに出会う「最中」に培うべき特徴が述べられています：「相互の愛に置いては他に先んじ、惜しめない心で互いに仕え合い、善い企画を支援する」。

このように、異なる補完的な方向で培うべき二つの態度が示されています。仕えることは自分の方から始まります。このことを、自分から他者へと向かうという言い方で図式化することができます。善い企画を支援することは、他者の行いを認識することから始まります。他者の行動を受け入れ、認めることから始まると

言うこともできます。この動きは、その前の動きと逆で、他者から自分に向けられます。

他者との出会いの最中に、これら二つの動きがいつも見られます。つまり、自分から他者への動きと他者から自分への動きです。真の出会いについて語ることができるのは、これらの二つの流れが見られる時だけです。それは、与えることともらうこと、受けることと差し出すことという両者の態度から生まれるのであって、片方だけからは生まれません。

他者に奉仕することはできるのに、他者の奉仕を受け入れることができない人とか、他者のすることはよく気付いているのに、隣人への奉仕となると怠惰で、できない人に会うことがよくあります。しかし、真の兄弟的な出会いには、どちらの態度も必要です。このようにして初めて、兄弟的な一致を本当に深めることができるのです。

第1項は「後」について書くことで締めくくられています：「他人の仕事の成功を喜ぶ」と。「成功」について語ると言うことは、結果について語るということです。この態度は、他者の仕事の結果が出た後で初めて可能になるもので、他者の仕事について考えさせ、それがうまく行った時に喜びを覚えるという瞑想的な考え方（生活を振り返る？）とも言えます。この態度はその前の勧め、すなわち、「善い企画を支援する」という行為の結果であることが、はっきりしています。他者の企画を支援するということは、それ自体、自発的な結果として、その成功を喜ぶことを伴います。

受け入れられないこともあります。特に妬みの危険で、これは兄弟の幸せとは真反対の態度です。妬み深い人は、他者の成功を喜ぶどころか、苦しみます。この点に関し、聖フランシスコが訓

戒の言葉 8 で、妬みについて語った部分を思い起こしてみるとよいでしょう：《主がある兄弟の中で語ったり、行ったりされる善のために、その兄弟をねたむ者はだれでも、冒涇の罪を犯しています。いと高きお方御自身をねたんでいるからです》。聖フランシスコの言葉は、妬みがなぜ受け入れられないかその深い理由を説明してくれています。ある兄弟の中で善を行われる方は、最終的に、主なのです。このような考え方は、他人の仕事の成功を喜ぶ人の積極的な姿勢を支えるものです。この成功、この幸せな結果は、すべての善の源である主に私たちを立ち返らせ、兄弟一人ひとりが神の賜物であるという事実を確認してくれます。実際、神御自身が、他人の仕事の成功の源におられる方であり、その成功を十分に喜ぶことができるのは、その喜びが今もいつも、すべての善の与え主を称えることであるからです。

2. 兄弟的交わりの生活に求められること

第 4 2 条の第 2 項では、兄弟的交わりの生活に必要なさまざまな要素が挙げられています。たとえば：

- a. 一致して会則と会憲を守ること；
- b. 同じような生活スタイル；
- c. 共同体生活の諸活動、とりわけ共同の祈り、福音宣教、家事に参加すること；
- d. どのような名目で得たものであれ、すべての収入を共同体の使用のために提供すること。

a. 会則と会憲

会憲によれば、会則は基盤であることが容易に見てとれます。確かに、会則は私たち皆にとって不可欠の指標を含む兄弟共同体の根本的基準です。つまり、私たちに求められている兄弟的生活とは、一般的な生活ではなくて、具体的な指標によって特徴づけられた生活なのです。言いかえれば、私たちに求められているのは、「一般的な兄弟生活」ではなく、会則と会憲の意図を具現する兄弟的生活、すなわち、フランシスカンの兄弟生活なのです。私たちは修道生活を送る時、その霊的な特徴を忘れて、一般化された修道生活をつい送りがちです。そうになると、すべての修道会は、あらゆる人に通用するものの、一人ひとりの個性を表現することのない、「平均的な様式」に均一化されてしまいます。会則を拠り所とし、兄弟的生活に必要な特徴の基本として示された具体的な霊的遺産を拠り所とすることによって、一般化される危険を避けることができます。

b. 同じような生活スタイル

「同じような生活スタイル」の必要性は、兄弟的生活の特徴を表しています。つまり、同じ兄弟共同体においては、生活スタイルがあまり違ってはいけません。特に、その違いが特権を認めるような、もしくは特権が存在するのではないかとの疑念を抱かせるようなものであってはいけません。生活における平等と多様性について述べてきたことをここで思い起こす必要があります。つまり、多様性は善いものであり、必要だけれども、ある種の快適さを楽しんだり、他の兄弟たちの生活スタイルと明らかに違う

ものを正当化したりする口実にしてはならないのです。

ですから、ここで言う同じような生活スタイルとは、第二バチカン公会議前から既に修道生活の制度の中にあった様式に見られる時代錯誤な生活の「画一性」のことでもなければ、一人ひとりの特異性を恐れることでもありません。むしろ、兄弟的生活の重要な一面を指しており、すべての兄弟のための一定の共通基準を尊重するように一人ひとりに求めているのです。

この「同じような生活スタイル」を具体化しようと努力するなら、環境とか活動、人数、年齢といった各兄弟共同体の特徴が花開くことでしょう。明らかに大切なことは、この「同じような生活スタイル」が自分の兄弟共同体において何を指すかを理解することです。

c. 共同体生活の諸活動、とりわけ共同の祈り、福音宣教、家事に参加すること

ここで言っていることは具体的なことです。兄弟的生活の一つ一つに参加すること、それも、祈りや福音宣教のような「貴い」ことだけでなく、家事のようなごく普通の日常的なことにまで参加することを説いています。ここでは明らかに、自分の生活の主役であると同時に、祈りと福音宣教、そして継続的な日常生活の諸側面を片付けることにまで関わり、それらを調整するような兄弟共同体を考えています。

ここに述べられていることはまた、兄弟共同体を構成する兄弟たちの仕事や活動の選択基準をも示しています。これらの行動に参加することが兄弟共同体の生活に不可欠のことであるならば、

それらへの参加を阻むようなことを引き受けることが正当なことだろうかと問うてみなければなりません。

また、家事の実行について見直すことも勧められており、会憲第 80 条では、次のように述べられています：《わたしたちの兄弟会では、家事はできるかぎり兄弟たち自身、全員の手で行われる》。

d. どのような名目で得たものであれ、すべての収入を共同体の使用のために提供すること

これまで、兄弟的生活のためにこれらの指示を実現することを強調してきました。実現しようとする意志は、私たちの生活の経済的な側面に関するこの最後の項目に十分に示されています。

基本原則となっているのは、完全な共同参加がなければ、真の兄弟共同体はあり得ないということです。そして、真の共同参加には、経済的な面も含まれます。美辞麗句を並べるだけで、最善の努力を払おうとしないならば、真の兄弟共同体を築いているとは言えません。

「どのような名目で得たものであれ、すべての収入を」と言っていることに注目してください。つまり、ここで言っているのは、すべての場合に当てはまる一般原則であり、報酬、年金、謝礼、献金などを含みます。

総則が、これらの規定違反を極めて厳しく非難していることを忘れてはなりません（総則 250 条=2004 年版、259 条=2010 年版参照）。このことは、この経済的な問題が如何に重要であることを示しています。兄弟でありながら、自分だけの金銭を持つなどという

ことはできないのです。

この問題を補足するために、兄弟たちがどのように管理業務を行っているか尋ねてみるとよいと思います。たとえば、主任司祭は小教区の管理をどのように行っているか。他の兄弟たちはさまざまな活動から得た、あるいは活動のためのお金の自分に任された管理をどのように行っているかなど。実際には、こうした管理が合法的にきちんととなされていても、管理する兄弟が必要な時に、それをだれにも説明をすることなく頼れる「自己資金」にしてしまう危険は往々にしてあります。このようなことが起こっているとしたら、私たちはフランシスカンの精神に反し、他の兄弟たちに比べて許しがたい特権を享受していることになります。

最後に、修道院長や管理責任者が良心の糾明を行うとよいと思います。彼らは、他の兄弟たちが許可を得なければならないのに、自分たちは許可を願うことなく金銭を使うようなことはないのでしょうか。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 次の文章を読む：

- 1 チェラノ 24、ペルージアの伝記 51：フランシスコは主が兄弟たちをお与え下さったことを感謝し、喜んでいた。
- 1 チェラノ 25-26：フランシスコは兄弟たちに会うのが喜びだった。
- 1 チェラノ 30：フランシスコは兄弟たちに会いたくてたまらなかった。
- 兄弟レオへの手紙、1 チェラノ 49-50：フランシスコはいつも兄弟たちのことを気にかけていた。
- ペルージアの伝記 51：フランシスコは兄弟たちを尊敬していた。
- 2 チェラノ 174-176：兄弟たちに対するフランシスコの心遣い。
- 1 チェラノ 49-50：フランシスコは罪に陥っている兄弟たちに憐れみを示した。

2. これらの文章に照らして：

- 兄弟共同体における生活の交わりに個人のレベルで求められていることは何かを考えなさい。

3. 次のことを自問してみる：

- 兄弟たちを賜物として与えられたことに対する自分の態度はどんなか。自分は兄弟たちを主がお与え下さった賜物と考えているだろうか、それとも、自己実現の妨げと考えて

いるだろうか。兄弟たちを与えてくださって、ありがとうございますと主に感謝することがどれくらいあるだろうか。

- 苦しい目に遭っている兄弟のことを気にかけているか。その兄弟に寄り添い、分かち合いたいと思っているか。彼と一緒にいて、分かち合うことを喜びと感じているか。
- 模範的な生活態度とか才能とかで、自分より優れた兄弟に対して自分はどのような態度をとっているか。その兄弟の行動の中に、「すべての善が帰属するお方」である神の御業を見ているか。
- 兄弟の罪に対して自分はどのような態度をとっているか。
- 自分の霊的生活と兄弟たちとの関係との間には何らかのつながりがあると考えているか。
- 「相互の愛において他に先んじる」ために、自分はどのような方法をとっているか。
- 他者との関係において、自分は与える方だろうか、それとも受ける方だろうか。自分は他者から奉仕されることを受け入れたり、他者の善い企画を支援したりすることができるだろうか。
- 自分は「共同体の中では才能をひけらかすな」という助言を盾に、兄弟共同体の中でしり込みしているだろうか。共同体のために尽くしているだろうか。どのような事情、状況、場合に、力を尽くし、どのような場合にしり込みしているだろうか。
- 仕えようとする自分の心構えは主に兄弟共同体の外側に対して向けられているか、それとも、内側に対しても向けら

れているか。

- 自分と一緒に暮らしている兄弟共同体の兄弟たちのことを本当に知っているか。兄弟たちは自分のことを知っていると思うか。相互理解を深めるにはどうすればよいか。
- 自分の意見を自由に言えるか。また、他者の意見を知りたいと思っているか。
- 個人的な生活プロジェクトにおいて、この親しさというテーマにどのように取り組むことができるか。

共同体としての考察のために

1. 次の文章を読む：

- 訓戒の言葉 8：ねたみの罪
- 2 チェラノ 178：フランシスコは兄弟たちの聖なる生活の噂を聞いて喜んだ。
- 2 チェラノ 180：フランシスコは自分の持っているものをすべて兄弟たちと分かち合った。
- 2 チェラノ 160：兄弟たちはお互いのために祈った。
- 三人の伴侶の伝記 42、ペルーシアの伝記 11：相互の従順。
- 2 チェラノ 75：仕事で得たものはすべて皆のものである。
- 未裁可会則 9:10、裁可会則 6:8、三人の伴侶の伝記 57-59：コミュニケーションと対話。
- ある管区長への手紙 15、三人の伴侶の伝記 58：どの兄弟のことも批判したり、蔑んだりしてはならない。
- 裁可会則 6:7-9：フランシスカンの兄弟共同体の特徴である、兄弟間の相互性と他者性。

- 訓戒の言葉 9:2-3、三人の伴侶の伝記 41、ペルージアの伝記 21、完全の鑑 51-52:互いに赦し合うこと。
- 1 チェラノ 39、42、102、三人の伴侶の伝記 40、訓戒の言葉 18:1 : 互いに我慢し合うこと。
- ペルージアの無名者による伝記 25:37、ペルージアの伝記 97、未裁可会則 7:15 : 互いに仕え合うこと。
- 未裁可会則 7:16、2 チェラノ 128、ペルージアの伝記 120、完全の鑑 96 : 兄弟たちの間にあって喜ぶこと。

2. これらの文章に照らして :

- 兄弟共同体における生活の交わりに共同体レベルで必要なものは何かを考え、意見を述べ合いなさい。
- 私たちの生活のさまざまなあり方について話し合いなさい。
たとえば、共同の生活、持ち物、共存、作業チーム、兄弟共同体における生活の交わりなど。

3. 次のことを自問する :

- これらのあり方のどれにあなたは共感しますか。あなたは自分の兄弟共同体でくつろげていますか。つまり、兄弟共同体を出会いの場、受け入れ合える場、支え合える場、刺激し合える場、理解し合える場、赦し合える場であると、心から考えていますか。自分が愛され、受け入れられ、大切にされていると感じますか。それはなぜですか。
- 私たちの相互関係の中に妬みはありますか。
- 一致して会則と会憲を守るためには、まずそれらを知らなければなりません。私たちは本当に知っているのでしょうか。どれくらい知っているのでしょうか。
- 自分の兄弟共同体を構成するのに必要な「同じような生活

スタイル」の特徴とは何ですか。

- 兄弟共同体のメンバーが行う活動は、彼らに「共同体生活の諸活動、とりわけ共同の祈り、福音宣教、家事」に参加するのを許しているでしょうか。
- 兄弟たちは家事を行っていますか、それとも、外部の人を雇って任せていますか。修道院長から新規入会者に至るすべての兄弟が、この仕事に参加していますか。それとも、家事は修道士だけの仕事であって、司祭の仕事ではないと考えられていますか。
- 自分の兄弟共同体の金銭の管理について何か意見がありますか。個人的な管理になってしまっているものがありますか。それは兄弟共同体の中に不平等を生み出していますか。
- 兄弟的な生活プロジェクトはどのように作成されていますか。作成基準は何ですか。

V 兄弟的な矯正

1. 兄弟会への召命、恩寵(恵み)と罪の間

ここ数十年間に私たちが学んできたことは、兄弟会への召命が「神からの恵み」、すなわち、私たちの主イエス・キリストと交わって生きるために神がお与え下さった賜物であるということです。全体として見れば、私たちの召命は「罪」に包まれてもいるということを決して忘れてはなりません。なぜなら、私たちは「この宝物を土器」という壊れやすい器に入れているからです。それゆえ、小さき兄弟としての私たちのアイデンティティーは、光と十字架として、賜物と任務として、恵みと罪に包まれているように思われます。会則はそのことを示しています。第1章が主の福音を守ることにについて語っているのに対し、第10章は《兄弟たちの訓戒と矯正》について語っています（裁可会則1、10参照）。

私たちの生活様式を時代に即したものにしている会憲は、第43条で、《霊ではなく、肉に従って歩もうとしている兄弟》がいるのは当たり前と考えています。そして、第8章のタイトルは、《管区長たちは兄弟たちを訓戒し、謙遜と愛をもって彼らを矯正しなければならない》となっています。

それゆえ、交わりを築き、兄弟的な生活で大人として行動するためには、兄弟たち及び兄弟共同体の弱さと罪に対して、大人として、またキリスト者として取るべき態度を考え、心に留める必要があります。やはり弱さからできている私たちの現実を「覆い隠してしまう」**偽りの二元的な精神主義**や、私たちを兄弟的成長の道から遠ざける**安易な絶望**へと陥らないことが必要です。

2. 成長する兄弟たちと兄弟共同体

兄弟的な矯正は、すべての兄弟の成長と、私たちの主イエス・キリストに対する彼らの召命の全うというダイナミズムの中で理解されねばなりません。成長のダイナミズムは、兄弟たち及び兄弟共同体の側に、交わりにおいて進歩し、成長し、成熟したいという意志があることを前提とします。

「罪を犯す」兄弟と、召命を全うすることを旗印とする兄弟共同体は、この観点から理解されねばなりません。兄弟的矯正は、召命において成長する手段の一つなのです。唯一の手段というわけではありませんが、一つの手段として理解され、利用される必要があります。ですから、矯正は「罰する」手段でもなければ、復讐の手段でもなく、また、誰かの権利を押し付けるといった類の方法でもないのです。過去にそのような使われ方があったとしても。

私たち兄弟は、この手段を必ずしもいつも適切に使っているわけではありませんが、この手段を良く理解しなければなりません。確かに矯正は、権威主義につながる危険を持つ上下関係の中で長上が目下の者に「高み」から行う段階から、もう一つの段階に移行しました。この段階では、管区長と修道院長は自分を抑制して、矯正の務めを果たしていません。それを「うまく利用した」兄弟がいます。しかし、それは当然の成り行きとして個人主義に陥る危険を抱えているのです。

会憲に照らして、この二つの段階を克服し、統合的な別の段階に到達することが必要です。その段階では、「兄弟たちが互いに愛

をもって矯正し合う」というこのテーマが適切な方法で示されています。この表現を明確に理解することが大切です。つまり、兄弟共同体は相互性の原則、ゆるし、ゆるされる原則、提供し受け入れる原則、与え、もらう原則で営まれていますから、すべての兄弟が矯正することができ、また、すべての兄弟が矯正され得るのです。

この成熟の道を辿るようにしましょう。この過程において、私たちは「互いに愛をもって矯正し合う」ことを通して、成長し成熟するよう助けあうのです。兄弟の忠実さは、私たちの召命に対する忠実さの証であると同時に、矯正をどのように受け入れるべきかを知らなければならないことをも示しています。なぜなら、福音書には「罪のない者がまず石を投げよ」と書かれているからです。

3. 召命への忠実さと兄弟的矯正

矯正の手段を実行する上で大切なことは、個人として、また共同体として召命に忠実であろうとする態度です。矯正する目的は、兄弟および兄弟共同体が、目標である主に従うという召命への忠実さにおいて成長するのを助けることです。矯正は、集会、対話、兄弟に向き合うことによって行われます。その武器は愛であり、愛情のこもった慈しみであり、召命に対する真摯な態度で使われます。

以下に兄弟共同体において行うべき矯正の基準を示します。

a. 矯正は「共同体プロジェクト」の中で行われるべきである

私たち兄弟は自分たちの存在理由を兄弟共同体において福音を生きることと理解しています。そこで重要となるのは、私たちの真摯さ（authenticity）と幸福です。したがって、その真摯さは、私たちの「共同体プロジェクト」で考え出された福音的生活を困難なものにするとしても、矯正の対象となり「得る」だけでなく、注意を払う対象となら「なければなりません」。なぜなら、自分自身に対して、兄弟共同体プロジェクトに対して、そして、主に対して忠実でいられるかどうかは、その真摯さにかかっているからです。

b. それゆえに、矯正は兄弟共同体で行われなければならない

矯正は、「主はこの瞬間に何を求めておられるか」という問題に応えるものでなくてはなりません。どうすれば、主の御心に最もよく応えることができるのでしょうか。この問題点から出発して、識別しながら、兄弟たちは再び福音的生活に身を置き、新しい方法で新しい計画を作成します。「主の御名により集まった兄弟たち」は、矯正にふさわしい日常の場です。兄弟共同体以外の場所は、兄弟的な矯正から逃れる場となる恐れがあるだけでなく、受け入れ、救いとなる慈しみを示す代わりに、不満や批判を示す恐れがあります。兄弟共同体を離れてなされる矯正は、建設ではなく破壊をもたらします。

「兄弟共同体の中で」とは、矯正が「母がその子をたしなめるように」兄弟的に行うことをも意味します。

c. 兄弟共同体によって行われる矯正

兄弟や共同体が成長するのを助けるためのこの奉仕を行うのは管区長や修道院長であることが多いのですが、その目的にかなうためには、兄弟的矯正は、普段すべての兄弟が集まる場で行われるべきです。この兄弟的矯正は、従順と同じように、「相互的」で「愛に満ちた」ものでなければならず、共通の福音的プロジェクトにおける真摯さを求める意志があつてこそ、従順につながります。ですから、矯正する側には特権はないのです。むしろ、兄弟たちは自らの召命を全うしながら、互いに矯正し合い、刺激し合うということです。それゆえ、私たちは「相互性の原則」において自らを教育しなければなりません。そうすることによって、私たちは矯正することとされることを学び、赦すことと赦されることを学ぶのです。

d. 福音的プロジェクトに照らして

矯正のきっかけは、一人ひとりの日常的な「小さな欠陥や無能さ」であってはなりません。むしろ、福音的な生活プロジェクトのようなもっと本質的なことであるべきです。

アシジのフランシスコは、会の外で道を踏み外している兄弟や会則に従って聖務日課を唱えなかった兄弟や姦淫の罪を犯した兄弟に対して取るべき態度を、基準としていくつか示しています(未裁可会則 8:7、13、19、遺言 27-33、全兄弟会にあてた手紙 44-46 参照)。

兄弟を矯正する場合に何を対象とするか、それは、私たちが皆

で約束し、会憲にアイデンティティーとして今日も記されている福音的プロジェクトに矛盾しているかどうかです。

4. 兄弟的矯正の「技」と方法

兄弟的矯正が成功するか失敗するかは、それをだれが行うにかにかかっていることが多いというのは本当です。「道徳的権威」を持った人や道徳的な影響力のある人が行えば、大概はうまく行きます。問題点が客観的にうまく扱われていない場合でも、矯正が受け入れられることはあります。しかし、矯正を、グループや個人に影響力を持たない人が行くと、いくら問題点が客観的に明らかにされていても、結果は失敗に終わります。とはいえ、兄弟的矯正について、取るべき態度を考えるのは良いことです。

a. 誠意を込めて真実を見極める

無意識がいたずらを働くことがあります。私たちがしばしば「真実」と呼ぶものは、「自己流の真実」に過ぎません。時には、自己流の真実ですらなく、敵愾心や支配欲、ちょっと仕返しをしてやりたいとか、共同体の中で重要な存在になりたいなどの気持ちが絡まっていることがあります。基本的な態度として、この誠実であること、誠意を持って事にあたり、常に真実を求めることが大切です。このように行うなら、その人は仮に共同体の中で孤立していると感じることがあっても、熱心に真理を求めた結果生まれた喜びを必ず感じるはずです。

b. 愛情と慈しみをもって

愛情と慈しみを持って矯正することが、善き牧者、善き管区長、善き兄弟の態度です。慈しみ（これはミゼリコルディア、つまり、憐れみ、すなわち、心を惨めさの中に置いてみることから来います）は、兄弟を支える人の持つべき態度です。それは心から、好意をもって、召命を全うして行く態度なのです。なぜなら、その人は兄弟と兄弟共同体を愛しているからであって、それ以外の動機などないからです。

c. 兄弟愛に基づき、愛をもって

兄弟共同体を築いて行く過程において、兄弟的矯正は、この愛のうちに行われます。愛ほど重要不可欠のものはありません。兄弟を愛していない人は、その兄弟を矯正することができないというのはまさに真実です。ですから、愛の心から矯正する人は、「忍耐強く」、謙遜で、それゆえに、決して無鉄砲に行いません。たとえば、良いところを見出せない兄弟を矯正してはいけません。どういうことかと言うと、兄弟を矯正するに際し、その兄弟に良い点を見つけられないことに気づいたら、それは、自分がその兄弟をあまり愛していないというしるしです。その場合、矯正はしない方が良いのです。なぜなら、矯正してもそれはもはや「愛に基づく、愛ある」矯正ではないからです。

d. 一貫性と真摯さをもって

「罪のない者がまず石を投げよ」という一節は、福音記者たちがイエスの言葉として記している重要な一節です。これは、当然のことながら、完全な人はいないのだから、だれも人を矯正できないという意味ではありません。困難や矛盾があっても、互いに成長の過程にあるのだということを念頭に置いて、前進しなければなりません。

真摯さと個人の一貫性はまた別の事柄です。自分が「わなにかけられた」とか、半分嘘っぽいことに巻き込まれたとか感じて、曖昧な生き方をしている人は、兄弟を矯正したりできるでしょうか。それに対し、真摯で一貫性のある生き方をしようと努めている人は、不完全であるにもかかわらず、兄弟に行動を改めてくれるよう頼むことのできる道徳的正しさを備えています。

e. 「同じような立場に立たされたら、自分がしてほしいと思うように」

この規範は、アシジのフランシスコが日常の行動において、特に罪を犯した兄弟に対して、自分に課した黄金律です。兄弟的な矯正を試みる場合、その兄弟の立場に自分の身を置いてみることに、そして、矯正する前に、自分がその兄弟の立場だったら、どうしてほしいだろうかと自問して、その答えを出して試みるのが大切です。その観点からなされた矯正は、真実から、真実のうちに Rowe られたと保証できます。

f. 信頼に満ちた、建設的な雰囲気の中で

兄弟的生活を建設するための「ゼロ・ポイント」とは、受容的で、積極的で、肯定的で、話し合える雰囲気のことです。召命に対する忠実さと兄弟たちへの忠実さを考える時、大切なことは、矯正を快く受け入れるように促す雰囲気をつくることです。互いを矯正し合う時に、相手の兄弟の長所を見つけることができないならば、そこには兄弟愛がないことになりますから、矯正は中断した方がよいでしょう。矯正に意味があるのは、互いを認め合い、相手の兄弟を愛しているからであり、その兄弟が召命を全うすることが他の兄弟にとっても大切だからであり、その兄弟の成長を願うからです。それゆえ、物事を分かりやすく、兄弟愛をこめて言えるような雰囲気を、矯正の時にその場限りではなく、いつもつくるように心がける必要があります。

g. ≪・・・兄弟たちはその兄弟に恥ずかしい思いをさせてはならない≫

兄弟フランシスコの思慮深さがこのことを詳しく教えてくれています。兄弟共同体を矯正によって建設したいならば、その矯正は、矯正される兄弟が恥ずかしい思いをしないような方法でなされなければならないと。つまり、矯正は、兄弟がそれを受け入れやすいような時を選んで、優しく、礼儀正しく、しかも特に、その人の成長を助けるためなのだということを念頭に置いて、優雅に行われる必要があるということです。

h. 頻繁に行わないこと

矯正は、兄弟共同体の状況からみて論理的に必要なと思われる時になされるべきです。とはいえ、矯正は、共同体プロジェクトの見直しの時や、プロセスの中間と終わりに、また、共同体の黙想会の最中など、年に数回に留めておくのが妥当だと思います。評価を重視し過ぎる傾向のある兄弟共同体は、建設的な刺激を失う危険や、「自己批判」に陥る危険があります。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 次の文章を読む：

●裁可会則 7:1-3：罪を犯した兄弟に対する態度と、その罪に対する態度。

●2 チェラノ 44、49、177：フランシスコは罪を犯した兄弟に深い同情を示した。

●訓戒の言葉 11：だれも他人の悪に腹を立ててはならない。

●訓戒の言葉 18:1：隣人への同情。

●訓戒の言葉 25：まことの愛。

●訓戒の言葉 22：叱責される時の態度。

2. これらの文章に照らして：

●自分の中に葛藤を抱えている時の状態と人間関係で悩んでいる時の状態について考える。

3. 次のことを自問する：

●他の兄弟が私について下している判断－肯定的なものも否定的なものも含めて－に耳を傾ける心構えがあるだろうか。他人に矯正されたら、それをどのように受け入れているだろうか。

●罪を犯した兄弟に対する私の態度はどんなか。

●私自身の罪に対する私の態度はどんなか。

●私の個人的な生活プロジェクトは、他の兄弟との定期的な話し合いをどのように捉えているか。私は霊的・召命に関わる同伴者を持っているか。

共同体としての考察のために

1. 次の文章を読む：

- 未裁可会則 4:2、5:5、裁可会則 10:1：具体例。
- 未裁可会則 5:7-10、裁可会則 10:1：長上の任務。
- 2 チェラノ 43：兄弟間の矯正。

2. これらの文章に照らして：

- 兄弟的な矯正の体験で、良かったこと、悪かったことについて話し合いなさい。

3. 次のことを自問する：

- 兄弟共同体では軋轢にどのように対処しているか。それは兄弟たちの成長に役立っているか、それとも妨げになっているか。
- 兄弟的矯正は兄弟共同体において機能しているか。
- 自分の兄弟共同体ではだれが兄弟的矯正の「管理」を行っているか。
- 自分の兄弟共同体では兄弟的矯正の「管理」はどのように行われているか。
- 毎年どれくらいの頻度で、共同体プロジェクトにおける「生活の見直し」が行われているか。

VI 兄弟共同体の「大切な人たち」

イエスは、福音書の中で身体障害者、病人、「傷ついた」人たちに囲まれていることが良くあります。彼らは貧しい人たちで、イエスが特別な注意を払っておられる新しいアナウイム（貧しい人々）です。「貧しい人々は幸いである。神の国は彼らのものである。」

同じような情景がフランシスコの生活や活動にもよく見られます。フランシスコは問題を抱えている兄弟、生活や会則について行けない兄弟（病人、罪を犯した兄弟など）に対して特別な注意を払っていました。

福音書の中のイエスも書き物の中のフランシスコも、こうした人々を「優先」し、彼らに特別な関心を寄せていました。彼らは「大切な人たち」であり、それゆえに、特別な役割を果たしているのです。

現代の私たちの兄弟共同体の中で、「大切な人たち」とはだれでしょうか。私たちはどのように彼らを愛し、世話することができのでしょうか。そのプロセスを明らかにし、刺激を与えることが、これから述べることの目的です。

1. 「・・・弱い兄弟、高齢の兄弟、病気の兄弟、その他の兄弟たち・・・」

兄弟的生活での日々の喜びに溢れた体験は、「兄弟たちが恵みであり、賜物であること」を物語っています。なぜなら、私たちが兄弟共同体で持っている最高のもの、それはまさに兄弟たちだ

からです。程度の差はあっても、聖らかで、「誠実」で、才能のある兄弟たちは、私たちの兄弟にましますイエスに従いつつ、イエスと交わって生きるために主が日々私たちにお与えくださる賜物なのです。兄弟たちこそは、主からいただいた恵みであり、私たちはそのことを主に感謝しなければなりません。

しかし、必ずしもそうとは言い切れないのです。兄弟共同体のいくつかを実際に見てみると、そして、諸管区で起きていることを見てみると、一緒に暮らすことを「難しく」している兄弟や状況があることがわかります。それゆえ、兄弟的生活は時には十字架でもあるのだということを知っておく必要があります。兄弟たちが悩みの種になることもあります。兄弟会の歴史は、時として、痛みと苦しみ、相互の不和、無駄骨、葛藤、内部での競争、問題などの影響を受けて来ました。それを否定することはできません。

兄弟的交わりに関する会憲の第3章では、この現実の無力な体験に触れ、兄弟的生活に困難をもたらし得る兄弟たちに特別な注意を払い、心のこもった世話をすると、次のように述べています：《体の不自由な兄弟、病気の兄弟、高齢の兄弟に対し、すべての兄弟は、「自分がしてもらいたいと思うとおりに、尽くさ」なければならない》（会憲 44）。

一部の兄弟共同体では、高齢の兄弟や病気の兄弟の人数がかつてないほどに増えており、その傾向は特に古きヨーロッパとアメリカの一部の国々で顕著です。本会の兄弟たちの平均年齢の統計をちょっと見れば、そのことが良く分かるでしょう。全体的に見て、どの兄弟共同体もこの現実を認識するようになり、高齢の兄弟と病気の兄弟に特別な注意を払い、良心的な介護をしています。ここでも、私たちは兄弟として生きることへの召命を誠実に全う

して行くのです。

また、私たちは「高齢の兄弟たち」からとても多くのことを学ぶことができます。大抵の場合、彼らは人生の晩年にあつて、喜びに満ちた証しを通して、安定の源であると同時に、召命を全うする励みとなり、刺激となってくれます。「病気の兄弟たち」は、御父の御手に信頼して委ねられた、僕にましますイエスの生きた名残です。また、体の不自由な兄弟もいますが、彼らはその謙遜さにおいて、刺激となり、力の模範となってくれます。

それゆえ、高齢の兄弟たち、病気の兄弟たち、体の不自由な兄弟たちをひとくくりにせず、一人ひとり個別に考えてあげる必要があります。

しかしまた、まさにあまりに「人間的」であるがゆえに、何らかの形で「重荷」になったり、面倒を引き起こしたりする兄弟もいます。彼らは「ユニーク」とか「変わった人」とか、時にはあまり兄弟的でない人、「好ましくない人」として分類されます。

ここで問題となっているのは、不可解な、そしてとても変わった理由で、次のような状態にある兄弟たちのことです：

- 「男性であることに傷つき」、他者を受け入れることができず、環境や他者との関係に適応できずに苦しんでいる兄弟；
- 「人生の重荷」を感じ、独りで長いこと悩み、眠れぬ夜を過ごしている兄弟；
- そうした個人的な問題のために、普通のコミュニケーションができなくなったり、制御できないほどひどく攻撃的になったり、ひどい孤独に苦しんでいる兄弟。そのために、兄弟的なプロジェクトや福音宣教などに協力することが

できなくなることがあります。

その他のことに目を向ける必要はありません。私たちのだれもが、一度ならず傷付いた経験があり、「ユニークな」兄弟になる材料を持っていることに気付かされて来ました。あるはずの支えがなかったり、「ひどい状況」に置かれたりするだけで充分でしょう。そうした兄弟たちは私たちの兄弟的生活においてどのような位置を占めているのでしょうか。そのような状況下でコミュニケーションを可能にするためには、どのような兄弟的態度が必要でしょうか。どういった態度がより兄弟としてふさわしい態度でしょうか。

2. 兄弟共同体の「大切な人たち」

会則が兄弟共同体について語る場合、主として「大切な人たち」のことを言っているのは偶然のことではありません。大切な人たちとは、困っている兄弟（裁可会則 6:7 参照）、病気の兄弟（裁可会則 6:9）、罪を犯した兄弟（裁可会則 7）、会則を守ることでできない兄弟（裁可会則 10:4-6 参照）などを指します。彼らは福音書で言う「小さき人々」であり、彼らにこそ、恩寵によって、神の国が与えられるのです。それゆえに、彼らは私たちの福音的な兄弟共同体の中心的な位置を占めています。彼らこそは、兄弟共同体の貧しき人々であり、主の僕のイメージであり、神の慈しみの場なのです。

《身体的苦痛によって苦しんでいる人々へのおどろくほど優しい同情心から我を忘れ、心の優しさをもって、キリストに彼らの困っていること、足りないものを訴えるのであった。それゆえ、貧しい者や虚弱な者を見ると、

彼の魂は溶け、助けを与えることのできない者に対しては、愛情を差し伸べた》（大伝記 8:5 参照）。

兄弟共同体のこうした「小さき人々」に対するフランシスコの態度は、とてもよく知られています。また、彼は、会則を守ることが難しいと感じている兄弟たちに対して特別の兄弟的な注意を払うように他の兄弟たちに頼んでいました。

ことに印象深いのは、未裁可会則 2 2 章 1－4 節で、その中でフランシスコは、生活を困難にしている兄弟たち、私たちに言わせれば「ユニークな」兄弟たちに対して取るべき態度について述べています。

《すべての兄弟よ、主が「敵を愛し、あなたがたを憎む者に善を行いなさい」と言われることに注意しよう。その御足跡に従うべき私たちの主イエス・キリストは、裏切り者を友と呼び、十字架に釘づける者に、すすんで御自分をお渡しになったからである。従って、艱難、苦悩、恥辱、不正、悲しみ、責苦、殉教および死を、正当な理由もなく私たちに加えるすべての人こそ、私たちの友である。このような人々を深く愛さねばならない。彼らが私たちに加えるもののために、私たちは永遠の命を得るからである》（未裁可会則 22:1-4）。

フランシスコにとり、新約聖書によれば、兄弟的な関係を律する掟は、十字架のしるしを留めているのです：《互いに重荷を担いなさい》（ガラテヤ 6:2）。フランシスコは自分自身と兄弟たちのために、マタイ 7 章 1 2 節の言葉を思い起こしています《人に

してもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である」。

フランシスコはまた、「真の幸い」を思い起こし、こうした状況の中で取るべき態度について述べています：

「自分が同じような状況にあったなら、隣人から我慢してもらいたいと思う通りに、自分の弱さに基づいて隣人を我慢する人は、幸いです」(訓戒の言葉 18)。

また、こうも述べています：

「自分の兄弟が病気で、報いることができない時に、健康で報いることができる時と同じように、その兄弟を愛するしもべは幸いです」(訓戒の言葉 24)。

病気の兄弟は聖フランシスコの最大の関心事の一つでした。会則の中で彼が病気の兄弟について例外的な規定を述べている箇所(裁可会則 2:15、3:12、4:2、6:9、10:8 参照)は、彼が兄弟共同体に、愛徳と、清貧・兄妹愛という現実主義とで生きてほしと望んでいたことを深く理解させてくれます。この清貧と兄弟愛という現実主義は時には「極端な状況」にも及びますが、その時には極端な配慮が必要となるのです。

3. 兄弟共同体の真実：「小さき人々」

虚弱な兄弟、高齢の兄弟、病気の兄弟、そして「ユニークで特別な」兄弟が私たちの兄弟共同体にいるということは、否定しようのない現実です。このことは、新しい若い人たちの召命が少ないために、兄弟たちの平均年齢がかなり上昇している管区では、

特に顕著です（ヨーロッパや米国の大多数の管区がそうです）。ほとんどすべての管区で高齢の兄弟と病気の兄弟を抱えており、そうした管区では、最大の配慮をもって彼らの世話をしようと努めています。

その他、どの管区にも、兄弟共同体の重荷になっている若い兄弟や高齢の兄弟がいます。中でも大変なのは問題を起こす兄弟たちです。そうした兄弟に対処するにあたって、最も兄弟愛のあるフランシスカンの態度とはどのようなもののでしょうか。

常に熟慮しなければならないこと、それは、各兄弟の置かれた状況や環境です。いずれの場合も、「フランシスカンの使命は、兄弟たちのために自分の命を差し出すこと」なのですから、常に兄弟愛に満ちた結果を得られるように努力すべきです。愛徳こそは、私たちの福音的生活の価値であり、実りです。福音的生活の中でこそ、弟子たちが世間に示すべき大切な証しであり、神の愛を人々に示す使命としての相互愛が最高の形で見いだされるのです。

私たちの兄弟的生活が本物であるかどうかは、自分の命を兄弟のために差し出すことができるかどうか、殉教精神があるかどうかで測られます。フランシスカンの使命の最高の形は、「殉教」であり、死までも受け入れる兄弟的な愛なのです。それだけではありません。フランシスコによれば、私たちを迫害したり、私たちの重荷となったりする人々は「私たちの友」なのですから、私たちは「彼らを深く愛さなくてはなりません」（未裁可会則 22:1-4 参照）。兄弟的生活の恵みと賜物は、兄弟たちが愛の豊かさの究極の基準である「真の幸い」に基づいた生活を選べば選ぶほど、いっそう深い恵みとなり、賜物となります。

それゆえ、兄弟共同体が本当の意味でフランシスカンのかどう

かを知る基準は、たくさん良く祈るとか、雰囲気が良いとか、兄弟たちの仲が良いとか、兄弟たちがやるべきことをやっているとか言ったことにのみあるものではありません。究極の基準、それは、「最も小さき人々」、何も与えようとせずに要求ばかりする人たち、私たちが貧しく、惨めであることを忘れている人たちのために自分の命を差し出すことができるか、その覚悟があるかということなのです。人間の偉大さと質が困難な時にこそ測られるというのは恐らく真実でしょう。同様に、兄弟共同体の偉大さと霊的な深さも、極限状況の中で、挫折した時や逆境にある時、私たちの「望み」や期待に応えてくれない人たちに対して兄弟的な態度を取るかどうかによって、測られるのです。

しかもさらに確かなことは、それらのすべては「恵み」とみなすべきだということです。このことは、兄弟たちに悩まされていた管区長に対しフランシスコが答えた手紙から推定できることです：

《神である主を愛することを妨げるもの、また、兄弟であれ、他人であれ、どんな人があなたに妨げを与えても恵みだと見なすべきです。たとえ、その人があなたに暴力を振るったとしても、このすべてを恵みだとみなすべきです》
(ある管区長への手紙 2)。

4. 兄弟的な態度

相互的な兄弟的生活に必要な態度とはどのようなものかを知るためには、福音書と私たちの「生き方」をちょっと見てみるだけで充分です。「貧しく、弱く、病気で、小柄なフランシスコ」の生

活は、私たち自身の生活の刺激となっています。これから、必要な兄弟的な態度というものをいくつか考えてみましょう。

a. 行き届いた世話

会憲第44条にはこう書かれています：

《それゆえすべての兄弟たち、とりわけ管区長と修道院長は、彼らを十分に世話し、見舞い、一人ひとりの精神的、物質的必要に適切に応じ、彼らを大切に思う心を表す》。

b. 「彼らを愛しなさい。そして、何も彼らから望んではいけません」

「ある管区長への手紙」からの引用は、この態度を再び示してくれています。フランシスコは管区長に次のように書いています：

《それで、あなたにこのようなことをする人々を愛しなさい。主があなたにお与えになるもの以外に、何も彼らから望んではいけません。そして正にこのような仕方では彼らを愛しなさい。そして、彼らがもっとよいキリスト者であつたらと望むべきではありません》（ある管区長への手紙 5-7）。

私たちは現実を受け入れず、その現実を無理に変えようとする無意味な努力をすることがあります。病気の兄弟を受け入れたいと言いながら、本音は「健康な」兄弟を、高齢の兄弟でもと言

ながら、本音は「若い兄弟」を、ユニークで変わった兄弟でもと言いながら、本音は「普通の」兄弟を、一匹オオカミの兄弟でもと言いながら、本音は「協力的な」兄弟を、正直でないことがバレたような兄弟でもと言いながら、「真摯な」兄弟を求めようとするのです。兄弟的生活を現実を送る上で必要なのは、現実をありのままに受け入れることです。フランシスコは重い皮膚病患者に、皮膚病ではなかったらよいのにと願ったでしょうか。むしろ、フランシスコの方が、自分の態度を変えて、皮膚病患者を尊敬したのではなかったでしょうか。人は、自分の態度を変える時、目の前の病人は健常者に見え、彼らとの兄弟的交わりが可能となり、珍しい兄弟はもはや珍しい存在ではなくなり、高齢の兄弟も重荷ではなくなって、知恵の泉となります。

c. 具体的で現実的な愛

勉学期間中は、規律を学ぶために「経験」を積むことを要求されるのが普通です。フランシスカンの兄弟共同体は、福音と相互愛を学ぶ理想的な場です。なぜなら、兄弟共同体においてこそ、本当の自分と本当の兄弟とが体験されるからです。それゆえ、どのような理由であれ、私たちを困らせる兄弟は、具体的で現実的な思慮深い注意と愛と無償の献身の対象なのです。

そのためには、忍耐と理解が必要であり、困難を抱えている兄弟を、同じような立場だったら自分もそうしてほしいと思うように世話するために、その兄弟の身になって考えることが大切です。

d. ≪母のように≫

フランシスコは、兄弟的生活を説明するに当たって、父親の態度を強調せず、母親の態度を強調しました。兄弟たちは、母が子を愛し養うように、兄弟を愛さなければなりません（未裁可会則 9:10-11、裁可会則 6:8 参照）。

したがって、最も兄弟的な態度とは、「母親的な」態度、すなわち、困っている兄弟をいつでも喜んで「愛し養う」態度のことです。

e. 《似たような状況に置かれたら、自分もしてもらいたいと望むように》

これは、フランシスコが私たち兄弟に永遠に約束させた考え方です。冷たく距離を置いた論理的な配慮からではなく、情愛のこもった距離を置いて兄弟たちの世話をすること、それも「同じような状況に置かれたら、自分もしてもらいたいと望むようにしてあげること。この現実、中からと外からとでは、何と違って見えることでしょうか。

5. それでも「難しい人」はいる

「難しい人」と思われる兄弟にどのような態度を取るべきかについての兄弟共同体の問題に取り組む必要があります。難しい人というのはさまざまな形で表れます。特に、兄弟共同体の発展を妨げるような兄弟、不愉快な雰囲気をつくるような兄弟、調和を乱すような兄弟、身体的に危害を加えそうな兄弟に対して、どの

ように接するべきでしょうか。そのような兄弟は兄弟共同体にいるべきではないと言うだけでは不十分です。

兄弟がユニークだからと言って、そのような兄弟に扉を閉ざしたり、存在を受け入れなかったり、特定の兄弟共同体に派遣しないように管区長に要請したり、兄弟共同体から締めだしたりしては、傷が広がってしまいます。

ほかならぬ相互愛という兄弟共同体の掟が、そのような状況下にあっても、常に支配していなければなりません。事例を見極め、セラピストや精神科医といった専門家に託すべきかどうかの決定を下す助けとなるのは、相互愛でなくてはなりません。兄弟は一人ひとり違っており、細心の配慮をする価値があるのですから、すべての兄弟に同じ一般法を適用するのは適切ではありません。

いずれにしても、これらの「難しい」兄弟たちから私たちが求められているのは、成熟した、人間的かつ霊的な偉大さをもって接することなのです。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 次の文章を読む：

●ルカ 10:33-35。

●未裁可会則 9、裁可会則 2、6:8、7:1、訓戒の言葉 9:11、ある管区長への手紙。

●2 チェラノ 22、69、175-177、ペルージアの伝記 53、89。

2. これらの文章に照らして：

●善きサマリア人のたとえ話について考え、それがあなたの生活に及ぼす具体的な影響を考えなさい。

●兄弟共同体の内部及び外部の困っている人たちのために捧げている時間と、彼らのためにあなたが提供している労力について考えなさい。

3. 次のことを自問してみる：

●私にとって「大切な人」とはだれか。私は誰と関わっているか。私の友情と兄弟的な配慮を必要としているのはだれか。

●兄弟共同体内の困っている兄弟や外部の困っている人たちに対して、私はどのような態度を取っているか。

●他者が必要とするどんなことが、私の生き方や私の連帯活動に疑問を投げかけているか。貧しい人たちとの緊密な連帯は、私の修道生活における福音的価値観に特別な活気を与えているか。

●「困っている人たち」は私の個人的な生活プロジェクトに

おいてどのような位置を占めているか。

共同体としての考察のために

1. 次の文章を読む：

- マタイ 11:4-6、26:35 以下：連帯に基づいて預言を回復する。
- イザヤ 58:5&13、マタイ 19:21、5:23-24：貧しい人のためにすべてを賭ける。
- ルカ 10:33-37：サマリア人のやり方を自分のものとする。
- ルカ 6:6-12、7:36-50、15:25-32：神の国の正義として慈しみを実践する。
- 未裁可会則 9:2、10:1-2、裁可会則 4:2、兄弟レオへの手紙、クララとその姉妹への勧め 5：原則とすべきこと。
- 訓戒の言葉 9、11、18、24-25、ある管区長への手紙 5:6、9-13、未裁可会則 9:10-11、裁可会則 6:8：フランシスコと初期の兄弟たちが貧しい人々や兄弟共同体の小さき者たちに対して示す配慮。
- 三人の伴侶の伝記 59：兄弟たちに対する父であり、癒し人でもあったフランシスコ。
- 現代世界憲章 29、31、32、93：連帯と社会正義。
- 共同体における兄弟的生活（FLC）63、64、67：貧しい地域に根ざすこと。

2. これらの文章に照らして：

- 貧しい人々のための私たちの意見が表明されるような具体的な方法を考える。

3. 次のことを自問する：

- 兄弟共同体の中で実際に「大切な人たち」とはだれですか。
私たちの基準は、新約聖書の基準やフランシスコの基準と合致していますか。
- より公正な社会を目指して、兄弟たちはどのような関係や組織、機構の中で働き、努力していますか。私たちは、カリスマの表明として貧しい人々の間に根ざして生きるための新しい方法に敏感ですか。
- 「同じような立場だったら自分もそうしてほしいと思うように」という掟を心に留め、「困難な場合」に兄弟共同体でとるべき必要な態度や方法を明らかにしなさい。
- フランシスコや初期の兄弟たちが貧しい人々や小さき人々に対して示した態度のうちどのような態度を、自分たちの兄弟共同体では実践しているか。実践されていない態度はどれか。
- 集まりを、「大切な人たち」と共に、また彼らのために祈ることで締めくくりにさい。

あなたがたは皆兄弟である

VII 小さき兄弟たち

1. 私たちのアイデンティティーはその名称に表れている

フランシスコが自分と兄弟たちのために選んだ「小さき兄弟たち」という名称は、思いつきで付けたものでもなければ、意味のないものでもありません。この名称は、フランシスコの最初の伝記作家の注意を惹き、彼は次のように説明しています：

「彼がまず自分で小さな兄弟会を考え出し、それに従ってこの名称をつけたのです。彼は会則の中で、「彼らは小さい兄弟でなければならない」と書き、そしてこの言葉が語られた時、同じように彼は、「この兄弟の集まりは、小さき兄弟会と呼ばれるべきである」と言っております。事実、彼らは小さい兄弟でした。つまり、どんな人にも服従し、いつも低い地位に留まろうとし、また面倒な仕事と取り組むことで、自分たちが真の謙遜の土台となるにふさわしい者となり、その実り豊かな計らいを通して己の中にあらゆる善徳の靈的建物を築こうとしたのです」
» (1 チェラノ 38)。

この文章は、深くて鋭い歴史的な分析を受けて来ました（中でも、テオフィロ・デボネの分析は有名です）。これらの研究が警告しているのは、「兄弟会」という用語それ自体を独創性のある言葉として受け入れない方が良く、むしろ、チェラノが強調している「小さき兄弟」という名称との結び付きをこそ賞賛すべきだということです。会則（未裁可会則 7:2）に書かれている言葉を思い起こす必要があります。そこには、福音書のさまざまな箇所からフ

ランシスコが引用した「最も小さな」(マタイ 11:11、25:45、ルカ 9:48、22:46 参照) という表現が含まれています。

「最も小さな」という形容詞は、兄弟愛の絆にユニークな特徴を与えつつ、「兄弟」という名詞を強く形容しています。「兄弟」というのと「最も小さな兄弟」というのは同じではありません。ですから、兄弟会について話す時、兄弟関係のフランシスコ的な特徴とは、この「最も小さな」兄弟たちの関係を指していることを忘れてはなりません。

また、小ささの中には、神との関係においてランシスコを深く印象付けた一つの要素を見ることができます。それは、ランシスコにとってのイエスで、御托身において御自身を小さくされた神です。したがって、小ささに注意を払っているのは、苦行の理由からではなく、ランシスコがキリストに抱いていたことのまさに本質であるからなのです。ランシスコは、イエスに従うにあたり、従順と完全な奉獻のうちにいつも神の聖なるみ旨を探し求めつつ、一人の最も小さな者として、父なる神に呼びかけました。この直観を表す福音書のイメージの中で最も深くランシスコの心を捉えたのは、最後の晩餐においてキリストが弟子たちの足を洗われる場面でした(未裁可会則 6:4、訓戒の言葉 4:2 参照)。最も小さなお方にましますキリストに従うということは、必然的に、キリストのように、自分を小さくして、兄弟たちの足を洗う用意があることを意味しています。

会憲も、この「小ささへの召命」をイエスのイメージに結び付けています：

第 64 条：《「死にいたるまで、へりくだって従う者となった」イエス・キリストに倣う者として、また、小さき

兄弟となる自己の召命に忠実な者として、兄弟たちは「喜びとほがらかさをもって」すべての人のしもべおよび臣下、平和を愛する心の謙遜な者として世の中を巡る」。

第 66 条(1)：《救い主がご自分を無とされたことをより忠実に模倣し、より輝かしく示すために、兄弟たちは、社会においては 取るに足りないとされる人々の生活と境遇を受け入れ、常に彼らの間で、小さきものとして生きる。この社会的境遇から兄弟たちは神の国の到来のため働く》。

最後に、「小さき」(Minor) という形容詞は、「文法的には」比較級(より小さい)であり、それゆえ、他の人との比較を前提とするということを忘れてはなりません。ただ小さいのではなく、他の人よりも小さいのです。その意味で、「小さき」(Minor) という言葉は、関係を示す用語であり、構造的に他者との関係を含みます。

この「文法的な」観察から引き出される結論は、比較する言葉が変われば、小ささの種類も変わるということです。私たちが他者との比較において小さき者であるならば、社会的に恵まれない人々と言う意味で小さき者であるのと、学問の世界で小さき者であるのとでは違うでしょうし、小教区の環境の中で小さき者であるのと、「辺境地」で小さき者であるのとでは違うでしょう。つまり、小さき者であるのに、絶対的な方法はなく、周囲の人々との関係において小さき者となるのだということです。

2. 私たちの間での小さき者であること

私たちが小ささを生きるべき主たる環境は、所属する兄弟共同体です。私たちは、遠くにいる人々に対して小さき者であったり、日々の活動の中で出会う人々に対して小さき者であったりする前に、生活を分かち合う人々、つまり、召命を同じくする兄弟たちに対して小さき者であらねばなりません。

しかし、兄弟たちに対して、兄弟たちよりも小さくあるとはどういう意味でしょうか。それは、置かれた状況や所属する兄弟共同体によって、異なります。ただし、はっきり言えることは、それは、他者に対して「上に立つ」ようないかなる行動もないことを意味するということです。上に立つことを示すような態度はいろいろあります。たとえば、皮肉な意見を述べて、他者をすぐに判断する；感謝の気持ちですべてを受け入れることをせず、他の人のやっている援助や奉仕の方が正しいと言って、兄弟たちに期待したり要求したりするなど。

小さき者として生きるということは、他者に対して威張らずに、自由な気持ちですべての人や異なる行動を受け入れることなのです。

アシジのフランシスコによれば、怒りや心の乱れは、他者に対して否定的な態度を取っていること、特に、上に立っていることの表れなのです。兄弟に対して怒ったり、心を乱したりする人はだれでも、自分が小さき者ではなく、内面的に「何ものも自分のものとせずに」生きておらず、他者を「利用する」関係、他者の上に立つ関係を生きていることになります。フランシスコは、別のところで、他の兄弟の罪に対して怒ったり、心を乱したりしない

ように戒め、そうした態度は危険なものだと述べています：

《神のしもべは罪以外のどんなことも不愉快に思ってはなりません。だれかがどのような方法で罪を犯しても、このために神のしもべが、愛以外の動機で心を乱したり、怒ったりするなら、自分自身にあやまちを蓄えています。どんなことにも怒らず、心を乱さない神のしもべは、何も自分のものとせず、正しく生きています。そして、皇帝のものを皇帝に、神のものを神に返し、自分のために何も残しておかない人は幸いです》(訓戒の言葉 11)。

ここで用いられているイメージに注目してください。「あやまちを蓄える」とは、何かを自分のものになっている人のことであるのに対し、怒ったり、心を乱したりしない人は「何も自分のものとせずに生きている」のです。このように、フランシスコにとっては、小さき者であるということは、他者に対して何も自分のものとし、ない精神を培うことなのだということがわかります。この精神は、兄弟の罪に接しても、怒ったり、心を乱されたりしない能力に示されます。

私たちの怒りや心の乱れを検証してみましょう。それらは、私たちが小さき兄弟となることができていることの明らかなしるしなのでしょう。

この小さき者たる態度は、権威による奉仕を委ねられている兄弟にとっては特に重要です。「ある管区長への手紙」は、この態度の理想的なモデルを示してくれています。そこには、小さき者として権威を行使する人の真の心構えが述べられています：

《兄弟某管区長へ。主があなたを祝福されますように。

あなたの魂の問題について、私は、自分の最善の力を尽くして、次のように言います。神である主を愛することを妨げるもの、また、兄弟であれ、他人であれ、どんな人があなたに妨げを与えても恵みだと見なすべきです。たとえ、その人があなたに暴力を振るったとしても、このすべてを恵みだとみなすべきです。あなたはこう望むべきであって、別のように望んではなりません。そして、これを、神である主と私へのまことの従順によって、受け入れなさい。これこそまことの従順であると、私は確かに知っているからです。それで、あなたにこのようなことをする人々を愛しなさい。主があなたにお与えになるもの以外に、何も彼らから望んではいけません。そして正にこのような仕方では彼らを愛しなさい。そして、彼らがもっとよいキリスト者であったらと望むべきではありません。あなたは、これを隠遁所での生活以上に重んじるべきです。

私は、あなたが主を愛し、また、主とあなたとのしもべである私を愛しているかどうかを、次のことにおいて知りたいと思います。もしあなたが次のことをするなら、主と私を愛していることになります。すなわち、どんなに大きい罪であっても、その罪を犯した兄弟が、憐れみを願うなら、あなたの目を見た後、憐れみを受けずに立ち去る者が、この世に一人もいないようにしてください。もし憐れみを願わなければ、あなたが彼に憐れみを望むかどうか、尋ねてください。そしてその後、なお千度も、あなたの眼の前で罪を犯しても、彼を主のもとに連れ戻

すために、私を愛するよりも、もっとその兄弟を愛してください。このような人々に対して常に憐れみ深くなければなりません。そして修道院長たちに、自分はこのようにしようと堅く決心していると、可能な時に、お話しなさい》。

ここで述べられている態度は、兄弟に対して小さき者であるとはどういうことかを最も良く説明しています。このことは、管区長にだけ言えることではなく、すべての兄弟にも言えることです。なぜなら、私たちは皆、単なる人間の限界を越えて、福音という物差しだけを受け入れるように招かれているからです。

3. 他者に対して小さき者であること

小さき者たる態度は、私たちの兄弟共同体の中でのみ実践されるべきものではなく、世間やすべての人々に対しても実践されるべきものです。

現代の人々に対して小さき兄弟でなければならないとは、どういう意味でしょうか。この問いに対して、答えを一つだけ出すというのは不可能です。しかし、ここでもまた明らかに言えることは、他者から私たちを遠ざけるような上に立つ態度は注意深く避けねばならないということです。

フランシスコは、このことを未裁可会則の二つの章で述べ、そこで、何も自分のものとしなないという選択を、すべての人々を善意で受け入れることに、そして、最も蔑まれている人々、社会の中で最も小さき者とみなされている人々と共に生きる生活とに結

び付けています。

《兄弟たちは、隠遁所やその他の所のどこにいても、いかなる所も自分のものとしないう、また、それについて、だれとも争わないよう注意しなければならない。そして、友人または敵、盗人または強盗など、だれが兄弟たちのもとに来て、あたたかく迎えなければならない》（未裁可会則 7:13-14）。

《すべての兄弟は、私たちの主イエス・キリストの謙遜と清貧につき従うよう努め、使徒が言うように、食べる物と着る物があれば、私たちはそれで満足し、ほかのどんな物もこの世で持つべきではないことを覚えていなければならない。卑しくて見捨てられている人々の間や、貧しくて体の不自由な人々、病人、癩病人、道ばたで物乞いする人々の間で生活する時、喜ぶべきである》（未裁可会則 9:1-2）。

このフランシスコの言葉は、現代の私たちの兄弟共同体が、小さき者とされている蔑まれた人々、貧しくて体の不自由な人々の間で生活することを喜びとしているか、それとも、豊かな人々や重視されている人々の間に身を置こうとしているかを吟味するようにと促しています。私たちが誰をも排除することなく、すべての人を受け入れなければならないのは明らかです。しかし、私たちが冒しがちなリスク、それは、快適な状況に身を置いている人々を排除するリスクではなく、「小さき者とされている蔑まれた人々」から遠ざかろうとするリスクなのです。私たちは、自分に問うて

みなければなりません。自分は普通だれを食事に招くだろうかと。私たちは貧しい人々をも招いているのでしょうか。私たちが招いているのは、いつもある程度社会的な地位のある人々なのではないのでしょうか。

私たちの生活様式や個人の行動の一貫性について簡単な良心の糾明を行うのも場違いなことではないでしょう。たとえば、お金の使い道、衣服、自分が必要と思っているものなど。しかし、小ささというテーマは、兄弟共同体のことだけを指しているのではなく、共同体を構成するメンバー一人ひとりに問いかけるものです。

また、貧しい人々のために働こうとする慈善活動において、私たちが隣人に行っている奉仕は、受けたものをお返しする行為であって、自分が与え主であるかのように振る舞うべきでないことを忘れ、奉仕する相手に対し上から目線で接する危険が往々にしてあります。

兄弟が貧しい人に対して間違った接し方をするのを見るのは悲しいことです。間違った接し方をするということは、私たちが小さき者であるという事実を見失っているということです。私たちに援助を求めてやってくる貧しい人々を、立派な身なりの人が話しをしにやってくる時と違う態度で遇していないかどうか、良心の糾明を行う必要があります。慈善を施す前に、尊敬と礼節ある態度を示すためには、貧しい人も金持ちも、「盗人も盗賊も」含め、すべての人に対し同じように接することが必要です。私たちは、本当にそのようにしているのでしょうか。

4. 小さき兄弟たちの共同体が選択するもの

単なる「兄弟」としてではなく（それだけでも十分に態度を表していますが）、「小さき」兄弟としてのアイデンティティーから、必然的に生まれる選択があります。それは、優先的選択ということです。優先的に選択するということは、私たちの活動の分野や福音宣教の範囲を制限することではなくて、むしろ、その優先的選択が、私たちのアイデンティティーにかなっていること、つまり、他の選択を排除せずに、最優先の選択をするということです。

私たちは何を優先すべきなのでしょう。私たちの選択とは何でしょうか。司牧的な選択、「生活計画」、管区会議や他の機会に管区が決定すべきプログラムは、これらの問いにどう答えるかにかかっています。

そのような選択、計画、プログラムは、常に私たちの小さき兄弟としてのアイデンティティーに合致したものでなくてはなりません。これらの選択を具体的にする助けとなる言葉が会憲の第53条にあります。《兄弟たちは、清貧と愛のあかしとして、共同体の使用に定められた財貨の中から、管区規則の定めに従って、教会の必要を援助し、真に困窮している人々に助けを与え、そして貧しい人々を財貨の共有者とする》。

この条文は、兄弟たちの優先的選択の目標を示しています。つまり、教会を助け、本当に困っている人を助け、貧しい人々と財貨を分かち合うということです。そこに示されたことの中には、一つの順序のようなものがあります。キリスト者の証しとして最も緊急でありながら、いつも念頭に置かれていない地方教会の援助に始まり、困っている人々への援助へと続き、そして、あたか

も最終目的であるかのように、援助だけでなく、貧しい人々との分かち合いへと向かうのです。分かち合いは、確かに、私たちの態度を最もよく表している援助です。援助するためには、自分の持ち物を一部差し出せば充分かもしれませんが、分かち合うということは、自分の持っているものすべてを差し出すことなのです。

これらの規範の中に、より小さき者となり、より貧しき者となるための現実的なヒントがあるように思われます。私たちの生活の具体的状況において、自分のすべての持ち物を投げ出すことは不可能のように思えても、会憲のこの条項に示された諸段階に従うことは現実的に可能なのではないのでしょうか。まず、地方教会の援助。次に貧しい人々の援助。最後に自分たちの持ち物を彼らと分かち合う。それは、大きな計画を立てて、それを実現するよりも、もっと謙遜で、具体的な方法であり、しかも、多分より実行可能なものでしょう。私たちは、分かち合いを通して、より偉大な清貧へと導かれるのです。

具体的な分かち合いについて上に引用した会憲第53条のすぐ後に、両親、親族、後援者たちに対して果たすべき義務が示されています（第54条）。共同参加の具体的な方法として、困窮する両親に対して経済的な援助をすることが規定されています。これらの規定の適切性は、改めて強調するまでもないでしょう。

最後に、私たちの小ささは神や兄弟たちに対してだけのものではありません。私たちは生命のない被造物に対しても、小さき者としての態度を示すように招かれています。被造物全体に対しても、小さき者であり、奉仕者であることを痛感するのです。《聖なる従順は、体と肉の、あらゆる望みを打ち砕き、克服したその体を、霊と兄弟とに従わせる。従順によって、人は世にいるすべ

ての人に服従し、人だけでなく、あらゆる獣や野獣にまで服従する。その結果、人も獣も、この人に、主が上からお与えになる限り、自分の望みのままに行える」（諸徳への挨拶 14-18）。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 次の文章を読む：

- ペルーシアの伝記 102、完全の鑑 44：フランシスコはいつも最下位にあることを選んだ。
- ペルーシアの伝記 115：フランシスコが望んだ唯一の特権は、すべての人に仕えることであった。
- 会憲 64：どのように世を巡るべきかについて。

2. 次のことを自問する：

- 兄弟共同体においてだけでなく、共同体の外においても、最も小さき者であるために、自分は今何をしており、また、何ができるか。
- 小さくあるべき立場上「課されている」状況に、どのように対処しているか。
- 「怒りや心の乱れ」を小さき者になりきっていないしるしと考えるのは正しいと思うか。怒りや心の乱れの原因は何だと思うか。
- 会憲第64条に述べられた特徴のどれが自分の中にあるだろうか。どの特徴を育てて行くべきだろうか。
- 私の個人的な生活プロジェクトにおいては、小ささ (Minority) はどのように考えられているか。

共同体としての考察のために

1. 次の文章を読む：

- 未裁可会則 6:2、5:9-15、17:9-16：実際はどうなっているか。
- 2 チェラノ 106、109、145：大伝記 5、6、ペルージアの伝記 109：総集会のたとえ話。
- 1 チェラノ 38、2 チェラノ 71、148、ペルージアの伝記 86、101：小さき兄弟たちという名称の意義が明確にされた。
- 2 チェラノ 146：私たちは小さき者なのだから、聖職者に従いなさい。
- ペルージアの伝記 9：謙遜こそは兄弟会の基盤。
- 2 チェラノ 145：フランシスコは小さき兄弟のあるべき姿について述べている。
- 三人の伴侶の伝記 42：兄弟たちは互いに対して尊敬を払うこと。

2. 次のことを自問する：

- 教会において独特の召命である小さき者たる条件としての具体的なしるしは何か。
- 私たちの関係において「上に立つ」ような態度とは、どのような行動を指しているか。
- 権威を行使しながら、小さき者でいることは可能か。小さき者として権威を行使するとはどういう意味か。
- 私たちの兄弟が普段置かれているのはどのような社会環境か。
- 貧しい人々のための私たちの活動は、彼らの慰めになって

いるか。私たちは貧しい人々に厳しく当たったり、軽蔑したりしていないか。

- 貧しい人々を優先することが必要だと確信しているか（一つを優先するということは、別の何かを諦めることであることを心に留め）、それとも、私たちにとって大切なのはすべての人の兄弟であることなのだから、貧しい人々の優先は私たちの召命に不要だと思っているか。
- 管区レベルあるいは共同体レベルで、小ささの真の証しを立てていると言えるのは、どのような具体的な行動を通してか。自分が暮らしている都市や国で、小さき者としての自分の召命を証しするためには、どのような小ささのあり方を模索すべきか。
- 地方教会において「小さき者」でなければならないとは、どういう意味か。教会における自分の立場で「小さき者として」働くとはどういうことか。
- 自分が属する兄弟共同体の置かれた状況において、貧しい人々ともっと分かち合うための具体的な方法とは何か。
- 兄弟共同体の生活プロジェクトには、共同体としての貧しい人々の優先をどのように表現しているか。

あなたがたは皆兄弟である

VIII 福音化する兄弟共同体

会憲の各章では、会則や聖フランシスコの書き物の一節がタイトルとして使われています。第5章のタイトルは、福音宣教のために捧げられたものですが（「神はあなたがたを全世界にお遣しになった」）、「全兄弟会にあてた手紙」から取られており、大変意味の深い文章です。その中でフランシスコは、私たちがなぜ世界に遣わされたのかを説明しています：

《主は慈しみ深い方ですから、主に感謝しなさい。あなたの業で主をほめたたえなさい。なぜなら、主があなたたちを全世界にお遣わしになったのは、言葉と行いで、主の御教えの証しをたて、この方以外に全能の神はましまさないことを、すべての人に知らせるためだからです。主からしつけられる時に堪え忍び、聖なる従順のうちに堅忍しなさい。主に約束したことを、寛大でゆるがぬ決心をもって守りなさい。神である主は、私たちを子として扱われるのです》（全兄弟会にあてた手紙 8-11）。

私たちの福音化の任務の意味は、一つの簡潔な文章に凝縮されています。すなわち、言葉と行いで、神の御子の御教えの「証しをたて」、この方以外に全能の神はましまさないことを、すべての人に知らせることです。このことをじっくり考えるならば、これらの言葉には私たちの生活の根本的な要素が含まれています。最初のところで、「主の御教え」について語っていますが、それは、主の御言葉と恵みが私たちのすべての行いの前にあるからです（フランシスコの別の表現を借りるならば、すべての霊的生活の

初めには、主の霊の働きがあるからです。) 私たちは、言葉と行いで、主の御教えの証しをたてなければなりません。つまり、見聞きしたこと、主の御教えを聞き、主の霊を忠実に受け入れることから生まれることを証しする必要があるのです。この証しは、言葉だけでも、行いだけでもなく、言葉と行いと両方で表現されます。言葉と行いによるこの証しは、主のこと、主以外に全能の神はましまさないことをすべての人に知らせます。この表現は、小さき兄弟として生きることを選んだ私たちの生活と選択の意味を反映しています。私たちは、キリストこそが私たちの全生活を捧げる価値のある唯一のお方であることに気付いたがゆえに、兄弟なのです。「主以外に全能の神はましまさない」のですから、主に比べたら、どのような価値も、現実も、愛も色あせてしまいます。

1. 私たちの生活の一側面

聖フランシスコの言葉が私たちに教えてくれていること、それは、福音宣教を考える時、まず問題となるのは、組織のことでも、効率的な働きでも、仕事でも、手段でも、より有用な道具のことでもないということです（もちろん、これらのすべてを配慮する必要がありますが）。福音宣教とは、純粹に、私たちの生活の一つの側面であり、私たちが本当に小さき兄弟の生活を営んでいるならば、それもまた、福音宣教なのです。

その意味で、福音宣教は、任務ではなくて、むしろ、アシジのフランシスコに倣って生きる福音的生活の当然の帰結なのです。しかし、フランシスコ自身は、福音宣教の歩みを始めた時には説

教活動をしていません。それは、彼が説教を目標としていたのではなく、主に徹底的に従うことを目標としていたからです。しかし、イエスに従うということそれ自体が、フランシスコを説教へと導きました。すべてにおいて主に従うという目標は、救いの福音を人々に伝えることを含んでいたからです。

2. 自らを福音化する

フランシスコが言うように、「神の御子の御教えの証しをたて」なければならないなら、私たちはまず、「神の御子の御教え」に耳を傾ける必要があります。それこそは、**自らを福音化する**という表現で私たちが示していることです。

それはつまり、まず、私たち一人ひとりが神の御言葉に耳を傾け、その御言葉が私たちの個人の生活と共同体生活に対して何を示しているかを理解しようと努めることを自分の使命と覚悟することになりません。兄弟共同体の中では、兄弟たちの福音的成長に対して一人ひとりが責任を持っていること、そして、主の御言葉は一人ひとりの兄弟個人に向けられているのではなく、共同体全体に向けられているのだということを、私たちは必ずしもいつも意識しているわけではないと思います。だからこそ、考えたことや、思いめぐらしたこと、御言葉を聴いて感じた難しさなどを分かち合う能力を養う必要があるのです。多くの兄弟共同体では、多分週に一度かもしれませんが共に神の御言葉を読み、それを通して、共同体として御言葉に耳を傾けることを奨励する習慣があります。そして、その習慣は強化されています。

しかし、自らを福音化することは、単に聖書の言葉に耳

を傾けることを指すのではなく、生活や出会う人々から学ぶ姿勢のことも指しているのです。神はそうした人々を通して、私たちに語りかけておられるからです。会憲の第93条はこのことを取り上げ、次のように述べています：

(1) 《見せかけではなく心からの敬意をもって他人の声に耳を傾けるように努め、共に生活している周囲の人々すべて、特に、私たちの教師である貧しい人々から喜んで学ぶ。そして、すべての人と対話する用意を持つ。》

(2) 《現代世界の中に、また、他の宗教や文化の多くの要素の中にも、みことばの種子と神のひそかな現存を認め、深い尊敬をもってそれらを研究する。》

したがって、自らの福音化に取り組むということは、福音書の言葉に耳を傾けることから、そして、素朴な日々の生活体験から、特に「私たちの教師である」貧しい人々から学ぶべきことが多いと言うことを認識することなのです。

3. 光を与えるような存在

フランススカンの兄弟共同体の存在それ自体に、福音的な価値があります。何らかの活動をする以前に、一定の場所に存在しているということ、そして、一定の生活様式で生きているということ自体が、福音化の最初の形態なのです。

この考え方は末裁可会則の16章に明確に表れており、そこに

は、「二つの方法をもって、イスラム教徒および非キリスト教徒の間で霊的に生活することができる」と書かれています。第一の方法とは、口論や争いをせず、自分はキリスト者だと宣言して、小さき者としてただそこに存在し、生活することです。第二の方法は、キリスト者としての信仰を告げ知らせ、殉教を覚悟の上で証しをたてることです。

すべての兄弟共同体は、何よりもまず、第一の形態の福音化を実践するように求められています。つまり、「口論や争いをせず」、「神のためにすべての人に従い」、「自分はキリスト者だと宣言する」ように求められているのです。

私たちの福音化の務めが時として効果を挙げないのは、私たちが「神のためにすべての人に従って」いないために、私たちの生き方が十分な説得力を持っていないからではないのでしょうか。

生活の証しによって福音化を目指すフランシスカンの兄弟共同体の特徴をいくつか見てみることにしましょう。

4. 自分のためだけではない兄弟共同体

自己完結の危険性は、どのような集団生活にもつきものです。集団を構成する人々の関わりが深ければ深いだけ、その危険性も大きくなります。この危険性は、私たちの兄弟共同体でも起こり得ます。特に、兄弟関係がかなりうまく行っており、そのため、一緒にいることの楽しさを過大評価する誘惑にはまりやすい共同体ではなおさらです。兄弟共同体の生活は快適なものとなり得るし、また、そうあるべきだということを否定する人はいませんが、私たちの忠実さが求めていることは、互いを楽しませることでは

なく、福音の教えに従って生きることなのです。

つまり、時には耳に痛い、居心地の悪いこともある福音の真理を語るためには、必要ならば、穏やかで支持的な雰囲気を作る勇氣を持たねばならないということです。言いかえれば、当たり前のことですが、私たちが一緒にいるのは心地よいからではなく、アシジのフランシスコに倣い、主に従うためなのです。また、私たちの兄弟共同体は単なる独身者の集まりでは決してありませんから、神を追い求める現代人に開かれたものでなくてはなりません。周囲の人々に心を開くということは、自分のアイデンティティーを良く理解した結果、内面に信念が生まれた証しです。兄弟共同体が主を第一に考えるなら、神を追い求めるすべての人は歓迎されるでしょう。なぜなら、彼らは私たちが神を第一に考えるのを、そして、召命を力強く追い求めるのを助けてくれるからです。神を追い求めるすべての人に開かれ、彼らを受け入れる兄弟共同体の福音的な力の重要な側面は、このようにして培われるのです。

5. 創造的な兄弟共同体

兄弟共同体とは、それを構成する人たちの生活によって成長し、発展する生きた組織です。ですから、いつも同じ生活パターンや同じ活動、同じような祈り方や集まり方を繰り返すだけの兄弟共同体は、死んだ共同体と言えます。なぜなら、すべての生活の基本法である成長と発展を尊重していないからです。

この創造性は、福音化の方法にも表れています。少し曖昧かもしれませんが、確かに示唆的ではある「新しい福音宣教」という

表現がよく聞かれるようになったのは、偶然ではありませんし、このようにして、私たちが育てるべき創造的な新しさの側面が強調されて行くのです。

福音宣教において創造性を成長させるために取るべき道の一つは、周囲の人々が昔から必要としていることと新たに必要としていることに注意を払うことです。世界がどう変化し、現代人が何を期待し、必要としているかを的確に把握することができれば、私たちはより意味のある、しかも分かりやすい提案をすることができるでしょう。

こうして私たちは、現代世界を批判し、悪い側面ばかりに目を向けて、(多分ありもしなかった)理想化された過去に憧れることにうつつを抜かしている人々の不毛な態度(それは、分からなくもありませんが)を克服することができるでしょう。私たちが頭に描いているだけで現実には存在しない理想的な人間ではなく、完全な人間について語ることができるようになるでしょう。目の前の世界を楽観主義で見つめることができるようになるのですから、誤解されていると思われるものも含め、現代社会の特徴に見られる挑戦や積極的可能性を見分けることができるでしょう。

6. 共同責任を負い、協力する兄弟共同体

兄弟共同体は、フランスカンの福音宣教の典型的な特徴を備えていなくてはなりません。福音宣教は、どれほど頭の切れる聖なる人間であっても、その人が一人で行う任務ではなく、兄弟共同体全体が多様性を活かして一致協力して行うべきものです。

このことは、福音宣教は兄弟的生活の反映であるべきだと既に

述べたことの当然の帰結なのです。私たちの生き方が福音化の第一の、そして根本的な方法であるならば、すべての兄弟は福音宣教に身を挺していることになります。なぜなら、すべての兄弟が兄弟共同体の生活様式を作り上げることに貢献しているからです。

この特徴は、兄弟共同体の提案を実現し、共同責任と協力の精神を示す具体的な方法を表してもいます。

共同責任とは、兄弟共同体においては、福音宣教を何人かの「専門家」だけに任せる仕事と考えることなく、福音宣教に対して全員が責任を持ち、また感じることなのです。それはまた、兄弟はだれ一人として福音宣教に未経験ではないということでもあります。私が兄弟共同体の福音宣教に共同責任があるのなら、他の兄弟がこの使徒職に対する私の責任（コミットメント）に対して無関係であるとは考えられません。「すべての兄弟に共同責任があり、またそれを感じる」ということは、そのように言うだけではだめで、すべての兄弟が自分の共同責任を理屈ではなく（「私は責任を感じる」ではなく）、実際に（「私には責任がある」と）表明できるように、またそれを促すような方法を見つける必要があります。この意味での共同責任とは、だれもが自分のすることを兄弟たちに支えられていると感じ、また、だれもが兄弟共同体に対する自分の務めを認識しているということです。

協力とは、遂行するべく決定された構想を実現するために共に働こうと考え、またそうする能力があることを意味します。協力は、仕事を分配する能力はあっても、その仕事を共に行うことにはしばしば不得手な私たちには、とても難しいことです。協力とは、必ずしも仕事の分担を意味しません。何かを共に行う能力のことでもあるのです。確かに、特に司牧活動においては、各人が

自分の仕事を遂行し、仲間の仕事に手を出さない方が、効率が上がるように思えることもしばしばです。各人が自分の持ち分を引き受け、同時に他人の領分には踏み込まないし、また自分の領分に他人も踏み込まない。でも、これが、私たちに求められているフランシスカンの証しなのでしょうか。

協力するためには、たとえば、在世フランシスコ会や、クララ会、フランシスカン系の修道女たち、カプチン会、コンヴェンツアル会など、他のフランシスカン家族と力を合わせて構想を練る方法を学ぶ必要があります。これもまた、協力の一つの在り方です。

7. 教会および兄弟会における兄弟共同体

兄弟共同体について話す時、思いつくのは兄弟たちの小さなグループで、このグループがもっと大きな兄弟共同体、すなわち、兄弟会を形成していること、そして、兄弟会が教会の中に置かれていることを忘れることがよくあります。

実際、ありもしない問題をつくりあげて、しかも、小さなグループはそれが構成するより大きな共同体の中でこそ、その真価と重要性を発揮するのだということを忘れて、地域の兄弟共同体がより大きな兄弟共同体になるのを妨げる危険性があります。

つまり、本会に関して言えば、地域の兄弟共同体はその置かれた具体的な状況において宣教するべく自分を「派遣」したのは、より大きな兄弟共同体、すなわち管区であったことを認識すべきだということです。私たちは皆、自分の所属する具体的な兄弟共同体を形成していますし、管区会議も管区執行部もそのように

定めています。このより大きな共同体への帰属意識を持つことはとても大切です。そうすることによって、自分の小さな世界に閉じこもる危険性から自分を守ることができます。そして、自分をもっと外に向かって開くことができます。このことは、当然のことながら、地域の兄弟共同体と管区の関係だけでなく、管区と兄弟会全体との関係にも当てはめることができます。大切なことは、あまりにも「偏狭な」見方から脱皮して、もっと開かれた、普遍的な視点を持つことです。

兄弟共同体の福音化に対する責任 (commitment) を正しく理解するためには、地方教会との既存の関係を認識することも大切です。自分が属する教区や小教区の教会が抱える現実を自分と切り離して考えてはなりません。福音宣教は、それ自体が常に全教会の一つの行為なのです。教区とは異なった「別の教会」と見られるようなことがあってはなりません。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 次の文章を読む：

- ペルーシアの伝記 103：説教をするからといって、祈りや労働、物乞いから免れるということはない。
- 三人の伴侶の伝記 54：フランシスコの説教の効力。

2. 次のことを自問する：

- 福音宣教はまず、自分の召命の喜びに満ちた体験を伝えることから始まります。では、私は自分の召命を主への愛のしるしとして、また、兄弟たちへの愛のしるしとして実践しているだろうか。
- 私は自分のすべての活動において、福音化するという目的を、自分のフランシスカンの召命理由として実践しようと努めているだろうか。
- 「貧しい人々は私たちの教師である」とは私にとってどういう意味か。私自身を福音化するためには、自分の生活で何をすべきだろうか。
- 現代世界における良い面とはどのようなことだと自分は考えているか。
- 自分のことを、変化の激しい世界に派遣されて宣教する兄弟共同体の一員だと感じているか。自分は属している兄弟共同体の福音化の任務に参加しているか。
- 福音化の側面は、自分の**個人的生活プロジェクト**においてどのような位置を占めているか。

共同体としての考察のために

1. 次の文章を読む：

- 未裁可会則 14-17：フランシスカンの宣教のマグナ・カルタ。
 - 1 チェラノ 36、三人の伴侶の伝記 46：教会はフランシスコとその兄弟たちを宣教に派遣した。
 - 2 チェラノ 10：サン・ダミアノの十字架上のキリストはフランシスコを宣教に派遣された。
 - 1 チェラノ 24、29、2 チェラノ 59、三人の伴侶の伝記 37、58、ペルージアの無名者の伝記 19：平和は、本会の宣教使命の一つ。
 - 1 チェラノ 36、65、ある管区長への手紙 4、5：説教のテーマとしての神の国。
 - 1 チェラノ 22-23、29、33、2 チェラノ 37、ペルージアの伝記 18：説教のテーマとしての悔い改め。
 - 1 チェラノ 52、97、2 チェラノ 207、ペルージアの伝記 80：象徴的な行動で示す説教。
 - 2 チェラノ 155、ペルージアの伝記 58、112：模範を示すことによる説教
 - ペルージアの伝記 103：乏しい手段による宣教。
 - 全世界をキリストの福音であまねく満たすために III:1-3。
- ### 2. これらの文章に照らして：
- フランシスコが本会とすべての兄弟に残してくれたフランシスカン霊性の福音化の側面を養い、活性化させる方法を

考えなさい。

- 福音化する兄弟共同体の具体的な体験を分かち合いなさい。

3. 次のことを自問する：

- 個人として、また兄弟共同体として、神の御言葉に耳を傾けるためにどのようなことをしていますか。一緒に集まって福音書を読んでいますか。考えや問題を分かち合うことができていますか。分かち合いが最もしやすいのは、兄弟たちとですか。それとも他のグループのメンバーたちとですか。
- 管区および地域の兄弟共同体において、福音的生活の証しとなる様式を大切にし、優先するがゆえに伴う組織や仕事の変革とはどのようなものですか。
- 司牧活動の緊急性と多様性は、私たちが一貫性のある福音的生活を送るのを一層難しくしていますか。兄弟たちが自分の兄弟生活と小教区の仕事とをうまくまとめることができないと覚えることが時々ありますが、それはなぜでしょうか。これらの問題は何に起因しているのでしょうか。
- あなた方は自分のしていることがフランスス坎的だと感じますか。それはなぜですか。
- 私たちは神を探し求めている人たちに扉を開いているのでしょうか。それとも、閉鎖的なクラブのようになっているのでしょうか。
- 自分の兄弟共同体は、福音宣教のためのプロジェクトを持っているのでしょうか。あなた方の管区ではどうですか。このプロジェクトはどれくらいの頻度で見直されていますか。

- 自分の兄弟共同体は、福音化プロジェクトの中でうまく自分を刷新できているでしょうか。
- 「新しい福音宣教」のために差し迫って必要とされていることは何ですか。
- 自分の兄弟共同体の中で、私たちは協力ができているでしょうか。それとも、ただ仕事を分担するだけで、相互に干渉するのを避けようとしていないでしょうか。
- 自分の兄弟共同体と管区の関係はどうなっているでしょうか。自分の管区と兄弟会との関係は？私たちは地方教会の中に根付いているでしょうか。

第三部 フランシスカン兄弟共同体の活性化

Ⅰ 兄弟的生活と兄弟共同体の活性化

今日ほど、すべての兄弟が兄弟的生活の活性化の必要性和緊急性を認識することが求められている時代はありません。この目的達成のために、管区長や修道院長が活性化の「役務」(ministry)を、喜びをもって引き受ける必要があるばかりでなく、兄弟共同体のすべての兄弟もまた、共同責任の務めを引き受け、帰属意識を高め、交わりと対話を深める必要があります。このようにしてこそ、兄弟たちと兄弟共同体は成長のリズムに入ることができるのです。

1. 活性化は必要か？

活性化はこれまで常に兄弟的生活を実践する上で重要な役目を果たして来ました。しかし、今日では、仕事や生活の場としてのコミュニティーの発展のために、活性化には新たな必要性和一層の重要性が増して来ました。人間関係の世界と集団生活のリズムから捉えた活性化の概念は、個人および集団の成長を促すことを含むと同時に、個人や集団の決定や行動の進め方をも含みます。フランシスカンの生活は、この線に沿って営まれ、規模を問わず、すべての兄弟共同体の内面の活性化の必要性を強調しています。同じことが、教会や世界に対して本会が占めている大きな社会的組織の活性化についても言えます。

私たちは、従順を一義的な意味で解釈したり、予定表や習慣に

注意を向けたり、修道院会議や管区会議を厳密に実施したりすることを、地域や管区の兄弟共同体の在り方だと考えるような体制から、生活を明確に定義する体制へと変わって来ました。過去を大切にする伝統的な場にあるのは、活性化してきたおかげなのです。フランスカン霊性が具現されている模範的な場がたくさんあるために、この問題は、現在さまざまな用語で呼ばれています。兄弟関係を活性化することは本当に必要でしょうか、それとも、すでに必要とされてきたことを今また繰り返しているだけなのでしょうか。活性化は実現不可能な空想であり、一時的な流行なのでしょうか、それとも、兄弟生活の中での優先事項なのでしょうか。

この言葉の語源（15世紀に、アニマすなわち精神からアニマツィオが生まれた）を考えると、その意味がわかります。生命を吹き込む方法、動きをつくり出す方法と言う意味です。それに養い育てるという考えを付け加えます。それは、まず魂、すなわち、個人やグループの内面的なアイデンティティーを主張するための方法です。私たちが活性化を考える場合、この優先順位を尊重しなくてはなりません。兄弟的生活における活性化について語るということは、兄弟の成長とその生活環境の成長の重要性を喚起するということです。活性化は、生活と行動の芸術となっており、それによって兄弟たちは、福音的な生活様式の中で出会い、互いを認識し、そこから生まれるものを分かち合いたいと願うのです。活性化するためには、兄弟共同体が、地域や管区や世界規模のものすべてを含め、自分のことをもう出来上がった、完成したものと思わず、成長とさらなる完全を目指す必要を感じることが前提条件となります。また、絶えず次のような質問を繰り返すことも

必要です。私たちの兄弟的プロジェクトが成長するためには、そして、私たちの福音に対する忠実さを深めるためには何をなすべきか、と。この問いかけは、兄弟一人ひとりが自分の生活を愛し、それを活性化したいと願っているとの仮定の上に成り立っています。活性化は、私たちの中に、そして神から私たちに託された人々の中に、神の国と神の国の正義を求めるように促しています。その根底にあるのは、フランシスコが愛してやまなかった使徒ペトロの思想です。すなわち、旅人となり、寄留者となりながら、私たちの間に絆をつくりあげるような方法で福音の教えを追求し、実践しつつ、この世に住まうことなのです。

2. 活性化、それは不便なこと！

フランシスカン生活の新しい様式が花開いたにもかかわらず、そこには「誤解」があります。活性化は、多くの人に、管区長や共同体の責任者の職務だと考えられており、まるで、権威による奉仕を行使する人に任された任務であり、院長や修道院顧問会、管区理事会の専権事項であるかのようです。こうした傾向は、権威による奉仕が前もって行使されてしまうことの名残です。

また、あたかも活性化が小人数のグループのためだけのものであるかのように、活性化を、特定の地域に根ざした生活を選択した小規模の兄弟共同体の絶対必要要件と考えたがる「偏狭な傾向」も存在します。活性化は、大規模な兄弟共同体や、基盤のしっかりした修道院では望み薄と考えられています。そのような態度からは、一定の年齢層や活動グループからの反発が生まれ、何も期待され得ない兄弟がいることが明らかになるだけです。それどこ

ろか、すべての兄弟共同体が活性化を必要としています。管区の療養棟（infirmary）も修練院や管区理事会や小教区を委託された兄弟共同体と同じくらい活性化が必要です。活動上の理由で独り暮らしをしている兄弟たちは、大きな修道院に暮らしている兄弟たちと同じくらい活性化を必要としています。

もう一つの難点は、「活性化の方法」に由来します。一部の兄弟たちは活性化を週の定例会や典礼や新しいニュースレターの配布などと言った公の活動に限定しています。それでは、手段が目的にすり替わってしまいます。活性化とは、年代記を新しくすることでもなければ、日々の活動計画を新しくすることでもなく、それ以上のものなのです。活性化には、共同体の歩みに不可欠の条件である責任が伴います。活性化を具体化する手段はたくさんあります。

活性化が不足すると、兄弟たちが「ばらばらになる」危険があります。活動が過多になると、私たちは互いに疎遠になりがちです。日程表を見て、スケジュールが盛りだくさんになりすぎているかチェックするだけでも充分です。活性化の不足はまた、恐らくは社会的、司牧的、霊的な必要性に応えるためだとしても、規則を生み出します。また、兄弟共同体が必要最低限のことだけしかしなくなるリスクを生み出します。そこには、希望の雰囲気を感じられません。兄弟共同体から何も新しいものを期待しなくなってしまうのです。共同体のマンネリ化がそこかしこに見られます。その原因は、会議や研修会や読むべき宿題が多すぎることにあります。こうしたマンネリ化は、あらゆる環境において、グループのあらゆる努力に対する無関心を招きます。

活性化の動きがない兄弟共同体とは、私たちの召命の理解では、

兄弟共同体ではありません。私たちは共通の事業を行うために集まっている独身者クラブではありませんし、ましてや、物質的あるいは情緒的安定を求めて集っている友達グループでもありません。私たちは兄弟であり、誓約した生き方の中で本物の人間関係を必要としています。活性化が予定表の組織化や関係性の規定と考えられてしまったら、それは一つの贅沢として、あるいは不便なこと、または悪しき良心の芽生えとして疎まれてしまいます。

3. 活性化、それは義務！

私たちは、語の本当の意味での司牧的責任として、互いに活性化し合わなければなりません。つまり、アシジのフランシスコのやり方に倣い、復活の体験を生かして、互いに導き合い、進歩を促し、助け合うということです。要するに、**互いに対して責任を負う**ということです。このような活性化をはかるためには、共同生活を完全に実現させることが必要です。私たちは、霊性の多様性や相違の中で、福音的生活をよりよく証しする者になりたいのです。活性化とは、気晴らしではなく、小さき兄弟としての自分の生活を完全なものにするための基本条件なのです。兄弟たちが自分たちの生活の質や、祈りの内容、証しの姿勢、宣教使命の果たし方などを改善する努力をしているような場では、共同生活を表現し、実践する備えができていくことになります。兄弟たちは、行き当たりばったりでやったり、過去の安定に頼ったりしてはなりません。私たちのメンタリティーを変えるためには時間が必要ですし、新たな方法でリスクを負い、私たちの召命を全うするためには大胆さが必要です。

その意味で、活性化されるということは、私たち自身について、私たちの生き方について、活動と宣教使命について、担っている責任について、遂行する役割について、および自分の置かれた正確な状況については、**ある程度の距離を置いて見る**ということです。兄弟共同体の活性化には、ある程度の距離を取ることが必要です。それは、原点に立ち戻るため、私たちの生活を絶えず見直し、誠実に評価するためです。これらのことをするにあたっては、年齢や健康状態、メンタリティーの違い、同じ管区、同じ屋根の下にあっても養成の時代や生活体験の違いなどを考慮しなくてはなりません。活性化は常に完成への途中（*in fieri*）であり、ということは、絶えず工夫を凝らさなければならないということです。クレルボーのベルナルは、活性化について、次のように仲間たちに警告していたものです：「人に飲み水を勧める時は、自分も同じ井戸から汲んだ水を飲みなさい」と。このことは、福音の教えに従って生きる兄弟たちにも、また、共に暮らす兄弟たちにも言えることです。自分と共にいる人たちに水を差し出す前に、私たちはまず自分が休み、呼吸を整え、自分の井戸水で喉を潤すことが大切です。これこそ、活性化が兄弟共同体にもたらしてくれることです。

4. 共同生活を活性化することを選択する

私たちの生き方では、活性化は相互意識と相互責任という過程を辿ります。そうすれば、一方向だけの権威主義や非社会的な無秩序に陥るのを防ぐことができます。つまり、さらに言うならば、権威だけが責任を負うのではなく、各グループが組織の最小単位

を構成すべきだと言うことなのです。活性化するには、記憶を辿ります。そして、生き方の本旨を思い起こし、共同で決めたことの実践を必要とします。私たちは共に生きること、喜びや悲しみを分かち合うこと、共同体のプロジェクトにおける神の御心を識別することを絶えず学ばなければなりません。進歩するためには、初期養成期間中に身に付けた確信に基づき生きる必要がありますが、それだけでなく、私たちの伝統がもたらす確実な資料にも向き合う必要があります。

兄弟一人ひとりと兄弟共同体が意識的に選び取ったこの道は、源泉資料を根気強く繙く態度に裏打ちされています。それは、人生全体に関わるものです。たとえば、人間のこと、心理的なこと、霊的なこと、社会的なこと、共同体的なことなどです。「**見て、判断して、行動する**」という活性化の方法は、実践の基本となる知恵として常に有効です。聖フランシスコの「会則」と「遺言」は、兄弟的な活性化のためのこの方法の具体例を挙げてくれています。良く読み、意味を理解し、神が私たちに、兄弟たちを通して、また、社会が私たちに期待していることを通して求めておられることを力を合わせて実践しなければなりません。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 次の文章を読む：

- 会憲 9:3、79:1。

2. これらの文章に照らして：

●兄弟共同体の活性化のために兄弟一人ひとりが負っている責任について考えなさい。

3. 次のことを自問する：

●兄弟共同体の活性化において自分の責任をどのように引き受けたらよいか。

- 地域や管区の兄弟共同体の活性化に対して特別な責任を負っている人たちと、どのように協力したらよいか。

- 私の個人的生活プロジェクトは、私の属する兄弟共同体の活性化のために責任を引き受けるように私を促す手段となっているだろうか。

共同体としての考察のために

1. 次の文章を読む：

- 1 チェラノ 35：初期の共同体が行った識別。
- 1 チェラノ 42：リヴォ・トルトでの体験。
- 1 チェラノ 103：いつも新たに始めようとする考え方。
- 完全の鑑 85：すべての兄弟でつくりあげる真の小さき兄弟の理想像。

- 会憲 45:1：兄弟共同体を築き上げるのはすべての兄弟である。

2. これらの文章に照らして：

- 兄弟共同体を築き上げるにあたってのすべての兄弟の責任について、兄弟共同体プロジェクトを構成するあらゆる角度から話し合いなさい。

3. 次のことを自問する：

- 自分の個人的体験や価値観、生き方、来し方、喜び、劇的な出来事を分かち合うためには、どこからスタートすればよいか。
- 福音的プロジェクトにおいて成長するためには、会則や会憲に定められていること以外にどのような手段を取るべきだろうか。
- 私の兄弟共同体は、その福音的生活プロジェクトに照らして行った選択の中で独自の主張を持っているだろうか。
- 地域の、あるいは管区の兄弟共同体として自分たちの生き方を実際に見直すことは可能だろうか。そして、その見直しを「必要な規律」のようにすることは可能だろうか。
- 自分の生活と兄弟共同体双方のための神の御心を識別するには、どうすればよいだろうか。
- 地域の生活プロジェクトの作成において、また、決定を行う過程において、兄弟一人ひとりが役割を果たすためには、どうすればよいだろうか。
- 個人の考えや霊性の違いを統合するにはどうすればよいだろうか。
- 管区内のグループ全般と各兄弟共同体の多様性を尊重する

ためには、どのような活性化をはかることが重要だろうか。活性化の対象は、年齢別のグループか、興味の中心や、自発的な訪問、幕屋の集会、あるいは、特定のテーマでの集まりか。

- あなたの兄弟共同体では、お祝い事や祝日をどのくらい大切にしているだろうか。感謝祭の期間中、祝うための日を取ってあるか。兄弟共同体は感謝祭のためだけに時間を割いているか。
- 兄弟共同体の生活プロジェクトは、兄弟共同体を活性化する手段となっているか。なっているとしたら、あるいは、なっていないとしたら、それはなぜか。

Ⅱ 兄弟的生活と共同責任

共同責任は、兄弟共同体において兄弟一人ひとりが持っている価値観と、兄弟的プロジェクトが救いの計画の中で持っている意味から生まれています。したがって、兄弟共同体の各メンバーは、自分が受けた呼びかけに応える義務があるだけでなく、兄弟たち一人一人が自分の応答に忠実でいられるように協力する義務があります。つまり、兄弟各人は、他の兄弟たちに対して責任を負う義務を感じなければならず、また、各兄弟は、兄弟的生活の建設に責任を感じるべきであり、さらに、共同体のプロジェクトを作り上げるにあたり、兄弟たちの間に相互性と協力がなければならないということです。

1. 責任はどこから始まるのか

個人的な責任感が欠けているならば、兄弟的な共同責任を果たすのは困難です。初期養成の時期は、人間関係の訓練を基礎に置いています。兄弟は、自分の人間的成長に努め、自分の召命と霊的生活を引き受け、肉体的・知的発展に励むことを開始した時に初めて、兄弟共同体を生み出し、築き上げることができます。要するに、生涯養成の過程においてそうなのです。兄弟がこの過程に真剣に取り組めば取り組むほど、共同体からの反応も増し、また、兄弟たちに対して責任を引き受ければそれだけ、共同体への帰属意識も強まるのです。人間は一人で成り立っているのではありません。人はみな、互いに他者と交流しています。一人ひとりが、地域の兄弟共同体の召命と、大きな管区の兄弟共同体の召命

とに対して、自らの生活でもって応えるのです。

2. 人は他者に対して、どの程度まで責任があるのか

創世記が問いかけている重大な問題の一つは、他者に対する責任の問題です。カインは、アベルを殺した後、神に向き合わずにはなりません。カインは自分を守るために、また、罪悪感と偽りの気持ちから、神に答える代わりに質問します：《私は弟の番人でしょうか》と（創世記 4：9）。彼は言い訳のために、弟への責任を放棄することを望んだのです。

遅かれ早かれ、永遠の生命が私たちに同じ質問を投げかけて来るでしょう：《私は兄弟たちの番人でしょうか》と。

影響力が感じられる場所というのは非常に広大で、たとえば、日々の活動、決定的な瞬間、祝祭や劇的な出来事、入会と退会などがあります。どの出来事も、兄弟が自分の兄弟たちに対して責任を負う小さき兄弟となるのを助けてくれます。兄弟たちが私たちに与えられたのが恵みとしてであれ、試練としてであれ、あるいは、福音宣教の場としてであれ、カインの衝動的な行動は常に私たちの中に秘められています。個人主義を助長するか、それとも乗り越えるか、また、自分の中に閉じこもるか、それとも他者と連帯するかは、私たち次第なのです。他者との交わりに入ることにより、己の根底にあるエゴイズムからの転換が生まれます。

アシジのフランシスコは、自分の意志に頼ることの本来的な危険性を常に意識していました。彼の「訓戒の言葉」（訓戒 2、3、4、8、18 参照）を読むと、そのことが良くわかります。兄弟的な体験は、根源的なプライドや従順からの逸脱の対極にあるものです。

「訓戒の言葉」は、愛徳こそが従順や共同体とのつながりに勝ることを教えています。人はどの程度まで自分の兄弟たちに対して責任を負うべきなのでしょう。他者への愛のために、自分を投げ捨てるまででしょうか。

しかし、愛徳にも相互性と責任の担い合いがあります。これは、「私の」責任の持つもう一つの顔です。他者もまた、私に対して責任を持っています。私の兄弟たちは私に対して責任があるのです。誓願の新しい文言の末尾は、そのことをはっきりと示しています：《・・・また皆さまがたの兄弟的な助けに支えられて、神と教会、そして人々に奉仕することを目指し・・・》（会憲 5:2）。

「皆さまがたの兄弟的な助けに支えられて」とは、兄弟たちの貢献によってということで、私のフランスカン・アイデンティティの達成のために必要な兄弟たちの果たす役割のことを意味します。

3. 共同責任、それは一つの生活様式

兄弟的な生活は私たちの福音宣教の最も大切な部分です。共同責任は明確なプロジェクトの中に具現されなければなりません、私たちを結び付けるのは、活動や使徒職、司牧職、社会的責任ではありません。私たちを結び付けてくれるのは、友情の絆や有効性を越えたものです。私たちの兄弟的生活の中心には、フランスコとその兄弟たちに倣って、共にキリストに従う弟子となろうとする選択があります。私たちの相互性と共同責任の関係を証明するもの、それは、福音への信仰と忠実です。

兄弟的に生きようとすることは、長い見習い期間が必要であることを意味しています。兄弟一人ひとり、見知らぬ人たちの集団の中でただ共同生活を送るだけの状態を乗り越え、兄弟共同体

において、家族として、あるいは、家庭的な集まりの中で共に生きるように努力しなくてはなりません。そこにおいてこそ、互いの違いを受け入れることによって、一致を生み出すことができるのです。共同責任を担うためには、自分に頼るのではなく、他者や同世代の人々に心を開くような生活様式を必要とします。仮に兄弟共同体で皆と生活することはできなくても、他者と生活することは常に可能です。フランシスコ家族の初期の時代の兄弟間の、また、クララ会と在世会との補完的な関係や相互支援の関係について調べてみれば、このことが良く分かります。

兄弟的生活と他者への共同責任を基本に、フランシスコがお互いに対する従順をどのように理解していたかを調べてみましょう。それらの特徴は、真の、愛徳に満ちた、完全な従順です（訓戒の言葉 3）。フランシスコは、他者と一緒に神のみ旨を見いだすことと交わりを大切にすることの必要性を常に私たちに教えてくれています。私たちはどうすれば、自分の近い兄弟たちや兄弟共同体だけでなく、クララ会の姉妹たちや《卑しくて見捨てられている人々、貧しくて体の不自由な人々、病人、癩病人、道ばたで物乞いをする人々》（未裁可会則 9:2）の保護者となれるでしょうか。共同責任は、アシジのフランシスコに触発された私たちや、クララ会の姉妹たちおよび信徒の間で実践されます。共同責任は、身振りや行動に、選択や態度に現れるようではありません。1976年当時、総長であった兄弟コンスタンティン・コーゼーはすでに、相互責任に注意を払うことと、新たな体験に心を開くことの緊急の必要性を強調しました。

当然のことながら、小規模な兄弟共同体になればなるほど、共同責任の関係の絶対的必要性に対して一層敏感になります。人間

関係に問題があれば、それはすぐにわかります。たとえば、寄生状態、拒絶反応、出過ぎたリーダーシップ、孤立、活動過多による慢性的な不在状態、危機など。しかし、どのような兄弟共同体でも、集団がうまく機能し、人間関係が調和を保つかどうかは、一人ひとりのメンバーにかかっています。各人がそれぞれ、その才能や靈性や理解力、さらには、その弱さまで尊重されるためには、私たちはどのように行動すべきでしょうか。これこそは、活性化に伴う挑戦です。仮に訪問客があって、「お宅のグループではどなたが責任者ですか」と訊かれたら、「一人ひとりが他の者に対して責任を負っています」と答えても、そのために無秩序に陥らないでいられることが理想でしょう。兄弟たちを特別視したり、特定のイメージやカテゴリーで決めつけたりしないためには、絶えざる努力が必要です。

4. どのような行動が人に責任感を持たせるか

「会則」が定め、象徴的な例を示してくれている生活様式を見てみることで、それが分かると思います。いくつかを引用してみましょう。

●他の兄弟たちとその魂のケア（未裁可会則 5:1,7）；

●物質的なケア（未裁可会則 9:13-14；隠遁所のために与えられた規則 10）；

●権力と支配のないこと（未裁可会則 5:12）；

●病氣や弱っている兄弟の尊重と保護（訓戒の言葉 24、未裁可会則 10、裁可会則 6:11）；

●礼節のある関係（未裁可会則 7:16）；

- 愛情を込めて互いを受け入れる（未裁可会則 7:15-16; 11:4）；
- 互いに仕え合い、従い合う（未裁可会則 5:14）；
- 働くことと金銭と施しについての共同責任（未裁可会則 7:8-9）；
- あらゆる状況を識別すること（「必要に迫られるなら」とか「主の御心にかなうと判断するなら」という表現がたびたび出てくる）；
- 他の兄弟からの忠告、矯正、援助をより頼むこと（未裁可会則 5:5-6、訓戒の言葉 18、22、23）；
- 教会に属していることを自覚し、カトリック的に行動すること（未裁可会則 19）；
- 貧しい人々の状況を共有すること（未裁可会則 9:3）など。

私たちの伝統は、責任ある行動へとつながる道と態度を示してくれています。共同責任は、場所や時間、任務、共通の活動などの問題よりもはるかに重要であると思います。つまり、日常の些細なことにおいても、決定的な瞬間においても、兄弟間で共同体として熟慮することが大切なのです。このような生き方は、その生き方の質と利便性を評価するために、絶えざる識別を必要とします。こうした行動を私たちの手近にある手段の中で生かして行くことが必要です（たとえば、集会や典礼の準備、入会者を迎える時の役割分担、新しい職務や活動の導入、病気の兄弟の世話など）。それでも、根本的な問題は残っています。どのような行動が人に責任感を持たせるのか。言い換えれば、他者に対する責任（コミットメント）を成熟した形で果たすためには、兄弟共同体の中

でどのような対策を講じなければならないか。このような在り方に導くために、初期養成はどうあるべきか。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 次の文章を読む：

- 未裁可会則 5、裁可会則 10、訓戒の言葉：責任について述べられているのはどこかチェックしなさい。
- ペルーシアの無名者の伝記 25-30：初期の兄弟たちはどのような生活を送っていたか。

2. 以下のことを自問する：

- 兄弟共同体を活性化するにあたって、自分はどのように共同責任を負うべきか。
- 家事や使徒職のために、自分はどのように共同責任を負うべきか。
- 兄弟たちから自分に託された職務において、兄弟たちの共同責任を促すにはどうすればよいか。

共同体としての考察のために

1. 次の文章を読む：

- 未裁可会則 9:10-11、裁可会則 6:7-8：兄弟たちの互いに対する責任。
- ペルーシアの伝記 76：フランシスコは会に対して責任を負っている。
- 会憲 82:1, 181:4：共同責任について。

2. 次のことを自問する：

- 兄弟共同体において共同責任の意識の現れであると思われる具体的な表現はどのようなものか。
- 私たちの兄弟共同体では、共同責任はどのように促されているか。
- 共同責任において成長するためには、あなたならどのような具体的な提案をしますか。それらの提案を**兄弟的生活プロジェクト**にどのような形で組み入れようと思いますか。

あなたがたは皆兄弟である

III 兄弟共同体の活性化のために奉仕する管区長と修道院長

1. 足を洗う奉仕

権威による奉仕を委ねられた人たちは、それを遂行するための生きた模範を持っています。つまり、福音記者ヨハネが描いた足をお洗いになる謙遜なキリストのお姿です。権威の職務を遂行するよう命令を受けたら、彼らはまずキリストにその範を見いだします。考慮しなければならない重要なことは、その職務が聖霊の働きをかき消さないために、キリストの姿を支えとすることです。本会の職務は霊性と福音の実践に基づいているからです。

長上の役割について語るにあたり、フランシスコ会の源泉資料はさまざまな用語を用いています。たとえば、管区長 (minister)、クストス (custos)、長上 (prelatus)、修道院長など。一番頻繁に使われている用語は「兄弟たちの管区長」、すなわちミニステル・フラトゥルムです。フランシスコは、この用語を聖書的しもべの姿、そして隠棲修道院制におけるしもべの姿と結び付けています。つまり、神のしもべ (Servus Dei) です。小さき兄弟たちは、地域レベル、管区レベル、あるいは全兄弟会レベルで兄弟たちに仕えるのです。まるで、一つの肩書が別の肩書を当然必要とするかのように、「管区長でありしもべである」と言っています。長上の職務と執行部の責任は謙遜で模範的なしもべのモデルを範とします。足を洗うイメージは、レベルと価値の変化、すなわち、他者に対してへりくだる動き、上に立ち、兄弟的交わりのために奉仕する者の側の自己放棄と愛の実践を示しています。

兄弟たちが旅する生活から定住生活に移行するにつれ、地域の

長上を任命する必要性は高まって来ました。地域の保護者を表すクストスという用語は、管区長の職務に補足事項を加え、その役割の広さを喚起しています。つまり、兄弟たちを守り、保護し、擁護する役割です。修道院長（guardian）という用語がフランシスコの書き物に出てくるのはもっと後のことです（1224 年から 1225 年）。それは、ラテン語の修道院に関する用語から生まれたもので、管理者の責任を明確にする目的を持っています。この用語は、1221 年以降にドイツとイギリスで見つけられました。それとは逆に、地中海沿岸地方では、最初に見つけられた用語はミニステル・ロチ（minister loci）、つまり、地域の奉仕者です。

兄弟共同体ができた最初のころから、権威者のすべての職務は、どのレベルにおいても（地域レベル、管区レベル、全兄弟会レベル）、魂の世話と無私の心で仕える奉仕職という考えを軸としています。「会則」はこうした用語を重要性の順に定めているわけではなく、用語は変化して行く兄弟共同体の現実在即したものになっています。「会則」と「訓戒の言葉」では、管区長の役割は兄弟的従順を司る形態に凝縮されています。

2. フランシスカンの権威の行使の仕方

この種の職務については、まず職務に専念し、それを行行使する以外に養成の道はありません。日々の兄弟的生活以外に訓練の場はないのです。兄弟間の相互性と共同責任について先に述べたことは、管区長、修道院長、養成担当者についても言えることであり、兄弟たちを委ねられた彼らに求められている然るべき裁量とは以下のようなものです：

- 無償の愛（未裁可会則 11:5、訓戒の言葉 9）；
- 母のような心づかい（未裁可会則 9:14）；
- 行き届いた魂の世話（未裁可会則 4:6）と生活への注意（未裁可会則 5）；
- 霊的な助け（未裁可会則 5）；
- 生活プロジェクトの擁護と保護（隠遁所のために与えられた規則）；
- 互いに尊敬し合って行動し（未裁可会則 17:16）支配しない（未裁可会則 5）；
- 愛をもって忠告し、矯正する（未裁可会則 5）。

「会則」は、管区長が自分自身をどのように律し、自分の職務をどのように遂行すべきかについて明快に述べています：

- 自分の魂をよく守らなければならない（未裁可会則 5）；
- 現世的な生き方をしない（未裁可会則 5）；
- 「足を洗う」ことにより、務め、奉仕する（訓戒の言葉 4）；
- 職務や権力に執着せず、それらを自分のものとししない（訓戒の言葉 4、19）；
- 必要性の法則に従う（未裁可会則 20）。

しかし、「会則」は権威による奉仕に固有の側面については何も語っていないことを認識しておく必要があります。たとえば、この職務に伴う孤独についても、必ず受ける批判についても、どのように相談を受けるべきかについても、また、霊的識別や、緊急時の介入についても述べていないのです。けれども、周知のように、「会則」は精神を提案しているのであって、決議論を打ち立て

ようとしているわけではありません。

3. 困難と挑戦

管区長たちは、私たちの福音的生活の一種の伝統を具現しており、キリストに従うという私たちの誓約の及ぶ範囲を知らしめる使命を持っています。私たちの進言がなければ、彼らは生活プロジェクトの主なアイデアを把握することができません。管区長たちが、言葉だけではなく行動においても、この伝統を形作って行くために、私たちは彼らをどのように助けることができるでしょうか。

権威者の責任は、良い方向にも悪い方向にも人を変えることがあります。上に立つ者は、自分たちに問いかけ、自分たちの刷新と賦与された権限の行使にあたって、注意を怠らないように仕向けてくれる人々を必要としています。それは、追従や「うぬぼれ」の罠にはまるのを避け、自分の利益を求めたり、権力を強化したりするのを避けるためです。この権威者の役割を、絶えざる回心のプロセスとするためには、どのように果たしたらよいでしょうか。自分が兄弟であり、そのこと自体が役割や肩書や賦与された権限よりも重要であるという事実を見失わないためには、どうすればよいでしょうか。

権威者としての自分の役割に夢中になったり、他者と隔てられたりしないようにすることが必要です。権威者は支援と、励ましと助言を必要としています。兄弟的生活を推し進める愛徳の掟が重要性のピークに達するのは、兄弟たちと管区長の関係においてなのです。職務の行使につきものの大変な孤独に管区長を追いや

らないためには、何をなすべきでしょうか。兄弟たちは、管区長や修道院長との関係に責任があるのでしょうか。

管区長も修道院長も、特に共同体の決定的な出来事（たとえば、生活様式の選択、祈りの生活、個人および共同体の成長の危機、入会と退会など）に関して識別を行うに当たり、積極的な役割を果たします。この観点から見れば、彼らの職務は、極めて司牧的な重要性を持っています。つまり、**成長の過程にある人々にイエス・キリストの現存を示す技（art）**が必要なのです。上に立つ者が識別と霊的同伴の人となるためには、どのような養成を受けなければならないのでしょうか。

彼らは自分の権限の一部として日々の活性化に努め、自分の存在を通して、私たちの**生き方**への忠実さを表すしとなります。活性化に対する私たちの期待はしばしばとても大きいので、管区長が介入してくれることを当てにして、ある限度を越えたり、諦めたりすることがあります。権威による奉仕職は、見返りを求めない気持ちと、共にする祝賀（典礼、誕生日、記念日、誓願式などの時間）に寄与しなければなりません。兄弟たちがこの見返りを求めない気持ちを管区長だけに押し付けずに、自らも見失わないようにするためには、どのような代償を払わなければならないのでしょうか。

管区長は一致の要因である限り、兄弟的交わりの推進者となります。そのためには、大胆さと勇気が必要であり、それがあれば、真理を確立し、和睦の身振りを示すことができます。管区長が和睦をもたらすゆるしと対話に対して責任を持つためには、どのような助けが必要でしょうか。

管区長や修道院長は、共同体内部及び外部の兄弟的な関係を取

りまとめる単なる管理者ではありません。共同体内部の生活に重点を置き過ぎると、兄弟たちは内向きとなる危険があります。また、無制限に解放的であろうとすると、共同体のアイデンティティーが犠牲になります。単に霊的な面、社会的な面、教會的な面での緊急性に応えることばかり重視すると、活動主義に陥ったり、持続性のないものに終わったりする危険があります。バランスのとれた重要なリーダーシップを促進するにはどうすればよいでしょうか。見知らぬ人をどこまで歓迎できているか、社会的にどこまで開かれているか、貧しい人々の間にどこまで入って行けているか、教會にどこまで参与しており、J P I C（正義とエコロジー）の問題にどこまで深く関わっているかを定期的に評価するために、どのような手段が取られるべきでしょうか。

活性化の問題に気を取られていることの多い共同体の責任者たちは、自分自身の人間的・霊的生活をおろそかにしがちです。新しく管区長となった兄弟が自分の役割に慣れるためにはどのような方法があるのでしょうか。管区長に再選された兄弟にはどのような配慮が必要でしょうか。任務を終えた兄弟たちにはどのような支え（同伴）と援助が必要でしょうか。どうすれば、いろいろな体験に共同参加できるのでしょうか。生涯養成によって、どのような援助が管区長や修道院長、分管区長（クストス）に与えられるのでしょうか。

4. 証しの重要性

管区長や仕える職務にある人たちの献身ぶりを評価するすべての要素は、生きた真の証しの重要性に集束されます。彼らが訴え

ることのできる唯一の権威とは、養成の段階を通過したこと、兄弟的生活の訓練を受けたこと、そして、自分に対する主の御心を識別し、それに従うことによって自らの召命に応えようと努力したことによるものに他なりません。大切なことは、知識でも職務の蓄積でもなく、個人の経験であり、愛をもって仕えようとする意志です。すべての証しは、可能性や限界、才能や弱さ、賜物や傷を抱えたその人の真実さを必要とします。自己の活性化と兄弟たちの活性化の基本的な基準は、在り方と言葉の質なのです。フランススコによれば、言うことと行うことがすべてとなります。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 次の文章を読む：

- 2 チェラノ 151、186：上に立つ者はキリストの代理である。
- 訓戒の言葉 3：真の従順について
- 訓戒の言葉 4：だれも目上の職を自分のものにしてはならない。
- 訓戒の言葉 19：謙虚な神のしもべ

2. 次のことを自問する：

- 次のことに対する自分の態度はどうか：権威者という「奉仕職」にある兄弟たちに対して。兄弟的な協力に対して。組織的な反対に対して。その態度の理由は何か。
- 「愛ある従順」とは、自分の生活の中でどのような具体的な意味を持っているか。
- 今「権威者」という奉仕職を自分が行使しなければならないとしたら、主から委ねられた兄弟たちに対して権威をどのように行使するだろうか。そのような「奉仕職」のために、自分は養成のレベルでどのように自分を備えているだろうか。

共同体としての考察のために

1. 次の文章を読む：

- 末裁可会則 16：宣教に派遣するために管区長が行う識別。
- 末裁可会則 4 と 18：管区長の責任。

- ある管区長への手紙：慈しみの行為と実践における識別。
- 長上への手紙：御聖体、神への賛美、説教に関して必要なこと。
- 1 チェラノ 104、2 チェラノ 188：この問題に関するフランシスコの心配、確信、失望。
- 2 チェラノ 151、214-215、ペルーシアの伝記 106、完全の鑑 46：管区長と修道院長に従っていたフランシスコ。
- 大伝記 14:4、三人の伴侶の伝記 46、ペルーシアの無名者の伝記 37：フランシスコが自らに求めている従順。
- 大伝記 11:11：総長代理の命令に従おうとしなかった一人の兄弟のこと。

2. 次のことを自問する：

- 兄弟共同体として管区は、修道院レベルおよび管区レベルで活性化の責任を引き受けるために、兄弟たちをどのように養成しているか。
- そうした兄弟をどのような基準で選んでいるか。
- 管区および兄弟共同体において、権威者の役割を果たす責任を持っている兄弟を兄弟たちはどのように助けているか。

あなたがたは皆兄弟である

IV 兄弟的生活と修道院会議

《すべての兄弟たちは、自分たちの間に家族的な精神と相互の友情を育む習わしを大切にする》（会憲 39）。兄弟共同体の日常生活の中で実践されるべきこの家族的な精神と相互の友情が最もよく表現されるのは、修道院会議においてです。

修道院会議は現在かつてないほどに、兄弟的生活を表現し、その中で成長するための一つの有効な手段として認められています。兄弟たちは、フランシスコ生活の基盤が兄弟的心遣いにあることを意識して、互いを必要とし合う存在として認め、責任を持って互いに助け合おうと心を開くのです。

1. 兄弟的生活を表現する場である修道院会議

フランシスコ会の源泉資料を読むと、初期の兄弟たちが早速、聖フランシスコの周りに集まって、いつも兄弟間のコンタクトを取ることで、兄弟的生活を形成する必要を感じていたことがわかります。彼らは、使徒的な旅から戻ると自分たちの体験を分かち合い、年に一度集会を開いて集い、「会則」をよりよく守るためにはどうすればよいかを話し合ったり、使徒的な活動を組織したりしました（三人の伴侶の伝記 57-59 参照）。

修道院会議は、兄弟たちが兄弟的な交わりを増やすのに絶好の場なのです。なぜなら、この集まりは、兄弟共同体とその構成員一人ひとりが自分たちの召命を理解し、それを実践するのを助けてくれる手段であるからです。修道院会議において、兄弟たちは、自分たちの神との生活と兄弟共同体がどの程度までキリスト

者として、またフランシスカンとしての召命を満たしており、どの程度まで聖霊が、兄弟共同体の建設のために一人ひとりの中で働いておられるかを体験することができます。

修道院会議は、各兄弟が自分固有のカリスマを兄弟共同体全体に益するように実らせ、自分の気持ちや恐れ、心配、問題を、フランシスコが兄弟たちに望んだように、打ち明けるように招かれている場なのです（裁可会則 6 参照）。ですから、コミュニケーション能力、葛藤を解決する力、兄弟共同体を建設する力を促進することによって（1991 年版養成綱領 64 参照・2003 年版養成綱領 115 参照）、兄弟一人ひとりが信頼の雰囲気醸成する責任を持っていることに気づくことが大切です。

フランシスカン・カリスマの実現には組織が必要です。修道院会議はカリスマを表現する唯一の方法ではないにしても、キリストにおいて兄弟的に連帯し、聖霊の働きに心を開き、神のみ旨を共に探し求めるために、兄弟たちに共に集まる機会を与える優れた場なのです。

実際、会憲が修道院会議に与えている多くの、しかも主だった役割の一つは、正に生涯養成です（会憲 137:3 参照）。自分自身の生涯養成に専念する最終的で決定的な責任は兄弟一人ひとりにあるとはいえ、その養成の中心的な場は兄弟共同体であり、生涯養成を促進し、計画し、必要な手段を与えるのは、レベルを問わず、集会に課せられた義務なのです。

「小さき兄弟会における生涯養成」という文書（1991 年）の 64 番（2003 年版 115 番）には、この点について、兄弟共同体が修道院会議の中で、共同体生活と生涯養成プロジェクトを、いつでも役に立つ具体的な目標と手段をもって作成し、吟味し、見直すよ

うに努めなければならないと書かれています。

2. 修道院会議を開く

すべての兄弟共同体の生活において修道院会議が適切であることを考えると、その目的を達成するための十分な準備が重要です。

A. いくつかの提案

修道院会議を成功させるためには、いくつかの前提条件があります。

a. 聖霊に対して開かれた心

兄弟たちが神の現存を信じて集まり、聖霊が兄弟たちを通して何を語りかけようとしておられるのかに耳を傾ける場であることを考えると、修道院会議はきわめて「霊的な」行事です。

フランシスコにとって、神はその霊を、すべての兄弟に、最も単純な兄弟に対しても、お与えくださいます。それゆえに、フランシスコは頻繁に兄弟たちを呼び集め、彼らの助言を求めました（1 チェラノ 30、39 参照）。フランシスコは一人ひとりの兄弟の言葉の中に神の御言葉を感じていたので、兄弟共同体および自分自身の生活が困難な状況にある時や危機的な時に、兄弟たちの助言を求めたのです。この態度は、私たちにも聖霊の御働きに心を開くようにと勧めています。

b. 相互尊敬と相互受容

修道院会議は、兄弟を尊敬することを前提とします。なぜなら、私たちの兄弟共同体においては、兄弟たちは年齢の違いや人種の違いだけでなく、文化的背景や神学的養成の違いを抱え、異なった生活体験を持ちながら、共に暮らすことができるからです。それゆえに、《相互の尊敬を深める必要があります。これにより、より弱い者の遅い歩みを受け入れ、同時に、より豊かな個性への開花を窒息させません》（共同体における兄弟的生活 40 b）。

兄弟共同体に属する一人ひとりの現実に配慮する必要があります。修道院会議に参加する兄弟各人は、最年少の兄弟やまだ備えを十分に受けていない兄弟も含めて、独自の尊厳を持った人間であり、そのように認められなくてはなりません。実際、兄弟一人ひとりがユニークで、独特のかけがえのない存在であり、自分の全生涯を通して育てるべき豊かな賜物や才能を持っています。

c. 相互に与え合い、受け入れ合う心構え

人間はだれでも、自分を成長させ、自己実現させるためには、他者と補い合う必要があります。一人でやっていける人はだれもいません。私たちの兄弟共同体は、自分を捧げ、相手を受け入れる共同体です。だれもが他者から学び、他者と共に成長することができます。他者のために自分を差し出す心構えが、兄弟たちをお互いの賜物へと、恵みへと変えてゆくのです。

《すべての会員にとって必要なのは、兄弟姉妹たちの善を心に抱くことです。そして、他者が与え、分かち合いたいと願ってい

るものを全て受け入れ、また実際に自分たち自身の存在で分かち合う福音的能力を培うことです」(共同体における兄弟的生活 33)。

d. 兄弟的な対話

「兄弟姉妹となるためには、互いに知り合うことが必要です。互いに知り合うためには、毎回より広く、より深い形で触れ合うことがとても重要です」(共同体における兄弟的生活 29)。「交わりは、まさに霊の賜物の分かち合いから生まれます。それは、信仰における信仰の分かち合いであり、そこでは、私たちが共通にするものが主要で本源的であればあるほど、兄弟性の絆がより強くなります」(共同体における兄弟的生活 32)。

修道院会議は、神の召し出しに応じて、同じ生活様式を選んだ人々を呼び集めます。彼らの生活の交わりの最大の動機は、個人的な同情にあるわけでも、似たような考えを持っていることにあるわけでもありません。修道院会議に不可欠のことは、イデオロギーや個人の計画を話し合うことではなくて、聖フランシスコに倣ってキリストに従うという共通の生活プロジェクトの実現について、神の御心はどこにあるかを個人として、また共同体として探ることなのです。

ですから、対話の中でまず重視すべきは、問題を明らかにすること、そして、互いをよりよく知り合って、兄弟共同体の成長過程で出会うさまざまな問題や困難を解決する最も適切な方法を共に探して行くことなのです。

B. 修道院会議の組織的な諸要素

会議の迅速な準備。

会議の準備を充分にするためには、いくつかの要素を心に留めておく必要があります；

- 会議日程を充分前もって知らせておく。
- 扱う議題や検討すべきテーマについて事前に兄弟たちに相談することが大切。
- テーマは会議の数日前に書面で渡しておく。
- 必要な書類や手引はすべて、いつでも見られるようにしておく。
- 兄弟的な雰囲気醸し出し、実りのある対話をもたらすのに適切な場所を提供する。
- 前回の修道院会議の議事録と決議事項をいつでも見られるようにしておく。

a. 会議を始めるに際して

修道院会議がきわめて「霊的な」行事であることに鑑み、兄弟たちは神の御言葉の周りに集められていることに気付くことが大切です。兄弟たちは、個人としても共同体としても、兄弟共同体が生きているその時の状況の中で、神が何を言わんとしておられるのかを自分に問うてみるべきです。ですから、すべての兄弟から実りある、積極的で建設的な協力を得られるように神の助力を願う開会の祈りのすぐ後に、神のお望みを共に聴くために、短い神の御言葉を読むなり、フランシスコ会の源泉資料を引用して読むなりするのは有益です。

b. 前回の会議の見直し

前回の会議の議事録を読めば、前回の会議の決定や提案事項はどのように実践されているかという質問への答えが出てくるはずです。決まった仕事を持っていた兄弟はできたこととできなかったこと、行った決定や約束について兄弟たちに知らせるべきです。

平和で緊張のない共同生活を営むためには、すべての兄弟が兄弟共同体に関する出来事や状況について定期的に知らされることが大変重要です。このようにして、兄弟共同体との、また兄弟共同体内部の絆が強められ、兄弟愛の精神と同じ家族への帰属意識が深められます。

情報についてですが、修道院長はより重要な問題や活動について兄弟共同体に知らせなくてはなりません。修道院の会計係は、収入と支出について、および、実行したプロジェクトや今後実行すべきプロジェクトについて兄弟共同体に知らせる必要があります。また、特定の仕事を持っている兄弟たちはそれについて兄弟共同体に知らせなくてはなりません。

新しい問題とプロジェクトについての対話：

会議の議題は、それぞれの兄弟共同体によっても、その持つ具体的な日々のニーズによっても変わって来ます。会あるいは管区が何らかの議題を検討課題として出してくることもあります。いずれの場合も、議題の順序を決めて、それぞれの問題がその重要性に応じて取り扱われることが大切です。一般的に言って、新しい問題は、緊急なものでない限り、受け付けない方がよいです。それらの問題を扱うには、会議のメンバーの同意が必要です。

しかし、決して忘れてはならないことは、兄弟的生活の主たる形成要素が、建物の建設や維持でもなければ、経済的問題でもなく、また、司牧活動や使徒的活動でもないことです。会議においては、個人として、また共同体としての生活プロジェクトに対する忠実さに関する霊的な議題が最優先されるべきです。そうすることは、必ずしもいつも簡単ではありませんが。

c. 修道院会議の結論

会議の終わりに、取り上げた議題と決定された事項を簡単にまとめ、検討されなかった問題について述べると思います。

会議は、参加し、協力してくれた兄弟たちへの感謝とお終いの祈りで閉会し、その後、夕食や、兄弟的なレクリエーションなどで、にぎやかにお祝いするのが望ましいです。

3. 修道院会議におけるさまざまな役割

a. 修道院長

修道院会議における修道院長の司牧的任務は大変重要です。

1. 修道院長はそれぞれの兄弟共同体のアニメーターであり、兄弟共同体について管区に説明する義務があるので、会議の議長を務めます。しかし、それによって、特に大きな兄弟共同体においては、会議を取りまとめる役割を代表することが妨げられるわけではありません。モデレーター（調整役）がいる場合には、モデレーターが会議の

ダイナミックで客観的な手続きに注意を払ってくれるので、修道院長は、会議の兄弟的な雰囲気や霊的な側面の方により多くの注意を払うことができます。

2. 修道院長はその兄弟共同体の「司牧的」アニメーターとして、異なる意見やグループ間の仲介役となり、兄弟たちの探求のプロセスの「触媒」の役割を果たします。その際、自分の個人的意見や関心を押し付けてはなりません。
3. 決定したり、投票したりする際には、修道院長は会議がその能力の範囲内に収まっているように注意を払う必要があります。すべての関心や客観的で建設的な批判が会議の間中オープンに表明されるべきですが、その一方で、会議が兄弟共同体の調整に圧力をかけるようなことがあってはなりません。

b. モデレーター（調整役）

会議のモデレーターの任務は、すべての兄弟間の相互信頼の雰囲気を醸成し、深めるために非常に重要です。

モデレーターは、会議に参加する兄弟一人ひとりが兄弟共同体に対して何か与えるものや意見を持っていることを確信していなければなりません。

モデレーターは、兄弟たちが誠実な対話に心を開き、兄弟共同体として歩むための独自の道を見出せるように働かなくてはなりません。それゆえに、モデレーターは、兄弟たちの多様性に注意を払い、例外なく全員が発言し、自分の意見や所見を述べるには

どうすればよいかを知らなければなりません。

c. 会議の書記

書記の任務は、取り上げられた議題や、兄弟共同体として合意を得た意見や、会議の決定事項などを書きとることです。書記は、適切な時期に議事録や記録を作成し、兄弟たちに知らせなくてはなりません。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 訓戒の言葉 25 を読む。
2. この文章に照らして：
 - 自分の兄弟共同体の兄弟たちと自分が行っているコミュニケーションのレベルについて考えなさい。
3. 次のことについて自問する：
 - 自分の生活から一在り方と行いから一どのようなことを兄弟共同体の兄弟たちに伝えているか。
 - 修道院会議で自分はどのような参加の仕方をしているか。
 - 修道院会議に参加するに当たり、どのような準備をしているか。
 - 兄弟に向かって批判的な事を言う場合に「愛をもって」言えているか。
 - 自分の個人的な生活プロジェクトにおいて、コミュニケーションの側面を自分はどのように考えているか。

共同体としての考察のために

1. 次の文章を読む：
 - 1 チェラノ 30、39。
 - 共同体における兄弟的生活 29、32、40。
2. 次のことを自問する：
 - 兄弟共同体では、どれくらいの頻度で修道院会議を開いて

いるか。その準備と開催に当たっては、どのような原動力が働いているか。

- コミュニケーション、つまり、意見だけでなく、特に気持ちや魂や心の伝達は、「生活の共同体」の普通の表現です。社会からも、心理学からも、また、修道生活の神学からも求められているこの新たな努力に対して、私たちは心を向けているか。私たちはそのことを価値あることと信じているか。
- コミュニケーションの分野で最も難しい問題点は何か。
- 修道院会議はあなたにとって生涯養成の良いチャンスと思われるか。なぜ、そう思うか。
- 修道院会議の質を高めるために、具体的にどのようなことをしたらよいと思うか。それらの提案を**兄弟的生活プロジェクト**にどのように組み入れたらよいか。

V 兄弟的生活と生涯養成

今日ほど、あらゆる環境において急速な生活の変化が押し寄せてきていることに気づかされる時代はないのではないのでしょうか。文化および社会生活の変化、かつてないほど近くつながり、「グローバル化」した世界の変化、そして、教会における変化（たとえば、典礼や神学の変化）は、私たちに新しい道と考え方を示してくれています。しかし、同時に、それらの変化は重荷にもなっています。なぜなら、人間は、生活していくために、また、容赦ない時代の進歩についていくために、絶えず適応しなければならないからです。小さき兄弟としての私たちの生活もまた、その様式の見直し方においても、重点の置き方を時代に即したものにしたりやり方においても、最近数年間に大きな変化を体験してきました。現代の生活状況は急速に変わりつつあります。変化に取り残されたくなければ、私たちはこの流れに乗らなければなりません。しかし、このように前進するためには、生活環境に絶えず適応してゆくための大変な努力が、個人的にも共同体としても求められます。このように適応するということは、兄弟一人ひとりを、修道院、管区、そして延いては世界中の兄弟共同体全体を、生活のあらゆる分野で危険にさらします。福音の教えを現代世界にもたらしめためには、私たちは自分自身を刷新し、心理学的にも、職業的にも、宗教的にも、神学的にも、そして霊的にも成熟しなければなりません。適応と成熟に向けてのこの努力は、特に生涯養成においてなされる必要があります。

聖フランシスコに倣ってイエス・キリストの御跡に従うという

私たちの召命が求めていること、それは、召命を私たちが生きている現代の環境の中でよりよく理解するために、個人としても兄弟共同体としても成熟することなのです。

会憲は、生涯養成のことを、フランシスコの模範に倣い、福音へのあかしと召命への選択を絶えず進展させてゆく道であると述べています（会憲 135 参照）。生涯養成は個人としての生活および修道院や管区の兄弟共同体の一員としての生活すべてを含むものです（会憲 137 参照）。会憲はまた、生涯養成が「フランシスカン霊性に根差したものでなければならず」、小さき兄弟の人格的、霊的、教義的、職業的、役務的なあらゆる側面の進歩を促すために、兄弟としての生活の全体を考慮すべきであるとも述べています（会憲 136 参照）。

法的・霊的文書である会憲のほかに、1993年10月にアシジで開かれた会全体の生涯養成担当者会議の後の1995年に養成学問総事務局より発行された「小さき兄弟会における生涯養成」¹という文書は、本会のあらゆるレベルにおいて生涯養成を促し、それについて定め、奨励しています。この文書を取り上げるこの項では、生涯養成の中身について詳しく説明し、すべての兄弟が、それぞれの状況の中でそれを実行して行く具体的な可能性について深く考えるようにと促しています。

1. 生涯養成、それは回心の一つの過程

a. 生涯養成は一つの過程である（小さき兄弟会における生涯養成

¹編集者註：「小さき兄弟会における生涯養成」は2008年に改訂された。本テキスト「あなたがたは皆兄弟である」（2004年）が公開されたのが2010年であったため、本文とのズレが生じてしまった。

8)

自然科学を発端とする人間の生活は、大人の生活をも含めて、現代では絶えざる成長の現実、すなわち、それぞれの年齢を経て絶えず発展して行く現実と考えられています。それゆえ、生活様式や行動様式は、その人の生活のリズムに絶えず即しているものでなくてはなりません。個人のこのリズムは、人間の変化やキリスト者としての生活とフランシスカンとしての生活の変化、そして、兄弟一人ひとりの職業的、役務的状況などに見られる依存関係を考慮する必要があります。

兄弟たちのこの個人的な状況を考慮することにより、兄弟共同体は、一人ひとりの兄弟が生活のこの躍動感を体験することができるように、そして、あらゆる発展や新しい段階がもたらし得る困難や混乱を克服することができるように、適切な手段を提供します。常に一つの過程にあるという事実を認めることは、絶えず何かと直面することを伴います。そして、必ずしもいつもたやすいとは限らないこの状況を、成熟さをもって、そして、できることなら、ダメージを最小限にして引き受けなければなりません。

だからこそ、生活の変化を受け入れ、人間として、キリスト者として、またフランシスカンとして成熟するのを助けてくれる生涯養成が必要なのです。この成熟の過程は、兄弟個人に必要なだけでなく、兄弟共同体全体にも必要なものです。兄弟共同体は、その構成員である兄弟によって形成され、兄弟たちが共に暮らすための、独特の心理学的、人間的、キリスト教的なきまりを持っています。生活を分かち合う場としての兄弟共同体は、それゆえ、新しい共同生活と生活の交わりが常に完全であることを考えれば、

生涯養成の場でなければなりません。

生涯養成の目標は、あらゆる側面（身体的、心理的、情緒的、精神的、知的側面）における個人の成熟であり、共同生活やフランシスカンの召命や宣教活動というあらゆる表現における兄弟共同体の成熟なのです。その意味で、生涯養成は、単に最新情報を提供するコースではなく、一つの態度表明と言えます。

b. 絶え間ない回心（小さき兄弟会における生涯養成 39）

フランシスコの召命の出発点は回心であり、それによって彼は兄弟たちと共に落ちこぼされた人々の間で福音的な生活を送るようになったのでした（遺言参照）。その回心、つまり聖書で言うメタノイアは、フランシスコの生活の中で決定的な要素となっていたのと同じように、すべてのフランシスカンの召命の実現にも重要な役割を果たしています。フランシスカン生活は、イエス・キリストのうちに示された神の教えに一層近づくために、すべての兄弟とすべての兄弟共同体の心と生活の絶えざる回心を必要とします。私たちが置かれた状況の中に、福音の教えを実践するどのような可能性があるかを理解するためには、主の霊が必要です。その意味で、フランシスカン生活は、私たちに回心の過程にあるようにと求めています。つまり、キリストとの関係において成長し、メタノイアへと変容することを求めているのです（養成綱領 57 参照）。

神の御心に対して「はい」と答え、主に完全に奉獻することは、この回心の過程を通して、個人の生活の各段階で新たにされて行きます。神の慈しみのメッセージに対して心を向けることは、フ

ランシスカンの悔い改めの一部を形成しており、言葉と行いを通して和睦への道をも開くものです。

生涯養成が目指さなければならない回心の目標と成果は、自分自身を本当の意味で小さき者とすること、自分個人の召命を生きること、そして、福音的生活への熱意を新たにすることなのです。

c. 忠実であることが要求される（小さき兄弟会における生涯養成 40 と 41）

生涯養成は忠実であることが必要だから生まれたのです。自分自身に対して、自分自身の価値観や豊かさに対して忠実であるためには、絶えざる配慮が必要です。そうすれば、それらが縮こまったり見失われたりせずに、発展して生活の変化に適応することができます。また、日常生活の中で挑戦を受けたり、失望したり、失敗したりしても、うんざりしないで神に忠実であるためには、深い献身が必要です。最後に、私たちの召命とミッションは、絶えず自分自身を刷新する忠実さを私たちに求めています。私たちに求められている忠実さとは、身に付けた修道生活の外面を維持するだけの固定化した忠実さではありません。それでは、私たちは動かない優雅な鍾乳飾りになってしまいます。私たちに求められているのは、新しい時代の挑戦に応戦する術を知っている、そして、私たちの置かれた具体的な状況の中で読まれた福音の真理に基づいて私たちの行動や伝統を変える術を知っている創造的な忠実さです。その意味で、忠実さとは柔軟性を意味します。維持しなければならないのは、私たちの召命の真実であり、人間として、キリスト者として、フランシスカンとしての価値観です。そ

れゆえに、私たちの忠実さは、常に聖霊の導きに心を開いていなくてはなりません。生涯養成は、フランシスカン生活の基盤となるものを絶えず発見し、それらの価値を私たちの人生のさまざまな段階や環境で実践して行く柔軟性と能力を成長させる助けとならなければなりません。生涯養成は、このように、実りのある、希望に満ちた生活を見いだすのを助けてくれるのです。

生涯養成は、フランシスカン生活を養い、適切なものにし、霊的な無関心と疲れを避けるために必要不可欠なプロセスです。自分に与えられた挑戦を理解し、それに応える術を知って、兄弟共同体において、教会において、そして世界において自分の役割を果たすために、すべての兄弟が努力することが大切です。それを達成するためには、生涯養成は、必要な知識と能力を身につけるよう助けねばなりません。

生涯養成を通じて身に付けたこの忠実さの目的は、フランシスコの模範に倣って、本当の小さき兄弟としてイエス・キリストに従い、福音的生活を徹底的に生きることです。

2. 生涯養成、それは兄弟共同体に不可欠のもの

a. 生涯養成と兄弟共同体（小さき兄弟会における生涯養成 48、49、51）

召命が具体的に実践されるのは、さまざまな体験が可能な兄弟共同体においてです。兄弟的な生活の視点から見れば、生涯養成は技術ではなくて、兄弟たちが互いに世話をし合う方法です。共同責任に与えられた賜物として、兄弟共同体全体が、それ自体で

生涯養成の場となっています。それは、全員がその中で共通の召命を共に生きることと専念する限りにおいてですが。相互に教育し合い、刺激し合い、個々の状況に注意を払うこと自体が、生涯養成の表現となっているのです。しかし、このような人間として、キリスト者として、フランシスカンとしての共通の生活への配慮のほかに、兄弟共同体においては、私たちの召命とミッションが求めている知識と能力を深めるように、兄弟たちは真剣に努力する必要があります。召命を共に生き、働くことによって兄弟共同体を証しするためには、共同体としての準備が必要です。兄弟共同体内部での生活と外部との関係は、いずれも、生涯養成を通しての準備を必要としています。

b. 開かれた兄弟共同体(小さき兄弟会における生涯養成51－53)

小さき兄弟たちの兄弟的生活は、教会および被造物との対話に心を開き、フランシスカン家族の異なるメンバーや支部、たとえばクララ会や在世第三会や他のフランシスカングループに対しても特に開かれた態度を培います。しかし、召命によって、兄弟共同体は世界や教会のあらゆる階層の貧しい人々や落ちこぼされた人々に対して特に開かれた場となります。このように開かれた場となるためには、歓待の心、連帯の心、愛の心が必要です。それは、神と民と共に、神の民のために生きるためです。そうした開かれた心があれば、兄弟的な対話が可能ですが、そのためには、ある程度の準備が要ります。たとえば、人に耳を傾けるために、世界に存在するさまざまな苦痛に対する感受性を磨くために、他の文化を尊重するために、他者を人として、また、神からの賜物

として感謝して受け入れるために、いつでも他者の助けになろうとする姿勢を取るためには準備が必要なのです。生涯養成は、こうした幅広い分野において、刺激となり、必要な準備を与える場となります。

この視点から見ると、生涯養成は、地方教会や世界の教会の生活に絶えず関心を持ち、世の中と自分の文化に深く根ざして、より忠実な心で、チャンスを活かし、効果的に神の御言葉の福音を宣べ伝えるために、大きな刺激となるものです。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 次の文章を読む：

- 会憲 137:1、養成綱領 40、57（107：2003 年版）、70（123：2003 年版）、小さき兄弟会における生涯養成（1995 年版）8-46、60、61。

2. これらの文章に照らして：

- 生涯養成に対する自分の理解と生涯養成が求めている自分の態度について考えなさい。

3. 次のことを自問する：

- 日々の具体的な生活の中で、「主なる神に仕えることをいつも再び始める」ために、自分はどのようなことをしているか。
- あなたが毎日過ごしている生活のリズムは本当に養成の途上にあると言えるか。
- 一番最近神学の本を読んだのはいつか。どのくらいの頻度で、最新の神学や専門知識を身につけるコースに参加しているか。
- 生涯養成が求めていることに応えるために、あなたの**個人的生活プロジェクト**はどのような手立てを考えているか。重視すべきは何か。あなたなら、それらをどのように実践するか。

共同体としての考察のために

1. 次の文章を読む：

- 会憲 135-137、養成綱領 64（115：2003 年版）、小さき兄弟会における生涯養成（1995 年版）62-71、全世界をキリストの福音であまねく満たすために III:127-132、奉献生活 67、71。

2. これらの文章に照らして：

- 生涯養成の必要性、その要求するところ、その手段について皆がどのように考えているか兄弟共同体で話し合いなさい。

3. 次のことを自問する：

- この兄弟共同体は生涯養成の精神で生きているか。初期養成が生涯養成につながり、養成を受ける人が生涯を通じて教育を受ける心構えを身につけているか。
- この兄弟共同体は恵まれた場所となり、日常生活は兄弟たちの生涯養成の主な手段となっているか。兄弟共同体生活が現実において本当に養成の過程となるためには、どのような変化が必要か。
- この兄弟共同体は生涯養成プロジェクトを持っているか。生涯養成は、兄弟共同体の生活プロジェクトにおいてどのように捉えられているか。

VI 兄弟的生活、それはコミュニケーションと対話の場

1. 対話

相互性と善意とに培われた私たちの兄弟的生活は、自分自身に対して、世界に対して、そして神に対して心を開くことを前提とします。現代人に私たちが与え得る最大の贈り物、それは、言うまでもなく兄弟共同体の賜物です。私たちは兄弟共同体を、競争や暴力のない、家庭的な雰囲気の中で建設しようと努めています。そこにおいては、すべての兄弟が他の兄弟のために働き、心を砕くのです。ある意味で、人々は修道者も信徒も、私たちの中にいつも自分の受けるべきものを求めています。つまり、兄弟として扱われること、イエス・キリストのうちに神に愛されることです。そして、彼らと交わるために最も大切なこととして、正義と平和の必要性、祈りと霊的側面の必要性、困難な時に彼らの権利と連帯を徹底的に守る必要性が浮かび上がって来ます。

私たちにとって、福音宣教をするということは、自分が生活する場と環境の中で絶えず自らを福音化することなのです。各兄弟と兄弟共同体は、神の国を証しするために、他者に心を開かなければなりません。心を開くことの第一の形態は、自分自身に対してであり、すべてはそこから始まります。それはつまり、神のことや他者のことのために心に向けるためには、まず自分自身が本来貧しい存在であること、見るからに「無価値な存在」ですらあることを認めなければなりません。兄弟的な生活は、神との出会いの第一の秘跡へと変えられます。それは、小さき者たちや貧し

い人たちの世界と不可分のものなのです。神秘思想家であるフォーリーニョのアンジェラの言葉を借りれば、私たちは「世界と神の現実を身ごもっている」とも言えます。

行動や連帯にふさわしい技術や手段について語る前に、基本的な対話の必要性から始めなければなりません。一人ひとりがまずこの内面の対話から始めましょう。神と世界が会う福音という秘密の部屋から。偉大な聖書の掟は神の愛、隣人愛、そして自己愛に関連しています。対話という重要な関係はそうした愛から流れ出ます。私たちの兄弟共同体が、自分自身へと、他者へと、そして神へと心を開くようになるには、どうすればよいのでしょうか。本物の対話のための場を内面性と兄弟的な関係性から生み出すにはどうすればよいのでしょうか。

2. 言葉をつくる！

私たちの生活を具体的に表現する言葉を共に見いだす必要があります。明瞭でも不明瞭でもかまいません。明瞭にしようとする一人ひとりの試みが、関係性を成長させるのです。一番大切なことは、対話を始める基準点を持つことです。単なる事実や出来事の情報ではないやりとりをとにかくやってみたら、どのような表現ができるのでしょうか。生活を本当の意味で分かち合うためには、何を言う必要があるのでしょうか。

3. コミュニケーションを学ぶ

「兄弟的」と言う表現は、兄弟たちがその中でコミュニケーシ

ョンするためにつくりあげた組織を越えるものです。そこには、コミュニケーションのあらゆる側面が含まれています。言葉によるものであろうと、無言のものであろうと、互いに耳を傾け合い、表現し合うことを学ぶことが前提となります。語り方や沈黙の仕方（話さずにいる方法）には、いろいろあります。そこから、言葉による、そして、言葉によらない関係性への、沈黙への、身振りへの、行動への、絶えざる注意が生まれるのです。兄弟的なコミュニケーションは、言葉によるコミュニケーションよりもはるかに広範囲のものです。対話によって互いに教育し合うには、どうしたらよいのでしょうか。精神的打撃と高揚を、合意と不一致を、観念的な会話と心の打ち解けた会話を、怠惰と熱意を、回心の場と抵抗の場を、どうやって見分けることができるのでしょうか。どうすれば、伝えあっていることの背景や広さをしっかり把握できるのでしょうか。コミュニケーションから互いの福音化を図るにはどうすればよいのでしょうか。

それには、共同参加という具体的な状況で、その状況を最大限に生かして、互いに会うということ以外に方法はありません。兄弟共同体の表現方法を生み出すためには、言葉と沈黙によるコミュニケーションを学ばなくてはなりません。

4. 兄弟共同体は語ることを許される

兄弟共同体の活性化の務めとは、グループの魂とプロセスを開花させることです。どの生活共同体も、その価値観と実現について独自の理論を持っています。私たち小さき兄弟にとって、このことは、共に伝統を大切にし、生き方をつくりあげ、生き方を現

代にふさわしいものにすることを意味します。私たちの言語は、神について、他者について、福音的選択について、そして社会的・教会的連帯についての私たちの考えを示すものです。たとえば、あるグループにおいては、人々や教会とのコミュニケーションやつながり、使徒職や在り方のタイプを検証するためには、「関係性の図」を作成するのが一番重要だと思われます。

兄弟共同体にはそれぞれ独自の記念があります。歴史的な座標があり、危機や成長の時があり、過去を振り返る時があります。この記念は、しばしば3年ないしは6年で定められ、管区規模のより大きな記念として刻まれます。兄弟共同体の中で現在を理解し、未来にもっと活動的であるために、過去を振り返ることは可能でしょうか。フランシスカンとして、また修道者としての生活の重要な点を私たちはどの程度知っているのでしょうか。

兄弟共同体は、それを形成する人々の豊かさと弱さによって、そのプロジェクトを日々つくりあげています。このプロジェクトには、独特の色彩、アクセント、優先順位、除外すべきものがあります。それぞれの兄弟共同体が、フランシスカンの福音的プロジェクトの解釈と応用について、重要な意見を持っています。規則や規定に満足しているグループは聖書が語っている「生ぬるさ」に陥る危険があります。生活が私たちに敢えて求めている兄弟的な表現は、フランシスカンの通俗的なことばと、それ以上にはるかに広い神の御言葉に刻まれています。そこにおいてこそ、私たちが誓約した生活プロジェクトに対して共に応えてゆくための新しい何かが生まれるのです。

5. 実践：頭と心をつつにする

知性と感情の調和がなければ、あらゆる関係はバランスを損ないます。私たちの関係においては、理性と情熱の間には補完性がなければなりません。同じ兄弟会の構成単位であっても、私たちは全員が異なる心理学上のタイプを考慮に入れ、頭と心のバランスを維持する責任があります。意見や価値観から感情を排除してはなりません。むしろ、その逆です。生活を見直すためには、兄弟共同体内でのコミュニケーションや社会とのコミュニケーションを定期的に吟味しなければなりません。すべての兄弟は、この点に注意を払うべきです。現実の生活で会合を持ったり、意見交換をしたりすれば、いろいろな疑問が出て来ます。たとえば、

- 私たちが互いのために求めている善をどのようにして判断することができるか。また、私たちの社会的な良識は？
- 私たちにはどのような適応能力と変化力があるか。不意の出来事に対処するにはどのような能力が必要か。どこまで待つことができるか、どこまで互いに我慢し合うことができるか。困難な時を共に切り抜けることができるか。
- 私たちの対話は、他のことを後回しにして、為すべきことを優先しているか。
- 感謝の気持ちや、祝う気持ち、慈しみの気持ちをどのようにして測ることができるか。
- 話すのが苦手な兄弟が会話に参加できるようにするにはどうすればよいか。
- 兄弟たちは互いをどのように呼び合っているか。どんな名前をつけているか。互いにどのように注意し合っているか。

どのように冗談を言っているか。たがいに対する愛情をどのように表現しているか。ユーモアのセンスを持っているか。

- 他人のこと、たとえば、女性や見知らぬ人、一緒に働いている人や奉仕している人のことをどのように言っているか。
- 私たちの中に、女性蔑視する人や性差別主義者、人種差別主義者や司祭に反感を持っている人がいるか。
- 私たちの中に、あるいは私たちの環境の中に、暴力や権力の形態があるか。
- 友情（共同体内の、あるいは外部の人との）の問題にどのように取り組むべきか。

6. 関係性の持つ強み

したがって、すべてが、私たちの間に重要な絆を築き上げる役に立つのです。本来あるべき形で実践された兄弟的な対話は、関係性を強め、互いに配慮し合い、他者を正す力を持っています。兄弟たちは、友人を選ぶように選ばれたわけではありませんが、賜物として受け入れられます。大切なことは、兄弟関係から生まれる言葉が、私たちの求めている本質的なものを表していることです。その意味で、兄弟たちは神との出会いの秘跡となることができます。

考察のための提言

個人的考察のために

1. ヨハネ 4:4-43、1 コリント 12:7 を読む。
2. これらの文章に照らして：
 - 霊の賜物が本当の意味ですべての兄弟のものとなるように、またすべての兄弟の啓発に役立つように、それを他の兄弟と分かち合う方法について考えなさい。
 - 他者との深いコミュニケーションを妨げるような生活環境とはどのようなものか。
3. 次のことを自問する：
 - 自分の生活をどの程度まで他の人に話しているだろうか。それをどのように伝えているだろうか。なぜ、伝えるのか。自分はコミュニケーションをどの程度真剣に考えているか。どこで、だれとのコミュニケーションがしやすく、また、どこで、だれとのコミュニケーションが難しいか。それはなぜか。
 - 自分はコミュニケーションを通して何を期待しているか。他の人を喜ばせるためか、その場を活気づけるためか、他の兄弟に認めてもらうためか、それとも、自分の言うことをちゃんと受けとめて貰うためなのか。
 - 兄弟たちに召命に関する体験を伝えようとする時、どのような困難を感じるか。困難を感じるとすれば、どうしてか。
 - コミュニケーションを活発にするために、また、よりよくするために、何か具体的な側面を強化するように、あるいは

は、何か具体的な対策をとるように求められていると感じるか。どちらを求められているか。

- これらの側面や対策はどうすれば考えられるか。それらを個人的な生活プロジェクトに組み入れるにはどうすればよいか。

共同体としての考察のために

1. 次の文章を読む：

- 未裁可会則 5:15：兄弟たちの間で、また他の人たちの間での振る舞い。
- 2 チェラノ 155：兄弟たちはどのようにして和解するか。
- 共同体における兄弟的生活 29－34：共に成長するためにコミュニケーションを図る。

2. これらの文章に照らして：

- コミュニケーションとは何か考えなさい。
- 兄弟共同体において特に重要と思われる、深くて積極的なコミュニケーションはどんな時だったか思い起こしなさい。

3. 次のことを自問する：

- 兄弟共同体の中はどのような雰囲気が漂っているか。フランスカンの兄弟共同体に求められていることは、深い人間関係がそこに存在することです。そのためには何が必要かを私たちは理解しているか。それらは、兄弟共同体の中にあるか。
- 兄弟共同体の中のコミュニケーションを私たちはどのような

に評価するか。それは、兄弟共同体のメンバーを夢中にさせるようなものか。兄弟共同体の各兄弟の感じ方では、コミュニケーションはうまく行っているか。

- 信仰を伝えることは、共同体を団結させる要の一つです。私たちの信仰のコミュニケーションはどうなっているか。信仰を伝えるために、どんな手段を使っているか。どんな手段が役に立つか。その中で単なる日課と化しているものはどれか。また、つくり直さなければならない手段はどれか。
- 兄弟たちが仲間同士でコミュニケーションを図り、召命の識別を行うことにより、兄弟共同体として成長することは可能か。
- 兄弟共同体でのコミュニケーションを難しくしている主な問題は何か。
- 兄弟的生活プロジェクトを用いて、兄弟的なコミュニケーションを強化するにはどうすればよいか。

あなたがたは皆兄弟である

VII 共同体の識別

1. フランシスカンの様式

たとえばイグナチオの選定のように、決断を通して神の御心を果たそうとする識別の試みがあるのに対して、フランシスカンの伝統は、キリスト者としての生活全般を根本的に改革することを提案しています。「訓戒の言葉 12」は、具体的な選択や取るべき第一歩よりも、精神とかメンタリティーについて語っています。《神のしもべが主の霊をもっているかどうかを、次のようにして知ることができます。主がそのしもべを用いて何かの善をなさった時、彼の肉がそれを誇らず、一というのは、肉はあらゆる善に逆らうものだからです。一かえって、彼の目に、自分がますますつまらない者に映り、他のすべての人より小さい者と思うなら、主の霊を持っています》。この文章の中で言わんとしているのは、確たる決断をして安心することよりも、メンタリティーや行動を変えることの大切さです。源泉資料は、霊性と識別の実践を述べていますが、その方法は示していません。それは、各兄弟の生活の中で徹底的に従う福音的プロジェクトと同じものです。「兄弟レオへの手紙」と「ある管区長への手紙」は、良心の自由と兄弟的関係の重要性が共に損なわれない識別というものについて語っています。

「訓戒の言葉 12」に見られるフランシスカン的な識別について語るということは、主の御働きの**認識**について語ることであり、したがって、気づきについて、また、反省について語るということでもあります。この**認識**は主の御働きに**心を向けること**を前提とします。つまり、**自らを投げ出す**体験をするためには、善をな

すことの重要性を明確に示すということです。また、他者という時にありがちな有頂天になったり、得意になったりするのを避けるために、**謙遜でいることの本質**を見極めることでもあります。そこに突然逆説が現れます。私たちの生活の中に他者のための場がなければ、神の御心を呼び起こすことはできません。理性と心とは体験の中で共存すべきものなのです。識別は、正に行動によって達成され得るものですが、そこには、それ以上のものが含まれています。つまり、生活における大胆さと絶えざる回心の能力です。

2. 個人として、また共同体としての挑戦

「識別」(discern) という用語の語幹がその機能を示しています。この言葉を良く理解し、受け入れ、そしてそれに基づいて行動するためには、自分の現実には注意を払うことが大切です。そのように考えれば、識別に入るということは、内面の声に耳を傾けるという意味での従順の行為と言えます。私たちは神の御心を果たす前に、神に心を向ける（「心の耳をそばだてる」）のです。

識別について語る場合、まず頭に浮かぶのは個人の探求であり、私たちの生活に神が何を求めておられるかの探求です。日常の繰り返しにせよ、大きな出来事にせよ、この体験から逃れられるキリスト者はいません。同じことが小さき兄弟にも言えます。祈りを向上させたいとか、仕事を変えたいとか、目上の人の意向に沿いたいとか、あるいは、辛い試練を乗り越えたいなど、いろいろな場合がありますが、そこでいつも生じる願いは、ただ一つ、つまり、神がお与えになる状況を見極め、理解し、愛したいという

ことです。一人ひとりが自分に対して、また神に対して誠実であろうとするその努力で測られます。私たちは人生において決定的な識別の体験を個人でしたことがあるでしょうか。そこで何を学んだでしょうか。私たちの助けとなったのは、どのような要素でしょうか。それにどのような時間を費やしたでしょうか。それで祈りに変化が生まれたでしょうか。自分の生活について必要な距離が保てたでしょうか。他人に相談したり、打ち明けたりする必要があるでしょうか。しるしの読み取りはどうだったでしょうか。新しい形の同伴に頼ったでしょうか。決めたいという意志、そして、一貫した行動を取りたいという意志があったでしょうか。

兄弟たちの集まりの多くは、たとえ名称は違っても、識別の集まりです。私たちの間にある相違点を携えた集まりでは、私たちの生活を照らしてくださる主の光を発見することがよくあります。すべての人がこの体験をしたと言っています。私たちのだれもが、修練者になったばかりの人から、年長者や賢者までもが、主の霊が自分の中で、また、兄弟共同体の中で働いておられることを実証するように求められています。

繰り返しますが、大切なことは、決定に至る手続きだけではなく、**神の御計画を実行するように兄弟共同体を導こうとするグローバルな視点**なのです。生活を見直そうとするすべての試み、源泉資料を忠実に探ろうとするすべての試み、神の御言葉とのすべての比較、権威ある者との信頼に満ちたすべての対話は、神の御心を見極めるチャンスであると同時に、自分の心に**神の霊が住まわれている**かを理解しようと努めるチャンスでもあります。共に識別するということは、集まりのために時間を割き、継続し、相手の言うことに耳を傾け、そして、当然のことながら、実践する

ことを必要とする体験なのです。私たちは識別を兄弟共同体の中で実践してきたでしょうか。兄弟共同体においても、個人での識別で見られるのと同じような要素が見つかったでしょうか。神の御心を探すにあたって、私たちはどの程度まで相互責任というものを認識しているでしょうか。私たちは集まりの中でどのように共同体として考えることができたでしょうか。私たちの共同体意識を徐々に高めることができるような方法、プロジェクト、源泉資料の参照の仕方などを見つけることができたでしょうか。言い方を変えれば、私たちは共に識別することの重要性を信じているでしょうか、それとも、識別体験を個人的な行為に限定することを望んでいるのでしょうか。私たちの共同体は、この分野で同伴を必要としているのでしょうか。

3. 初期の兄弟共同体における識別

チェラノとボナヴェントゥラは、霊的視点からも実生活の視点からも再読に値する識別の二つの主要な体験について述べています。どちらの体験記にも、未来に寄せる真剣な関心と、**人々の間で生活すべきか人里離れた所で生活すべきか**と悩む姿が示されています。

1 チェラノ 35 では、兄弟たちはスポレットを通してローマから帰るところでした。彼らは自分たちの生活の計画に対する口頭での認可を教皇から受けたのでした。そこに書かれている文章によれば、兄弟たちはスタートする熱意に燃えていました。「神からの慰めだけが彼らの喜びとなりました。」それは、貧しく何もない生活への修練期のようなものでした。彼らの苦悩は、正確な文脈の中

で捉えられています：彼らは「聖性の中で誠実に生きることを誓いたい」と願いました。グループのだれもが認めるリーダーであったフランシスコは、兄弟共同体の問題を祈りの中で解決しました。チェラノはフランシスコの聖性を中心に据えてはいますが、兄弟たちの識別が、自己放棄とキリスト者として完全であろうと誓ったその望みから生まれていることは明らかです。

大伝記 12:1-12 に描かれた出来事は、そのおよそ 20 年後に起こりました。ここでは、同じ苦悩がフランシスコ個人のものとして描かれています。ボナヴェントゥラは、フランシスコがある疑問をめぐって何日もひどく悩んでいたと記しています(大伝記 12:1)。歴史的に見ても、そうした悩みが霊的な兄弟たちの危機を示していたことを私たちは知っています。祈りによってフランシスコは、その疑問を兄弟たちに打ち明けることを決意します。ボナヴェントゥラの物語は、それとなく祈りの素晴らしさとその効用を述べています。その一方で、兄弟との対話はその疑問を解決してはくれません。フランシスコが選んだ二人の霊的な兄弟、シルベストロとクララが、この疑問を解決します。二人とも祈りに熱心な人でしたが、「説教を行うこと」をはっきりとフランシスコに勧めます。この場合もまた、一連の相談があり、祈りがありました。ここでも感情が理性を伴っています。

上記の二つの場合、話は違っていても、問題は重大なことであり、祈りの中で示され、皆で話し合われています。そして、一旦答えが出ると、フランシスコとその仲間たちはすぐさまそれを実行に移しました。結論は同じものでした：「隠遁して祈ることよりも、人々の福音化が大切」ということです。決定の瞬間は、どれほど速く訪れようとも、着実な実践と長い試練を必要としました。

二つのエピソードは、内面の生活と共同生活を厳しく吟味することの重要性を示しています。それは、初期の情熱に溢れた時でも、何年もの進歩と体験を経た後でも同じことです。兄弟的生活は常に発展するものであり、決して単なる日課になってはなりません。

これら二つのエピソードに示された知恵は、フランシスコと兄弟たちの疑問が如何に彼らの生活と密接につながっていたかをも示してくれています。識別は生活の中で、生活を通して行われるものです。その中で聖霊が働かれ、具体的な不安や新たな注意、成長したいという望みを通して働きかけられます。どの共同体も、「主の霊」に照らして生活を見つめ、見直すための時間が必要です。当然のことながら、識別においてどの共同体にも求められていることは、状況を理解するためばかりでなく、状況を改善し、成長するためにも、必要な透明性を保つことです。また、真理を探究して互いの話しに耳を傾けた後は、気づき得た真理を実行に移す勇気が伴わなくてはなりません。真理は私たちを自由にしてくれます。私たちは過去の識別から少しでも学ぶことができますでしょうか。識別を終えた時、それを祝うことができますでしょうか。

4. 聖霊のしるしとそうでないしるし

聖フランシスコの書き物が個人レベルで挙げていることは、共同体レベルにもあてはまります。霊が働いておられるかどうかのしるしは、私たちがすべてをお返しすべき神を第一に考えているかどうかで測られます。

もう一つのしるしは、反対する人たちや迫害する人たちの中でも、あるいは相互愛のない環境の中でも、愛が増しているかどうか

かです。フランシスコなら、従順の外でさまようために他の兄弟を見捨てることがないようにと語ったことでしょう。もう一つのしるしは、**平和を失うことなく堪え忍ぶ**ことです。つまり、平和な心を維持しながら何が起こっても堪え忍び、立ち向かうことです。その後続く態度が**謙遜と自己放棄**であり、それは、相互に仕え合うことと他者を認めることの中に示されます。自己放棄とか自分の望みを捨てるように見えることは、活動において神と他者のために**自分を差し出すこと**へと変えられます。このしるしは、自己が神聖な生活を妨げるのなら、自己中心的な思いあがりからの脱却であると同時に、自己の「私」からの解放なのです。最後に、神と他者への忠実とは無関係に教会と権威者と聖職者への**忠実**へと敷衍されます。

「訓戒の言葉」のいたるところで、このしるしとは逆のしるしが見られます。たとえば、物品や名声、自分の望みや活動の私物化です。これは、自分を兄弟共同体から引き離そうとする試みです。否定的な表現を使えば、フランシスコはこれらを行いや生活の模範を伴わない「**怠惰と驕り**」であると言っています。忍耐の欠如と心の平和の喪失、執着、妬み、怒り、やすやすと気分を害することはすべて、逆のしるしです。他者を犠牲にして、あるいは教会と教会の代表者に不満を持ちながら「私」という自分の立場にこだわることも逆のしるしに含まれます。これらの逆のしるしは、兄弟的精神の中に主の霊がおられないことを測るバロメーターです。私たちは、自分の生き方、対話の仕方、互いを担い合う態度、この世での自分の居場所の見つけ方に対して、気を配るように求められています。良く知られているチェラノとボナヴェントゥラの伝記に書かれた悩みは、今や、私たちの心の奥底と兄

弟共同体の両方に向けられています。私たちはこの本質的な事柄に目を向けているのでしょうか。私たちはなぜ共に暮らしているのでしょうか。私たちは、根本的な選択 (option) についてちゃんと対話ができているのでしょうか。共同で回心しているのでしょうか。私たちは兄弟共同体として、福音をどのように捉えているのでしょうか。福音的な生活を私たちの出会う人々に広めてゆくよう、預言的な精神を維持するために、私たちはどこまで喜んで出かけてゆく気持ちがあるのでしょうか。

私たちが生活の選択 (life option) において忠実に前進しようとする意図がある時に初めて、共同体の識別は意味を持ちます。様式や方法や具体的な進展は、この根本的な意図から生まれます。「遺言」の中で言っているフランシスコの言葉に立ち返りましょう：主は私に兄弟たちをお与えになりました。主が私に兄弟たちをお与えになったのは、福音を実行するため、そして、とりわけ、福音それ自体を私たちの生活の中で識別することを学ぶためです。

考察のための提言

個人的考察のために

1. 次の文章を読む：

●使徒言行録 2:15 以下

●十字架上の主の御前で捧げられた祈り、訓戒の言葉 3、

12。

2. それらの文章に照らして：

●自分の受けた召命に対する態度について、また、日々新たにするように求められている応答について考えなさい。

3. 次のことを自問する：

●私は自分の兄弟共同体とその一人ひとりのメンバーの持っている成長する能力を信じているだろうか。**個人的生活のプロジェクト**の作成と見直しは、個人的な識別の時間となっているだろうか。

共同体としての考察のために

1. 次の文章を読む：

●マタイ 16:4、使徒言行録 15、テサロニケ I:5:21。

●現代世界憲章 4、11、奉獻生活 37、フランシスコ会の今 III:1-3、全世界をキリストの福音であまねく満たすために III:3。

2. 次のことを自問する：

●自分がこれまでいつもそうして来たからと言って、決まっ

たやり方に固執していないだろうか。

- 「挑戦する気さえあれば」という表現は、どのような意味を持っていると思うか。この態度に求められている具体的な措置とはどのようなものか。私たちにはそれをやる心構えがあるか。それはなぜか。
- 兄弟的生活プロジェクトの作成は、私たちの真の姿、行動、態度を共同体として識別する機会となっているか。

付録

Ⅰ 規則に定められた修道院会議

各修道院の荘厳誓願を宣立したすべての兄弟によって構成される修道院会議は、修道院の兄弟的な統治を形成する、と会憲に定められています（会憲 240:1、242 参照）。「兄弟的な統治」という表現に注目しなければなりません。なぜなら、それは、兄弟的生活を構成するに当たり、兄弟たちが修道院長に協力して、参加し、意見を述べる役割を強調しようとしているからです。

修道院会議の責務は通常次のように定められています：

- 計画すべき事柄を、主に対話によって評価し、共通の基準で選択すること。すべての兄弟の調和と積極的で責任ある参加を促すこと。兄弟共同体または兄弟各人が引き受けた責任を吟味し、評価すること。重要な問題に取り組むこと（会憲 241 参照）。
- 見せかけでない、实际的で親密な共同体を培うために、院内での生活を適切に整えること（会憲 46 参照）。
- 活動、福音化、司牧の発展のために心を砕くこと。兄弟的交わりを確かなものにし、促進するために、それぞれの活動について関心を持って情報を集めること。

修道院会議の持つこうした責務から、一連の具体的な義務が生じます。実際、修道院会議は、以下のことのために働きます：

a. 兄弟共同体の権威を行使する事柄：

- 聖体祭儀や共同で行う祈りについて、時間やその他の詳細を定めること（総則 8）；
- 時代と地域の状況に応じた悔い改めのわざの方法を定めること（総則 17）；
- 管区規則や議事規定に定められたすべての事柄において行動すること（総則 242：2）。

b. 修道院長がその職務を果たすのを助ける組織として：

- 院内での生活を整えるに当たって（会憲 46）；
- 閉域の範囲を定めるに当たって（総則 25:1）；
- 臨時支出を定めるに当たって（総則 252:2）；
- 財貨の譲渡や債務契約する場合に（総則 254）；
- 社会や教会、本会および兄弟一人ひとりの真の必要を見極めた上で、兄弟たちが引き受けるべき活動を定めるに当たって（会憲 112:2）；
- 生涯養成を活性化し、整序するに当たって（会憲 137:3）。

Ⅱ 本会の規則に定められた修道院長と修道院会議の役割と責任の範囲

1. 序

このテーマを取り上げるのは、修道院長の役割を深く理解し、果たすことが必要であるからです。ここでは、特に、ある程度の不安や混乱や曖昧さを解消してくれるような、いっそうの明晰さをもって取り組むことを狙っています。

このテーマにはある程度の不安が伴いますが、それは、奉獻生活の基本的な価値について一面的な理解しかできていないことに起因しています。

a. 自分自身の成長と未来と選択に対して責任を持つ主体としての、個人の重要性。この個人の首位性を間違って理解した結果、以下のようなことを引き起こした：

- 一方で、修道院長の存在と活動を、修道生活の体験そのものにおいてかけがえのない「手段」として受け入れることが難しくなった；
- 他方で、個人的な領域に修道院長が介入することを不適切な干渉と考えるようになった。

b. 共同体生活における共同責任と共同参加の重要性を間違って理解した結果、次のようになった：

- 一方で、修道院長一人で決定したことを受け入れるのが難しくなった；

- 他方で、修道院長の役割を取り上げると、大抵は、表面的な秩序を保つ管理者の役割に堕してしまう。

c. 修道者の従順の重要性：

- 一方で、従順はしばしば個人の尊厳の矮小化として、自己決定の障害として考えられている；
- 他方で、従順よりも、個人の良心による反発が優先するが、その良心にはエゴイズムや脅迫や被害妄想が隠されている場合が多い。

このように、修道院長の権威と兄弟各人の自由な主導権とは互いに対立しており、「達成された現実」、ほぼ完全な自律、「民主平等」の擁護は、役割と義務の多様性を排除している。その結果：

- 一方で、修道院長の権威の意識とそれに伴う結果が歪む；
- 他方で、修道院長の「権威の放棄」が、兄弟的生活に甚大なダメージを与える。

この場合、フランシスカンの体験の中で、「権威と宗教的な意味での従属」との関係、「権威と共同責任」との関係、「権威と従順」との関係の神学と霊性について深く研究する必要があります。

この問題を踏まえると、会憲と総則が示していて、ここで取り上げているテーマに関する規則の深い意味を理解しなければなりません。

このテーマを考察するにあたり、二つの部分に分けました。一つは修道院長の役割と責任の範囲、もう一つは修道院会議の役割

と責任の範囲で、いずれも、かなり系統立てられた規則に従っています。

2. 修道院長の役割と職責

修道院長の役割は会憲 175 条 3 項に明確に規定されています：《修道院長は直轄権をもって修道院を統治する》。これらの言葉の意味は明白です。つまり、統治するとは、正しい方向に導くことであり、指導することであり、まとめることであり、矯正することであり、決定することです。修道院は修道院長の権威の下に置かれた兄弟共同体なのです（会憲 232 参照）。直轄権とは、職務に伴う権限のことです。権利と義務が、修道院長のこの役割に伴います。権利とは、統治するための必要条件であり、義務とは統治する義務のことです。修道院長は、この権利と義務を逃れることはできません。それは、自分の役割に忠実でないからであり、また、修道院長により統治される兄弟共同体の相関的な権利と義務にも違反するからです。

修道院長の役割は、会憲 237 条に明確に示されています：《修道院長にとっての重大な義務は、共同体および兄弟たちの善益を育み、修道生活と規律を注意深く配慮し、活動を指導し、真の兄弟性の精神に基づいた積極的かつ責任ある従順を、兄弟たちの間に推し進めることである》。

明らかに会憲の起草者は、修道院長がその役割を果たすに当たって求められるやり方についても注意深く指摘しています。たとえば、会憲 185 条 1 項ではこう記されています：《修道院長は、その権限の行使によるつとめを謙虚に行い、任務を果たすに当た

っては神のみ旨に素直なものとなり、兄弟たちを神の子として世話し、人格の尊厳における彼らの自発的な従順を育む」。職務範囲（職責）は、役割から派生します。会憲の起草者によれば、職責は、「単独で、または修道院会議と共に」（会憲 175:3）という二つの様式で行使されなければなりません。

A. 単独で

「単独で」行使された修道院長の職責または職務範囲は、三つの中心部分に集約されます。すなわち、a) 兄弟たち一人ひとりに関すること、b) 共同体に関すること、c) 共同体の対外的な事柄に関することです。

a. 一人ひとりの兄弟に関すること

- 兄弟たちの善性を育むこと（会憲 237）。
- 共同体において、兄弟たち一人ひとりの必要に誠意をもって心を配る。そして地域、季節、個人の状況に応じて、余分な物を許さず、また、必要な物を拒むことのないようにする（総則 20）。
- 責任感のある積極的な従順を促し、兄弟たちの意見を個別に聞き、それを奨励する。そうした意見を求め、それを奨励すると同時に、何を為すべきかを決定し、命令する権限は常に修道院長にある（会憲 45:2、185:1）。
- 体の不自由な兄弟、病気の兄弟、高齢の兄弟を十分に世話し、見舞い、一人ひとりの精神的、物質的必要に適切に応じ、彼らを助ける（会憲 44、総則 22:3）。

- 管区理事会の同意を得たうえで、兄弟共同体の外部の活動を行っている兄弟を見守る（総則 58:2）。
- 金銭の使用を許可する、または拒否する。また、各兄弟が受け取ったり使用したりする金銭の明細な報告を求める（会憲 8:1、82:2）。
- 最善と思われる方法で、後援者に助けを求める許可を与える、または拒否する（総則 34:1）。
- 修道院から離れる許可を与える、または拒否する（総則 228:1）。
- 管区規則に従って、旅行の許可を書面で与える、または拒否する。その許可書に旅行の期間と場所を明記する（総則 39）
- 兄弟たちに与えられる休暇は、共同体の職務を考慮して、また同時に、私たちの清貧の目的と精神にかなうように調整される（総則 40）。
- 賢明な警戒と兄弟的な忠告とによって、できる限り悪を未然に防ぎ、ぐらついている者を強める（会憲 252:1）。
- 兄弟一人ひとりが、聖フランシスコの会則と遺言を、会憲と総則と共に所持するよう配慮する（総則 1）。

b. 兄弟共同体に関すること

- 共同体の善益を育む（会憲 237）。
- 共同体を「キリストにおいて結ばれた家族のように」築き上げるよう努める。そこにおいて、最も優先されなければならないのは、神を求め、愛することである（会憲 45:1）。
- 貞潔をより確実に守る手段として、兄弟共同体の中で兄弟

愛が育まれるように心を配る（会憲 9:3）。

- 兄弟共同体の通常の生活が養成としての役割を果たせるように誠心誠意、配慮する（会憲 137:2）。
- 霊的講読、特に聖書の講読にふさわしい時間が、共同でも与えられるように配慮する（総則 11:1）。
- 兄弟共同体の中で適当な時期に会憲を読み、その意味を共同の集まりの中で研究するように配慮する。
- 会則をよりよく理解し適応するために採択された総会や管区会議の文書を読むように配慮する（総則 2:2）。
- 本会の重要な出来事が、兄弟たちのみならず他の人々にも知られるように、誠意をもって配慮する（会憲 49）。
- それぞれの修道院のための仕事を促進し調整する。しかし、修道院長の優先する職務が、様々な仕事についている兄弟たちの一致を図り、それを保つためにあることを忘れてはならない（総則 32:1）。
- 正当な理由があるときにのみ、一時的に閉域の範囲を変え、または解除することができる（総則 25:2）。
- 分院をしばしば訪れ、兄弟たちができる限り互いの愛に育つように結び合わせる（総則 232:2）。
- 静修の際や他の適当な機会に、生活刷新のための集会を持つように配慮する。兄弟たちはそこで、修道院における修道生活を養う上で、また兄弟愛を高めるために、必要かつ有益と思われる事柄について話し合う（総則 10）。
- 修道院会議で扱われる議題を提案し、それを兄弟たちに前もって知らせる（総則 243:1）。
- 修道院会議を招集し、議長を務める（会憲 240:1、総則 244）。

- 経済状態を記した会計簿を修道院会議に提出し、審査を受ける（総則 255:1, 2）
- 修道院に属するすべての財貨の管理に対して、厳しく注意を配る。さらに、財貨の管理の業務全体が秩序をもってなされるよう、配慮する（会憲 250）。
- 会計係が修道院長の指図のもとに従属して財貨の管理にあたるよう配慮する（会憲 246:1）。
- 財貨の譲渡と債務に関しては管区会議で定められたことに従い（総則 252:1）、臨時支出に関しては管区理事会で定められたことに従う（総則 252:2）。
- 修道院で工事を行う場合には、総則に定められたことに従う（総則 252:3）。
- 修道院が負債や経済上の負担義務を引き受けたり陥ったりすることのないように用心する（総則 250）。
- どのような蓄財をも注意深く避ける（会憲 82:3）。

c. 兄弟共同体の対外的な事柄に関すること

- 年に一度、兄弟共同体の状態を管区長に報告する（総則?）。
- 修道院備品目録と聖堂祭具目録、および自己の任期中の収支報告を、管区会議と新院長に対して提示する。修道院会議もしくは修道院顧問会は、これらの目録と報告に署名する（総則 255:1）。
- 律修第三会の兄弟姉妹、ならびに聖フランシスコの精神に基づく在俗会や使徒的活動会のために、霊的援助を与え、また福音宣教活動における協力体勢を推し進めるよう努める（会憲 59）。

- 思わぬ状況の悪化によって重大な危機に立たされた兄弟たちや管区に対して、兄弟愛と隣人愛からも当然の務めを果たす（総則 23:2）。
- 貧しい人々の必要を見失わないようにする（会憲 82:2）。

B. 修道院会議と共に

修道院会議で行使される修道院長の職責は、二つの異なる方法で遂行される。すなわち、同意によるか、それとも助言を求めるかである（会憲 176、総則 243:1、244、教会法 119）。

a. 修道院会議の同意を得た上での職責

- 見せかけでない、实际的で親密な共同体を培うために、院内での生活を適切に整える（会憲 46）。
- 管区規則の定めに従って閉域の範囲を定め、管区長の承認を得る（総則 25:1）。
- 臨時支出に当たっては、管区理事会の定めに従って、修道院長が修道院会議の同意を得なければならない（総則 252:2）。
- 財貨の譲渡、もしくは債務契約をする場合には、管区会議の定めに従う（総則 254）。

b. 修道院会議に諮った上での職責

- 兄弟たちが引き受けるべき活動は、人々、教会、本会および兄弟一人ひとりの真の必要を見極めたうえで、修道院会議で協議して範囲を定める。しかし、どの仕事を選ぶか、

どの兄弟に任せるかを決定し任命する、管区長および修道院長の権限を妨げない（会憲 112:2）。

- 生涯養成を活性化し、整序し、また諸規則の定めに従って、必要な手立てを講じる（会憲 137:3）。
- 兄弟が本会外で職務もしくは任務を担うことに對し、許可を与える、または拒否する（会憲 137:3）。

[注] 修道院会議が与える同意や助言のほかに、会憲 177 条に定められた事柄に常に配慮しなければなりません。《管区長および修道院長は、同意や助言を求めるよう法には規定されていない場合でも、兄弟共同体に関わる問題については、進んで兄弟たちの意見を聞くべきである。そのような問題について決定を下すのは本人であるが、兄弟たちの一致した意見から簡単に離れるべきではない》。

修道院長に役割を忠実に果たさせ、その任務を厳密に遂行させるために、会憲と総則はいくつかの要請事項を示すと同時に、職務を遂行しなかった場合の罰則も示しています。

C. その他

A. 修道院長に求められること：

- 修道院長は、自分に委ねられた職務を正しく果たすのを妨げるような任務を、自ら引き受けてはならず、また管区長もそのような任務を負わせてはならない（総則 236）。
- 修道院長が、管区長の許可を得たにせよ、長期間不在になる場合は、その不在によって、兄弟たちが何ら実害や不都

合をうけたりしないように、忘れずに手配を整えておく
(総則 27:1)

- 管轄地域を離れる修道院長は、たとえ短期間であっても、
代行を法定された者にその旨を伝える (総則 27:2)

兄弟たちに求められる主なこと：

- 兄弟たちは、修道院長と固く一致して、共同体を「キリストにおいて結ばれた家族のように」築き上げるように努める。そこにおいて、最も優先されなければならないのは、神を求め、愛することである (会憲 45:1)。
- 兄弟たちは、より重い任務を担っている修道院長に対して進んで協力し、率直に意見を述べ、信頼をもって心からの決定を実行に移す (会憲 45:3)。
- 《守るべく主に約束したすべてのことにおいて》自分の意志を修道院長に従わせる (会憲 7:1)。

B. 罰則

義務を怠った修道院長に課せられる罰則に関しては、総則 258条～262条をご覧ください。

また、次のようにも規定されています。自分の修道院長を激しく愚弄し、あるいはその命令を公に軽蔑し、あるいはその権威への反抗をたくらむ者は、その罪の重さに応じて、必要ならば、本会における総ての職務および任務の一定期間の剥奪をも含む、相応の罪と償いの業が課される (総則 257:2)。

3. 修道院会議の役割と職責

教会法は、修道院会議を設けることを修道会の固有法の自由裁量権に委ねています（教会法 632）。そこで、会憲は、荘厳誓願を宣立したすべての兄弟によって構成される修道院会議（会憲 242）は、修道院の「兄弟的な」統治を形成する（会憲 240:1）と規定しています。「兄弟的な統治」という表現が強調されているのは、修道院会議の役割が厳密に「管轄権」に関わるものでなく、修道院長の通常の権限に対する全会員の意見及び参与を反映させるものであることを明示するためです（教会法 633）。それゆえ、修道院長の「権限」の範囲を定めるにあたって、固有法は修道院長の通常の権限に取って代わるようないかなる役割も修道院会議に委ねることはできません。会憲と総則の持つ規範的側面は、この観点から理解されねばなりません。

修道院会議の役割は一般的に以下のように明示されています：

- 主として対話を通じて、取りかかるべき計画を共同の観点から検討し、推し進めること、皆の間に心の一致と積極的かつ責任ある協力を育むこと、兄弟共同体あるいは個々の兄弟によってなされた働きを吟味し、評価すること、重要な問題を扱うこと（会憲 241）。
- 兄弟たちと共に、見せかけでない、実際的で親密な共同体を培うために、院内での生活を適切に整える（会憲 46）。
- 仕事、福音宣教および司牧の進め方についての問題を扱うだけでなく、兄弟的な交わりを築き、強めるために独り一人の働きの報告を、関心をもって求める（総則 32:2）。

修道院会議の役割から一連の任務が生じます。修道院会議はその役割を行使するに当たり、修道院の最高権威者として（稀なケース）、あるいは、審議もしくは諮問のための議決権を持って、修道院長の通常の権限に関与する有機体として（ほとんどすべてのケース）行動する。

a. 最高権威者として、修道院会議は次のことに介入する：

- 聖体祭儀および時課の典礼（教会の祈り）やみことばの祭儀、あるいは本会の性格に適ったその他の祭儀など、共同で行う祈りについて、時間やその他の詳細を決める（総則 8）。
- 時代と地域の状況に応じた悔い改めのわざの方法を定める（総則 17）。
- 管区規則に定められたすべてのこと（総則 242:2）。

b. 修道院長の通常の権限に関与する機関として、それゆえに、修道院長の任務遂行を助ける機関として、修道院会議は本付録 I の b 項に指摘されたすべての状況において介入します。

[注] 総則は管区レベルで修道院会議にさらに二つの任務を委ねています。すなわち、

- 聖職叙階について意見を述べる（112:2）。
- 管区会議で審議に値する事柄があれば、適当な時期に管区理事会に対して提案する（167:1）。

4. 結論

結論として、個々の兄弟共同体の生活における修道院長と修道院会議の役割と任務の正しい、建設的な行使に役立ついくつかの要点をまとめておきたいと思います。

a. まず、修道院長の役割と修道院会議の役割の間には、特徴的かつ補完的な深い関係があることを忘れてはなりません。

●修道院長は修道院の《統治》(potestas regiminis)の通常権と固有権の個人的主体である(教会法 131:1-2)。これに対し、修道院会議は通常、修道院長の《統治権》の行使に関与し、協力する機関である(教会法 633、129:2)。実際、会憲の175条第3項にはこう記されている《修道院長は本会憲と諸規則に従って、単独で、または修道院会議と、あるいはもし修道院顧問会があれば、法定されている事柄に関して、同顧問会と共に、直轄権をもって修道院を統治する》。

●修道院長が《直轄権をもって修道院を統治する》(会憲 175:3)ならば、修道院会議は《修道院の兄弟的な統治を形成する》(会憲 240:1)。ここに、修道院長の役割と修道院会議の役割の(統治、協力、諮問および支援機関としての)補完的な側面を見ることができる。

b. 一方、修道院長は、自分の職責の範囲内で「決定する勇気」を持つこと、そして、その決定に対して責任を、それがどれほど重いものであっても、引き受けることを求められます。優柔不断と

疑念は兄弟共同体の生活を損ないます。

c. 修道院長はまた、本来自分に属する職務を管区長に任せてしまう傾向を克服するように求められています。

d. 最後に、修道院長は、兄弟的な奉仕として理解されている権威というカリスマのフランシスカンの側面を決して忘れてはなりません。

このようにして、修道院長の自分の役割に対する福音的でフランシスカン的で、しかも法的な忠実さは、主から委ねられた兄弟共同体の霊的・人間的成長を保証するのです。

(編集者註：総則参照箇所は 2010 年版の条項を記載しています。)

あなたがたは皆兄弟である

あなたがたは皆兄弟である

会憲第三章の生涯養成に関する手引き
小さき兄弟会養成学問担当総本部事務局
2004年 ローマ

日本語版発行日：2013年5月19日 聖霊降臨
発行者：106-0032 東京都港区六本木 4-2-39
フランシスコ会日本管区
電話 03-3408-8088 FAX 03-3401-3215
<http://www.ofm-j.or.jp/>